

平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡

— 中京区大津町における埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

合同会社 アルケス

平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡

— 中京区大津町における埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

合同会社 アルケス

例 言

1. 本書は京都府京都市中京区大津町 663 他に所在する平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡の報告書である。
2. 本調査は、所在地の開発工事計画に伴って行われた試掘調査によって遺構が確認されたため発掘調査が行われた。
3. 本調査は、株式会社かねわ工務店（代表取締役 田丸政則）の委託を受けた合同会社アルケス（代表社員 持田 透）が実施した。
4. 本調査の発掘期間は平成 29 年 7 月 10 日から平成 29 年 9 月 4 日である。
5. 本調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと行った。
6. 本調査の体制は以下のとおりである。
調査主体： 合同会社アルケス
調査員： 持田 透
調査補助員： 谷本 和幸
7. 本報告書の編集は持田が行った。
8. 本報告書では以下の地図を調整・編集した。
京都市地形図（1：2500）「御所」京都市都市計画局
9. 本報告書で示す座標・方位は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T. P.）に基づく数値である。
10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書に掲載した写真は、遺構を持田、遺物を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。
12. 本調査にあたり、以下の方々に助言をいただいた。（敬称略）
山田邦和、西山良平、網伸也、竜子正彦、関晃史、吉崎伸、内田好昭
13. 出土した遺物は、関連する図面、写真とともに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管されている。

凡 例

1. 写真図版の縮尺は任意である。
2. 報告書に掲載した遺物番号は実測図、観察表、写真図版にそれぞれ対応している。
3. 本報告書で使用した土色は、以下を使用した。
『新版 標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修
4. 出土した遺物の年代は、以下を参考にした。また遺物の時期表記は小森氏の編年に依拠した。
土器編年とその年代観は図1とする。
小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀—』

奈良時代 750頃	平安時代						鎌倉時代		室町時代			安土桃山	江戸時代			明治	
840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740代頃	1820代頃					
京都 I	京都 II	京都 III	京都 IV	京都 V	京都 VI	京都 VII	京都 VIII	京都 IX	京都 X	京都 XI	京都 XII	京都 XIII	京都 XIV				
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

図1 土器編年・年代観

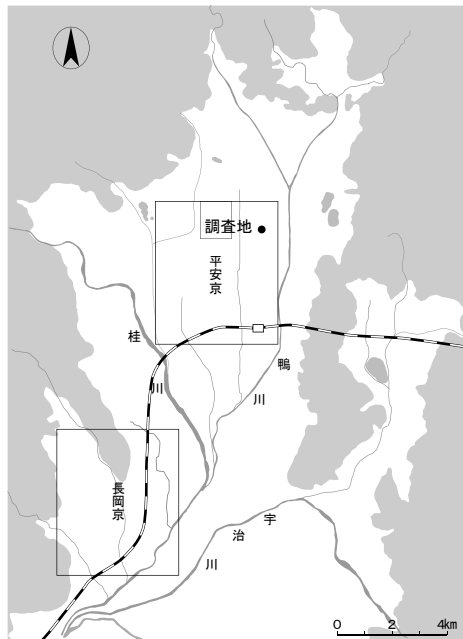


図2 調査地位置図

目 次

1. 調査経過	1
2. 立地と歴史的環境	1
3. 遺構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概略	4
(3) 第1面の遺構	4
(4) 第2面の遺構	7
(5) 第3面の遺構	9
a. 第3面1期(鎌倉時代の遺構)	9
b. 第3面2期(平安時代の遺構)	10
4. 遺物	13
(1) 平安時代から鎌倉時代の遺物	13
(2) 室町時代から安土桃山時代の遺物	16
(3) 瓦・その他瓦質製品	21
(4) 石製品	23
(5) 金属製品	23
5. まとめ	25
(1) 鳥羽天皇御所(大炊殿)の雨落ち溝について	25
(2) 鎌倉時代の地下室について	26

図 版 目 次

図版1	第1面	江戸時代の遺構
図版2	第2面	室町時代の遺構
図版3	第3面	1期 鎌倉時代の遺構
図版4	第3面	2期 平安時代の遺構
図版5	第2面	個別遺構図1
図版6	第2面	個別遺構図2
図版7	第2面	個別遺構図3
図版8	第2面	個別遺構図4
図版9	第2・3面	個別遺構図
図版10	第3面	1期 個別遺構図1
図版11	第3面	1期 個別遺構図2
図版12	第3面	1期 個別遺構図3
図版13	第3面	2期 個別遺構図1

- 図版14 第3面 2期 個別遺構図2
- 図版15 第3面 2期 個別遺構図3
- 図版16 1 調査区南半第1面 (北から)
2 調査区南半第2面 (北から)
- 図版17 1 井戸136 (東から)
2 井戸60 (東から)
3 井戸136 井戸枠部 (東から)
- 図版18 1 調査区北半第1面 (南から)
2 調査区北半第2面 (南から)
- 図版19 1 土坑302 (南西から)
2 井戸304 (東から)
3 井戸438 (南から)
- 図版20 1 調査区全景第3面 (北から)
- 図版21 1 地下室370 (北西から)
- 図版22 1 地下室370 (北から)
2 地下室370 (北から)
- 図版23 1 地下室370 南壁釘出土状況 (北から)
2 地下室370 西壁釘出土状況 (東から)
3 地下室370 北壁釘出土状況 (南から)
4 地下室370 東壁釘出土状況 (西から)
- 図版24 1 雨落ち溝100 (北西から)
2 雨落ち溝100 (北西から)
3 雨落ち溝100 (東から)
- 図版25 1 柱穴142 (西から)
2 柱穴141 (北から)
- 図版26 出土遺物1
- 図版27 出土遺物2
- 図版28 出土遺物3
- 図版29 出土遺物4
出土遺物5
- 図版30 出土遺物6
出土遺物7
- 図版31 出土遺物8
出土遺物9
- 図版32 出土遺物10
出土瓦

- 図版33 出土石製品
 出土金属製品 1
 図版34 出土金属製品 2

挿 図 目 次

図 1	土器編年・年代観	
図 2	調査地位置図	
図 3	調査区配置図	1
図 4	調査風景	1
図 5	現地説明会風景	1
図 6	調査対象地と周辺遺跡図	2
図 7	調査区東壁実測図	5
図 8	第 1 面 個別遺構図	6
図 9	出土遺物実測図 1	14
図10	出土遺物実測図 2	15
図11	出土遺物実測図 3	17
図12	出土遺物実測図 4	18
図13	出土遺物実測図 5	20
図14	出土遺物実測図 6	21
図15	出土瓦拓影・実測図	22
図16	石製品実測図	23
図17	金属製品実測図	24
図18	大炊殿建物配置図	26
図19	地下室370復元図、釘位置図	28

表 目 次

表 1	遺構概要	4
表 2	遺物概要	13
表 3	出土遺物観察表	29
表 4	出土瓦観察表	35
表 5	出土石製品観察表	35
表 6	出土金属製品観察表	36

1. 調査経過

今回の発掘調査は京都市中京区大津町内の土地開発に先立って行った。文化財保護法第93条に基づく届出を受け、京都市文化財保護課による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、対象地の東側に遺跡が遺存することが確認され、420㎡の発掘調査が指導された(図3・6)。合同会社アルケス(代表 持田 透)は開発事業者(株式会社かねわ工務店 代表取締役 田丸政則)からの委託を受け、発掘調査を実施することとなった。北側に残された建物の解体と同時並行に調査を行ったため、北側と南側に分けた反転調査とし、南側から調査を開始した。

調査は平成29年7月10日から表土掘削を開始し、3面の調査を行った。遺構面ごとに京都市文化財保護課の検査を受け、平成29年9月4日に終了した。なお、平成29年8月20日に調査の成果を近隣住民向けに説明会を行い、約50名の参加者があった(図5)。

また、調査の経過において遺構の広がりを確認するために調査地中央東側へ2m、南北長3mに渡って調査区を拡張した。そこで確認した遺構(地下室)と調査地南で検出した遺構(雨落溝)は京都市文化財保護課の指導により部分的な現地保存の対象となった。対象となった2か所の遺構は不織布と真砂で保護し埋め戻しを行った。

2. 立地と歴史的環境

調査地は北に丸太町通、東側に間之町通に接する立地で、丸太町通を挟んで京都御苑に面する。平安京の条坊では左京二条四坊二町跡にあたり、貴族階級の邸宅が多い地域である。中世以降も居住域として利用され続けた場所であると考えられる。また平安時代以前は、烏丸丸太町遺跡の範囲



図3 調査区配置図 (1:500)



図4 調査風景



図5 現地説明会風景

であり、弥生時代から古墳時代を中心とする集落が営まれたと考えられる。

平安京左京二条四坊二町跡は鳥羽天皇の御所とされた大炊殿（第二期）にあたる。もともと左京二条三坊十五町に御所があった（第一期大炊殿）が、不吉とされて東隣の権大納言源俊実の邸宅を天承3（1112）年に交換して移転したとされ、同年6月19日に移転を開始し同年10月19日に完成したとされる（『中右記』）。しかし天承5（1114）年8月に焼失、翌年再建されるも翌年の天承7（1116）年8月に再び焼失し移転された、とされる。すなわちこの地に御所が設けられた時期は4年間で、その間に2回の失火があった。

その後中世までの宅地の所有者は不明であるが、16世紀末に豊臣秀吉の京都改造によって左京二条四坊二町の敷地を東西に分割する間之町通が開かれたため、近世以降町屋が展開していき現在に至る。

これまで左京二条四坊二町内では本格的な調査が行われておらず、試掘調査によって中世の遺物が見つかった。なお、左京二条四坊二町周辺の主な調査は以下の調査があり、平安時代以前から江戸時代までの状況が明らかとなっている。1では、江戸時代の九条池の一部が検出された。2では、弥生時代後期から古墳時代の流路、平安時代前期から中期の東洞院大路路面および東側溝、鎌倉時代の井戸・土器溜、室町時代の溝・土壇・柱穴など、江戸時代の東洞院通・間之町通に面した町屋が検出され、江戸時代の町屋の規模・構造が明らかとなった。3は七町北辺で平安時代中期の大規模な土壇が検出された。4は弥生時代から飛鳥時代の流路、平安時代前期から中期の大炊御門大路路面および南側溝・井戸・溝・土壇・柱穴、平安時代後期から鎌倉時代の大炊御門大路路面

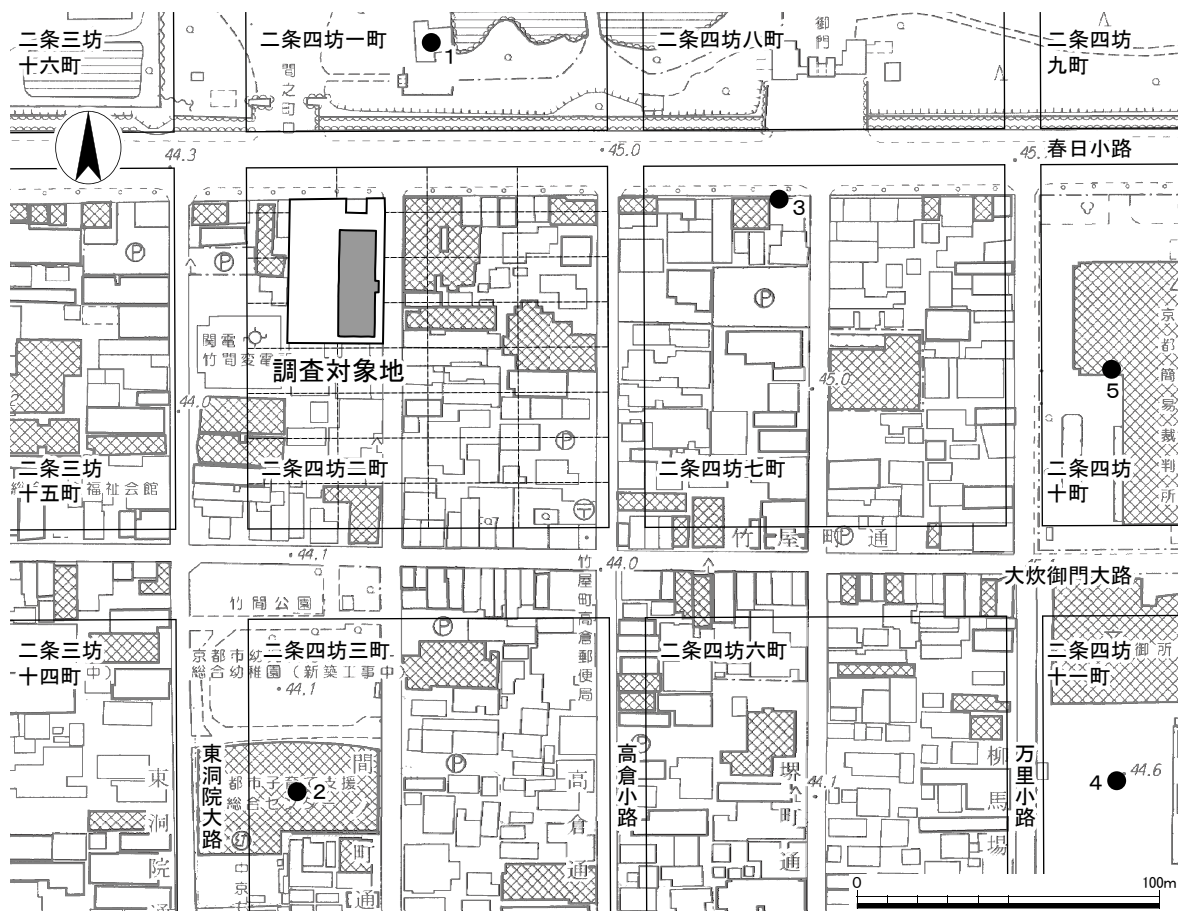


図6 調査対象地と周辺遺跡図 (1:2,500)

および南側溝・井戸・溝・土壙・柱穴、室町時代の溝・柵・土壙・柱穴、桃山時代から江戸時代の建物・石室・土壙などが検出された。遺構の検討から、平安時代後期から室町時代の四分一町規模の宅地や、江戸時代の大炊御門大路に面した町屋の変遷が明らかとなった。5は飛鳥時代以前の流路や縄文時代の土器棺墓をはじめ、平安時代から江戸時代までの邸宅（武家屋敷）・町屋の区画が広範囲で明らかとなった。

調査地一覧

- 1 久世康博 1984 「左京二条四坊」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 2 内田好昭・高 正龍・堀内寛昭 2000 「平安京左京二条四坊 1」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 3 堀内明博 1983 「左京二条三・四坊」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 4 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広 1996 「平安京左京二条四坊」『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 5 上村和直・山本雅和 2001 『平安京左京二条四坊十町 京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第 19 冊 （財）京都市埋蔵文化財研究所

3. 遺構

(1) 基本層序 (図7)

現地表面 (調査地東に隣接する道路面) から約 1.4 m までを掘り下げて調査を行った。地表面より 0.5 m 下では焼土と炭層が広がっていた (1・4 層)。以下、砂利層 (12 層)、黒褐色泥砂層 (27・28 層)、黒褐色泥砂～黒色シルト質土 (38・39・40 層)、灰黄褐色シルト層 (59 層)、灰白色砂礫層 (60 層) を順に確認した。砂利層 (12 層) は調査区全体で 10～40cm 確認でき、調査区西側ほど厚く堆積していた。灰白色砂礫層は調査区全体で確認でき、拳大の礫を多く含む。

調査は、26・27・28 層上面を第 1 面、37・38、40 層上面を第 2 面、57・58・59 層上面を第 3 面として調査した。第 1 面では江戸時代中期以降、第 2 面では室町時代後半から安土桃山時代、第 3 面では平安時代中期から鎌倉時代の遺構を検出した。第 3 面の上面では炭を多く含む黒褐色泥砂を確認しており、火災処理層と考えられる。なお、地表面付近で確認した焼土と炭層 (9 層) も火災処理層と考えられ、18 世紀の天明の大火によるものと考えられる。また砂利層 (12 層) は江戸時代中頃と考えられる鴨川の洪水痕跡である。

(2) 遺構の概略

今回の調査では平安時代から江戸時代までの遺構を検出した (表 1)。以下、調査した遺構面順に特筆すべき遺構を詳述する。

(3) 第 1 面の遺構

江戸時代中期以降を中心とする遺構面である。井戸や地下室などを検出した (図版 1)。また遺構面上面で礎石と考えられる扁平な石を検出したが、建物を復元することはできなかった。

井戸 17 (図版 1) 調査区南で検出した。井戸の直径は 0.95 m、井戸の掘方は短軸長 1.56 m、長軸長 1.67 m を測る楕円形である。深さは約 4 m まで掘削したが底までは未掘である。0.12～0.45 m の川原石を円形に組んでいる。埋土からは土師器、陶磁器が出土した。遺構の時期は京都Ⅻ期である。

井戸 8 (図版 1) 調査区中央で検出した。井戸の直径は 0.78 m、井戸の掘方は短軸長 1.61 m、長軸長 2.00 m を測る楕円形である。深さは約 4 m まで掘削したが底までは未掘である。0.20～0.30

表 1 遺構概要

時代	遺構	備考
平安時代	雨落溝 100、土坑 115、溝 312、溝 555、土坑 343、土坑 366、土坑 368、柱穴 513、柱穴 541、溝 640	雨落溝 100 は大炊殿に関連する遺構
鎌倉時代	建物 3、建物 4、建物 5、建物 6、溝 400、土坑 490、井戸 438、地下室 370、土坑 140、集石 590、柱穴 320	地下室 370 は木檣構造
室町時代	建物 1、柵 1、井戸 60、井戸 136、井戸 300、井戸 304、溝 340、溝 90、溝 170、溝 176、土坑 27、土坑 302、土坑 163、土坑 270、土坑 283、集石 29	
江戸時代	井戸 17、井戸 8、井戸 258、井戸 254、井戸 247、井戸 12、井戸 2、石組 287、地下室 4、地下室 238、地下室 244、土坑 72	

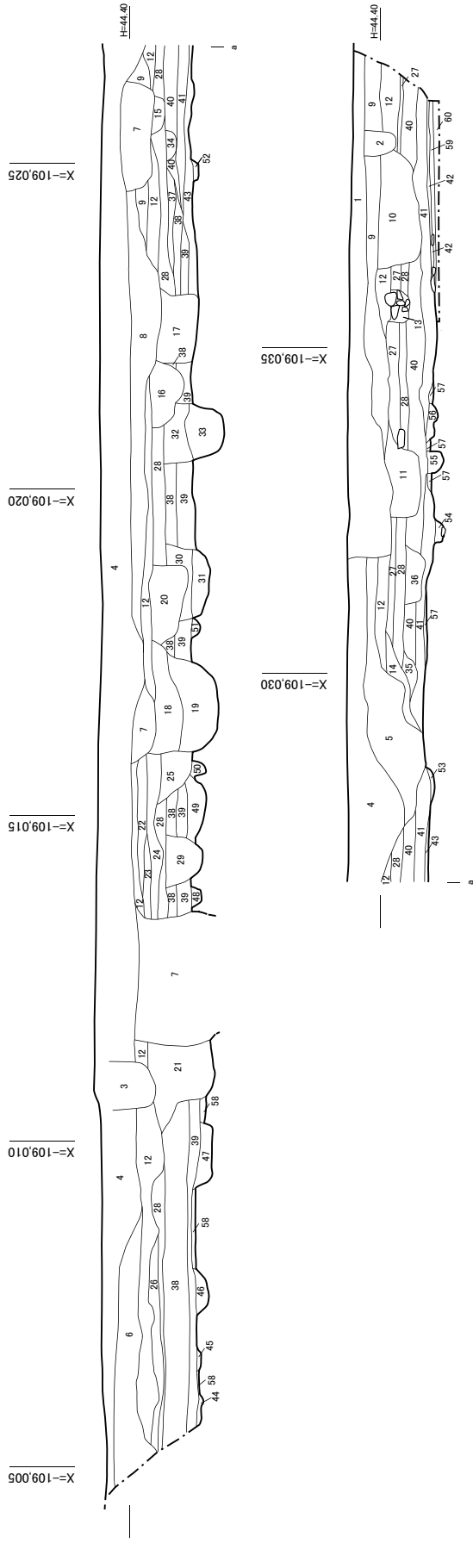


図7 調査区東陸奥測図 (1 : 100)

1	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまりややあり	砂礫を多く含む (表土)	24	10YR6/4	にぶい黄褐色泥砂	しまり強い	砂礫を多く含む (江戸時代三和土)	47	2.5Y6/1	黄灰色シルト質土	しまりややあり
2	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまりなし (雜乱)		25	10YR4/4	褐色泥砂	しまり弱い	(江戸時代遺構)	48	10YR6/3	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり
3	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまりなし (雜乱)		26	10YR2/1	黒色泥砂	しまりなし	炭片を含む	49	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり
4	10YR3/2	黄褐色泥砂	しまり弱い		27	10YR3/2	黒褐色泥砂	しまり強い		50	10YR7/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり
5	5YR4/6	赤褐色泥砂	しまりなし	焼土や焼け瓦多量を含む	28	10YR3/2	黒褐色泥砂	しまり強い		51	10YR6/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり (平安時代遺構)
6	10YR3/3	暗褐色泥砂	しまり弱い		29	10YR4/4	褐色泥砂	しまり弱い	土師器片含む (室町時代遺構) 【溝 340】	52	10YR6/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりあり
7	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまり弱い	(江戸時代遺構)	30	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまり弱い	(室町時代遺構)	53	10YR6/3	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり (平安時代遺構)
8	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまり弱い	焼土や砂礫を多く含む	31	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまりややあり	(室町時代遺構)	54	10YR7/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり (平安時代遺構)
9	10YR5/2	灰黄褐色泥砂	しまり弱い	炭・焼土を多量、拳大の砂礫を若干含む	32	2.5Y5/4	黄褐色砂質土	しまり弱い	(室町時代遺構)	55	10YR7/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり (平安時代遺構)
10	5YR4/6	赤褐色泥砂	しまりなし	焼土や焼け瓦多量を含む	33	2.5Y5/4	黄褐色砂質土	しまり弱い	拳大の砂礫を多く含む (室町時代遺構)	56	10YR7/4	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり (平安時代遺構)
11	5YR4/6	赤褐色泥砂	しまりなし	焼土や焼け瓦多量を含む	34	10YR6/2	灰黄褐色泥砂	しまりややあり	拳大の砂礫を含む (室町時代遺構) 【柱穴 65】	57	10YR6/3	にぶい黄褐色シルト質土	しまりあり
12	7.5YR8/2	灰白色砂礫	しまりなし	拳大の川原石堆積	35	10YR6/2	灰黄褐色泥砂	しまり弱い	拳大の砂礫を含む (室町時代遺構)	58	2.5Y7/2	灰黄色シルト砂礫	しまりあり
13	10YR3/2	黒褐色泥砂	しまり弱い	(江戸時代ビット)	36	10YR5/2	灰黄褐色泥砂	しまり弱い	(室町時代遺構)	59	10YR6/2	灰黄褐色シルト質土	しまりあり 砂礫をほとんど含まない (平安時代整地)
14	7.5YR8/2	灰白色砂礫	しまりなし		37	10YR4/6	褐色泥砂	しまりやや弱い		60	7.5YR8/1	灰白色砂礫	しまり強い (地山)
15	2.5Y5/3	黄褐色泥砂	しまり弱い		38	10YR6/2	灰黄褐色泥砂	しまりややあり	砂礫を多く含む				
16	10YR5/6	黄褐色泥砂	しまり弱い	砂礫を多く含む	39	10YR3/2	黒褐色砂質土	しまりややあり					
17	10YR8/2	灰白色泥砂	しまりなし	砂礫を多く含む (江戸時代遺構)	40	10YR2/1	黒色シルト質土	しまりややあり					
18	10YR5/4	にぶい黄褐色泥砂	しまり弱い	(江戸時代遺構)	41	10YR2/1	黒色シルト質土	しまりややあり					
19	10YR5/4	にぶい黄褐色泥砂	しまり弱い	砂礫を多く含む (江戸時代遺構)	42	10YR2/1	黒色シルト質土	しまり弱い	微細な炭片を多量に含む				
20	10YR5/2	灰黄褐色泥砂	しまり弱い	(江戸時代遺構)	43	10YR2/1	黒色シルト質土	しまり弱い					
21	10YR8/2	灰白色砂礫	しまりなし		44	2.5Y6/2	黄灰色シルト質土	しまりややあり					
22	10YR6/4	にぶい黄褐色泥砂	しまり強い	(江戸時代三和土)	45	2.5Y6/2	黄灰色シルト質土	しまりややあり					
23	10YR7/3	にぶい黄褐色泥砂	しまり非常に強い	(江戸時代三和土)	46	10YR6/3	にぶい黄褐色シルト質土	しまりややあり					

mを測る切り石を利用して円形に組んでいる。埋土からは遺物の出土はない。時期は江戸時代中期以降であると考えられる。

井戸 258 (図版 1) 調査区北で検出した。井戸の直径は 1.20 m、井戸の掘方は短軸長 1.75 m、長軸長 1.80 mを測る楕円形である。深さは約 4 mまで掘削したが底までは未掘である。0.12～0.20 mを測る切り石を円形に組んでいる。埋土からは遺物の出土はない。時期は江戸時代中期以降であると考えられる。

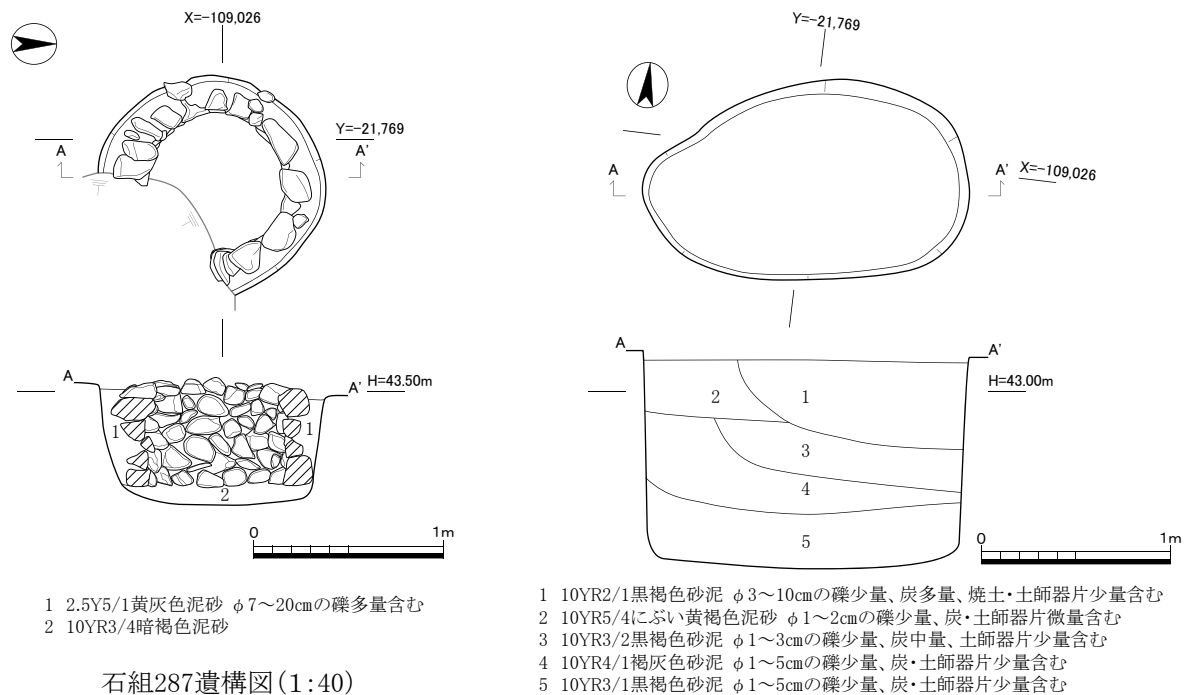
井戸 254 (図版 1) 調査区北で検出した。井戸の掘方は短軸長 1.60 m、長軸長 1.64 mを測る円形である。深さは約 4 mまで掘削したが底までは未掘である。素掘り井戸である。埋土からは中世の遺物が出土したが検出面と埋土の状況から江戸時代以降と考えられる。

井戸 247 (図版 1) 調査区北で検出した。井戸の掘方は短軸長 1.65 m、長軸長 2.27 mを測る楕円形である。深さは約 4 mまで掘削したが底までは未掘である。素掘り井戸である。埋土から棧瓦や土師器片が出土した。時期は京都XIII期と考えられる。

井戸 12 (図版 1) 調査区中央で検出した。井戸の掘方は東西長 1.83 m、南北長 1.72 mを測る方形である。深さは約 4 mまで掘削したが底までは未掘である。素掘り井戸である。埋土からは土師器や陶器に合わせて三和土片が出土した。江戸時代後期以降と考えられる。

井戸 2 (図版 1) 調査区南で検出した。井戸の掘方は短軸長 1.62 m、長軸長 1.66 mを測る円形である。深さは約 4 mまで掘削したが底までは未掘である。素掘り井戸である。埋土からは遺物の出土はない。時期は不明である。

石組 287 (図 8) 調査区北で検出した。直径 1.20 mを測る円形の掘方で、拳大から人頭大の川原石で直径 0.70 mの円形に組まれた石組である。深さは 0.88 mで底となる。掘方は直径 1.06 mの円形である。南東を後世の攪乱によって壊されている。埋土からは土師器、陶器が出土した。遺物



石組287遺構図(1:40)

土坑72遺構図(1:40)

図 8 第 1 面 個別遺構図 (1 : 40)

の時期は京都Ⅻ期である。

地下室 4 (図版 1) 調査区南で検出した。東西 2.67 m、南北 1.52 m の長方形土坑である。深さは 0.33 m を測る。遺物は出土していない。

地下室 238 (図版 1) 調査区中央で検出した。東西 2.83 m、南北 2.63 m の方形土坑である。深さは 0.53 m を測る。埋土から瓦が出土した。遺物の時期は江戸時代中ごろと考えられる。

地下室 244 (図版 1) 調査区北で検出した。東西 2.75 m、南北 1.63 m の長方形土坑である。深さは 0.44 m を測る。埋土から瓦が出土した。遺物の時期は江戸時代中ごろと考えられる。

土坑 72 (図 8) 調査区南で検出した。短軸長 1.06 m、長軸長 1.66 m、深さ 1.10 m を測る楕円形土坑である。埋土から土師器、陶磁器、瓦が出土した。遺物の時期は京都Ⅺ～Ⅻ期である。

(4) 第 2 面の遺構

室町時代を中心とする遺構面である。安土桃山時代も含んでいる。建物跡、井戸、土坑などを検出した (図版 2)。

建物 1 (図版 5) 調査区中央で検出した。柱穴 65、柱穴 64、柱穴 25、柱穴 28、柱穴 66、柱穴 268 で構成する 2 間×3 間の南北棟の掘建柱建物で、隣接する柱穴 67、柱穴 24 は建替えを行った痕跡と考えられる。東西方向の柱間は 2.50 m、南北方向の柱間は 2.60 m で、建物の推定規模は 5.8 m×7.2 m である。建替えと考えられる建物も同規模と推定される。ただし建物が東側に延長する可能性も考えられる。柱穴では拳大の石を敷き詰めた根石が確認できた。柱穴からは土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅸ期と考えられる。

建物 2 (図版 5) 調査区中央で検出した。柱穴 80、柱穴 95 で構成する柱列である。ともに小振りな礎石を置く。柱間は 2.00 m である。建物 1 を構成する柱列とも考えられる。柱穴から出土した遺物は、京都Ⅸ期と考えられる。

柵 1 (図版 2) 調査区中央で検出した礎石列で、T 字状に直交する。礎石は一辺 0.20～0.35 m を測る扁平な川原石で、礎石間は東西方向が 2.1～2.7 m、南北方向が 1.4～1.6 m である。時期の特定はできないが、南東方向に近接する建物 1 と平行するため同時期の遺構と考えられる。

井戸 60 (図版 6) 調査区中央で検出した。井戸の掘方は短軸長 1.60 m、長軸長 1.64 m を測る楕円形である。素掘り井戸である。埋土からは京都Ⅺ期古段階から中段階の遺物が出土した。

井戸 136 (図版 6) 調査区中央で検出した。最大径 2.51 m を測る円形の掘方をもつ井戸である。調査区西側に延長する。井戸の深さは 2.28 m を測る。井戸側は円形で、最下層に板材を方形に組んだ水溜がある。井戸側は直径 0.80 m で、上部の周縁には黄色の粘土を厚さ 3 cm 程度貼り付けてあり、黒褐色泥砂で埋められていた。下部は周縁の黄色粘土が確認できなかった。水溜は一辺 0.64 m で高さ 0.25 m を測る。井戸側の真上からみると水溜の中心は井戸側の中心よりも北西方向にずれている。埋土からは土師器、陶器が出土した。遺物の時期は京都Ⅹ期古段階から中段階と考えられる。

井戸 300 (図版 2) 調査区北で検出した。掘方は短軸長 1.49 m、長軸長 2.56 m を測り、遺構の中間深度から直径 1.30 m 程度を測る円形の素掘り井戸である。南側を後世の攪乱によって壊されている。井戸枠は確認できなかった。深さ 2.55 m まで掘り下げたが、底を確認できなかった。湧

水は確認できなかった。埋土からは土師器や陶器が出土した。遺物の時期は京都XI期中段階から新段階と考えられる。

井戸 304 (図版7) 調査区中央で検出した。短軸長 2.60 m、長軸長 2.81 m、深さ 3.32 mを測る素掘り井戸である。井戸枠は確認できず、底付近が直径 0.60 mを測る円形に掘り下げられていた。湧水は確認できなかった。上層埋土からは多量の土師器皿が出土した。遺物の時期は京都IX期古段階から中段階と考えられる。

溝 340 (図版2) 調査区北で検出した。幅 0.60 m、検出長 6.5 mの直線的な東西溝で、調査区東側に延長する。深さは 0.55 mを測る。埋土からは土師器、陶器、白磁、瓦器が出土した。時期は京都IX期中段階から新段階である。

溝 90 (図版2) 調査区中央で検出した。幅 0.70 m、検出長 7.6 mの直線的な東西溝で、調査区西側に延長する。深さは 0.35 mを測る。埋土からは土師器、陶器が出土した。時期は京都IX期中段階から新段階である。

溝 170 (図版2) 調査区中央で検出した。幅 0.55 m、検出長 1.6 mの直線的な南北溝で、深さは 0.35 mを測る。後世の攪乱によって北側と南側の延長は壊されているが、長く延長しない。埋土からは土師器が出土した。時期は京都X期古段階から中段階である。

溝 176 (図版2) 調査区中央で検出した。幅 0.62 m、検出長 5.1 mの直線的な南北溝で、深さは 0.45 mを測る。後世の攪乱によって北側と南側が壊されているが長く延長しない。埋土からは土師器が出土した。時期は京都X期古段階から中段階である。

土坑 27 (図版7) 調査区中央で検出した。南北長 1.31 m、東西検出長 0.58 m、深さ 0.55 mを測る長方形土坑である。後世の遺構によって東側が壊されている。埋土からは京都XI期古段階から中段階の遺物が出土した。

土坑 302 (図版8) 調査区北で検出した。長軸長 3.57 m、短軸長 2.06 m、深さ 0.65 mを測る長方形の大型土坑である。北西隅が後世の遺構によって壊されている。埋土からは土師器皿が出土した。時期は京都X期新段階からXI期古段階である。

土坑 163 (図版8) 調査区南で検出した。長軸検出長 1.76 m、短軸長 1.17 m、深さ 0.27 mを測る楕円形土坑である。北側が後世の攪乱によって壊されている。埋土からは多量の土師器皿が出土した。時期は京都IX期古段階から中段階である。

土坑 270 (図版8) 調査区中央で検出した。長軸長 2.51 m、短軸長 1.42 m、深さ 0.35 mを測る隅丸長方形土坑である。埋土からは京都IX期古段階から中段階の遺物が出土した。

土坑 283 (図版9) 調査区北で検出した。長軸長 1.08 m、短軸長 0.85 mを測る掘方である。遺構の深さは 0.36 mを測る。対になる柱穴を確認できなかった。埋土からは土師器・施釉陶器等が出土した。遺物の時期は京都X期中段階から新段階である。

土坑 306 (図版9) 調査区北で検出した。長軸検出長 1.32 m、短軸検出長 0.60 m、深さ 0.20 mを測る楕円形土坑である。北側と南側が壊されている。埋土からは土師器や青磁などが出土した。遺物の時期は京都IX期古段階から中段階である。

集石 29 (図版9) 調査区中央で検出した。長軸長 0.99 m、短軸長 0.96 m、深さ 0.25 mを測る円形土坑である。埋土中に拳大の川原石が多量に含まれていた。埋土からは土師器が出土した。遺

物の時期は京都Ⅺ期中段階から新段階と考えられる。

柱穴 69 (図版 9) 調査区南で検出した。長軸長 0.40 m、短軸長 0.39 mを測る円形の掘方で深さは 0.20 mである。掘方をほぼ埋め戻した面に大きさ 0.18 mの扁平な礎石を置く。対になる柱穴は確認できなかった。埋土からは土師器が出土した。

柱穴 218 (図版 9) 調査区南で検出した。長軸検出長 1.72 m、短軸長 1.04 m～1.36 mを測る不正楕円形の掘方で深さは 0.15 mである。底面に大きさ 0.22 mの扁平な礎石を置く。対になる柱穴は確認できなかった。埋土からは土師器等が出土した。

(5) 第3面の遺構

第3面は平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。ここでは鎌倉時代を中心とした遺構群と平安時代を中心とした遺構群とを分けて報告する。

a. 第3面1期(鎌倉時代の遺構)(図版3)

建物 3 (図版 10) 調査区中央で検出した。柱穴 345、柱穴 346、柱穴 349、柱穴 350、柱穴 351 で構成される東西方向の柱列である。柱穴は直径 0.30～0.50 m、柱痕の直径は 0.15～0.20 mを測る。柱間の距離は 0.66 m～1.06 mを測る。柵の可能性も考えられる。調査区東側に延長する可能性がある。

建物 4 (図版 10) 調査区中央で検出した。柱穴 617、柱穴 618、柱穴 342、柱穴 620 で構成される東西方向の柱列である。柱穴は直径 0.35～0.53 m、柱痕の直径は 0.15～0.20 mを測る。柱間の距離は 0.75 m～0.85 mを測る。柵の可能性も考えられ、建物 3 と同一かもしれない。調査区西側に延長する可能性がある。

建物 5 (図版 10) 調査区中央で検出した。柱穴 613、柱穴 612、柱穴 611 で構成される東西方向の柱列である。柱穴は直径 0.35～0.52 m、柱痕の直径は 0.15～0.25 mを測る。柱間の距離は 0.86 m～0.93 mを測る。柵の可能性も考えられる。東側に延長する可能性もある。

建物 6 (図版 10) 調査区南で検出した。柱穴 142、柱穴 86、柱穴 655、柱穴 224、柱穴 141、柱穴 226、柱穴 82、柱穴 649 で構成される南北方向の柱列である。大小二種類の大きさの柱穴に別れ、小さい柱穴は直径 0.36～0.48 m、柱痕の直径は不明であるが、一辺 0.20 m～0.26 mを測る扁平な礎石を穴底に据える。大きな柱穴(柱穴 141、柱穴 142、柱穴 82)は直径 0.78～1.04 m、柱痕の直径は不明であるが、一辺 0.43 m～0.60 mを測る扁平な礎石を穴底に据える。柱間の距離は 1.04 m～2.60 mを測り均等でない。柱穴 655 の東で検出した礎石 211 も同一と考えると東側に展開する建物の可能性が考えられる。

溝 400 (図版 3) 調査区北で検出した。幅 0.60 m、検出長 5.4 mの直線的な東西溝で、西側が後世の攪乱によって壊されている。調査区西側に延長しない。遺構の深さは 0.45 mを測る。埋土からは土師器、陶器が出土した。遺物の時期は京都Ⅶ期と考えられる。

土坑 490 (図版 9) 調査区北で検出した。長軸長 1.22 m、短軸長 1.06 mを測る楕円形の土坑である。土坑の深さは 0.40 mである。埋土から土師器、陶器が出土した。遺物の時期は京都Ⅵ期古段階である。

井戸 438 (図版 11) 調査区中央で検出した。南北長 3.40 m、東西検出長 3.12 m、深さ 2.11 m を測る方形の石組井戸である。遺構深度の中位ほどまで人頭大の川原石を積み上げている。井戸底では南北方向 0.83 m、東西方向 0.94 m に厚さ 0.05 m の角材を台形状に組んでいる。川原石は角材の直上から積み上げられているが、隙間が多く乱雑である。中心で井戸側は確認できず、底は平坦である。湧水は確認できなかった。土師器、陶器が出土した。遺物の時期は京都VI期新段階からVII期古段階と考えられる。

地下室 370 (図版 12) 調査区中央で検出した。長辺 2.11 m、短辺 1.80 m、深さ 0.72 m を測る方形土坑である。上層埋土には拳大から人頭大の川原石が集石していた。固く叩きしめた床面上面では鉄製品が並んで出土し、四方にも釘が並んでいた。釘が出土する位置で埋土が変化し、釘よりも掘方側の埋土には拳大の川原石と多量の炭が含まれている。四方を囲む釘の範囲は長辺 1.52 m、短辺 1.33 m を測る長方形である。釘は頭を下にして上に向かった状態で出土した。釘の間隔は南北同士、東西同士で同一となる。また四隅では横方向の状態で掘方側から内側に向けた状態で出土した。

床面では 6 本の合釘 (刀子状の鉄製品) が 3 本ずつ東西方向に先端を向けて均一な間隔で出土した。また北東隅で取手金具が出土した。床面上面では東側と西側で石列を検出した。石の大きさは 0.15 m から 0.26 m を測る。これらの石列は床面を形成する際に埋め込まれたと考えられ、床面の状況を確認するトレンチ調査の結果、床面下で石列を埋めるための落ち込みを確認した。埋土中からは土師器、陶磁器、鉄器、銅銭が出土した。遺物の時期は京都VI期新段階からVII期古段階と考えられる。

なお地下室 370 は遺構を現地保存の処置をした。保存にあたっては砂で覆って埋め戻して保護した。

土坑 140 (図版 3) 調査区南で検出した。長辺 1.78 m、短辺 1.63 m、深さは 0.67 m を測る長方形土坑である。土坑 212 との前後関係が埋土からは認識できなかったため同時に埋められたと考えられる。土坑 212 は長軸 2.35 m、短軸 0.88 m の長楕円形土坑で、深さは検出高より 0.88 m を測る。土師器、陶器が出土した。遺物の時期は京都VI期と考えられる。

集石 590 (図版 11) 調査区中央で検出した。短軸長 1.31 m、長軸長 1.51 m、深さは 0.11 m を測る円形土坑である。土坑の中央に人頭大の川原石がまとまっていた。埋土から遺物の出土はない。

柱穴 320 (図版 11) 調査区北で検出した。短軸長 0.25 m、長軸長 0.30 m、柱痕径 0.18 m を測る。柱痕から土師器皿が完存状態で出土した。建物廃絶時の地鎮であると考えられる。埋土からは土師器皿が出土した。遺物の時期は京都VI期古段階から中段階である。

b. 第3面2期 (平安時代の遺構) (図版 4)

雨落ち溝 100 (図版 13) 調査区南で検出した。幅 1.12 m の間を中央 0.36 m 開けて片側三列ずつ扁平な石を並べている。中央部分は石列より 0.15 m 低い。検出長は 5.7 m を測る。石は東西方向に長軸をもたせた並びとなっているが、調査区東から 4.7 m の地点で石列がやや乱れる。また溝中央に扁平な石が一石置かれ、ここを中心に瓦が多量に出土した (瓦溜り 678)。さらに調査区東から 8.6 m の地点では長軸を南北方向に配置した石を検出した。

石列は調査区東側に延長し、西側は石が残存している箇所から南に直角に折れていたと考えられる。周辺の整地をみると石列より南側と西側が石列よりも盛り上がり、石列に向かってそれぞれ緩やかに傾斜して下がっている。いわゆる亀腹状になっており、石列の推定位置にある小土坑群は石の抜き取りに伴う遺構と考えられるため、南側に延長すると推定した。また周辺の整地は被熱しており、南側は整地の上面が赤紫色に変色していた。西側は整地が赤化して強く硬化していた。さらに南側の整地は周辺の整地と異なり、きめの細かい砂質土で整地されていた。

石列を覆う埋土は微細な炭片が多く含まれる黒色シルト質土で、土師器や白色土器が出土した。遺物の時期は京都Ⅳ期新段階と考えられるが、細片で図化できなかった。

土坑 115 (図版 13) 調査区南で検出した。長軸長 3.00 m 以上、短軸長 1.10 m 以上、深さ 0.33 m を測る楕円形土坑である。ほとんどを後世の攪乱によって壊されている。調査区西側に延長する。埋土から土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅴ期古段階である。

溝 312 (図版 13) 調査区北で検出した。幅 0.45 m、検出長 5.2 m の直線的な東西溝で、深さは 0.10 m ～ 0.45 m を測る。東西の延長は後世の攪乱によって壊されている。埋土からは土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅳ期中段階から新段階と考えられる。

溝 555 (図版 14) 調査区中央で検出した。幅 0.35 ～ 0.75 m、検出長 4.4 m を測る不整形な溝で、深さは 0.15 ～ 0.23 m を測る。西側で重複する土坑 343 との前後関係は不明確であり、土坑 343 の西側にある溝 543 とも一体となった不整形な溝の可能性も考えられる。埋土からは土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅲ期中段階から新段階と考えられる。

土坑 322 (図版 14) 調査区北で検出した。長辺 1.00 m、短辺 0.92 m を測る方形の掘方で深さは 0.50 m である。埋土からは土師器などが出土した。

土坑 343 (図版 14) 調査区中央で検出した。短軸長 1.09 m、長軸長 2.36 m を測る楕円形土坑で、深さは 0.23 m を測る。土師器、瓦が出土した。遺物の時期は京都Ⅲ期中段階から新段階と考えられる。

土坑 366 (図版 15) 調査区中央で検出した。長軸長 0.90 m、短軸長 0.72 m を測る楕円形土坑で、深さは 0.42 m を測る。土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階と考えられる。

土坑 368 (図版 15) 調査区中央で検出した。長軸長 2.08 m、短軸長 1.38 m を測る楕円形土坑で、深さは 0.27 m を測る。土坑 366 と重複する。土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅳ期新段階である。

柱穴 389 (図版 15) 調査区中央で検出した。長軸長 0.30 m、短軸長 0.28 m を測る円形の掘方で深さは 0.38 m である。対になる柱穴は確認できなかった。埋土からは土師器が出土した。出土した遺物は京都Ⅳ期新段階と考えられる。

柱穴 513 (図版 15) 調査区北で検出した。長軸長 0.65 m、短軸長 0.62 m を測る楕円形の掘方で、深さは 0.25 m を測る。底面に一辺 0.20 m を測る扁平な礎石を置く。対になる柱穴は確認できなかった。埋土から土師器が出土した。出土した遺物は京都Ⅲ期中段階から新段階である。

柱穴 541 (図版 15) 調査区中央で検出した。直径 0.28 m を測る円形のピットで、深さは 0.34 m を測る。埋土から土師器が出土した。遺物の時期は京都Ⅲ期古段階である。

溝 640(図版 14) 調査区中央で検出した。幅 0.60 m～1.10 m、検出長 6.16 mの不整形な東西溝で、深さは 0.15 m～0.33 mを測る。東側は後世の攪乱によって壊されている。調査区西端では複数の土坑と重複している。埋土から土師器、白磁が出土した。遺物の時期は京都Ⅲ期古段階から中段階である。

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物はほとんどが土器であるが、地下室 370 からは釘などの鉄製品がまとまって出土した（表 2）。ただし鉄製品については保存処理に時間を要するため今回の報告段階では X 線撮影による撮像と錆が付着した状態での表面観察から得られる情報をもとに図化しているため、詳細が不明な部分がある。遺物は年代の古い順に記述し、各遺物の詳細は観察表を参照にされたい。

表 2 遺物概要

	Aランク	Bランク	Cランク
平安時代～鎌倉時代	土師器62点、白色土器 2 点、黒色土器 4 点、瓦質土器 1 点、須恵器 4 点、輸入磁器 2 点、緑釉陶器12点、灰釉陶器 5 点、石製品 1 点、瓦 6 点、金属製品62点		
室町時代～安土桃山時代	土師器85点、瓦質土器15点、焼締陶器 7 点、国産施釉陶器24点、輸入陶磁器 5 点、石製品 5 点、瓦類 5 点		
江戸時代	—		
	合計307点（9箱）	2箱	34箱

（1）平安時代から鎌倉時代の遺物

第 3 面で検出した遺構や包含層から出土した遺物で、平安時代から鎌倉時代を中心とした遺物である。また、後世の遺構埋土にも多く混入していた。

柱穴 541 出土遺物（図 9 1～3）

1～3 は土師器皿である。薄手で、口縁部を強く外反させている。京都Ⅲ期古段階と考えられる。

溝 640 出土遺物（図 9 4～10）

4～7 は土師器皿である。薄手で、口縁部を強く外反させている。8 は黒色土器 A の碗で内外面は丁寧なミガキが施される。9 は須恵器の鉢である。10 は緑釉陶器の皿である。京都Ⅲ期古～中段階と考えられる。

柱穴 513 出土遺物（図 9 11～17）

11～13 は土師器皿である。やや薄手で、口縁部を強く外反させている。器高が低い。14 は黒色土器 B の碗である。15 は黒色土器 A である。内面と外面の口縁部を黒色化させた碗で内外面は丁寧なミガキが施される。16 は灰釉陶器の碗である。17 は緑釉陶器の皿である。京都Ⅲ期中～新段階と考えられる。

土坑 343 出土遺物（図 9 18～21）

18・19 は土師器皿である。やや薄手で、口縁部を強く外反させている。20 は黒色土器 A の碗で内外面は丁寧なミガキが施される。21 は緑釉陶器の皿である。京都Ⅲ期中～新段階と考えられる。

溝 555 出土遺物（図 9 22～27）

22～24 は土師器皿である。やや薄手で、口縁部を強く外反させている。25 は土師器の鉢である。26 は灰釉陶器の皿である。見込みに花紋を線刻している。27 は緑釉陶器の碗である。京都Ⅲ期中

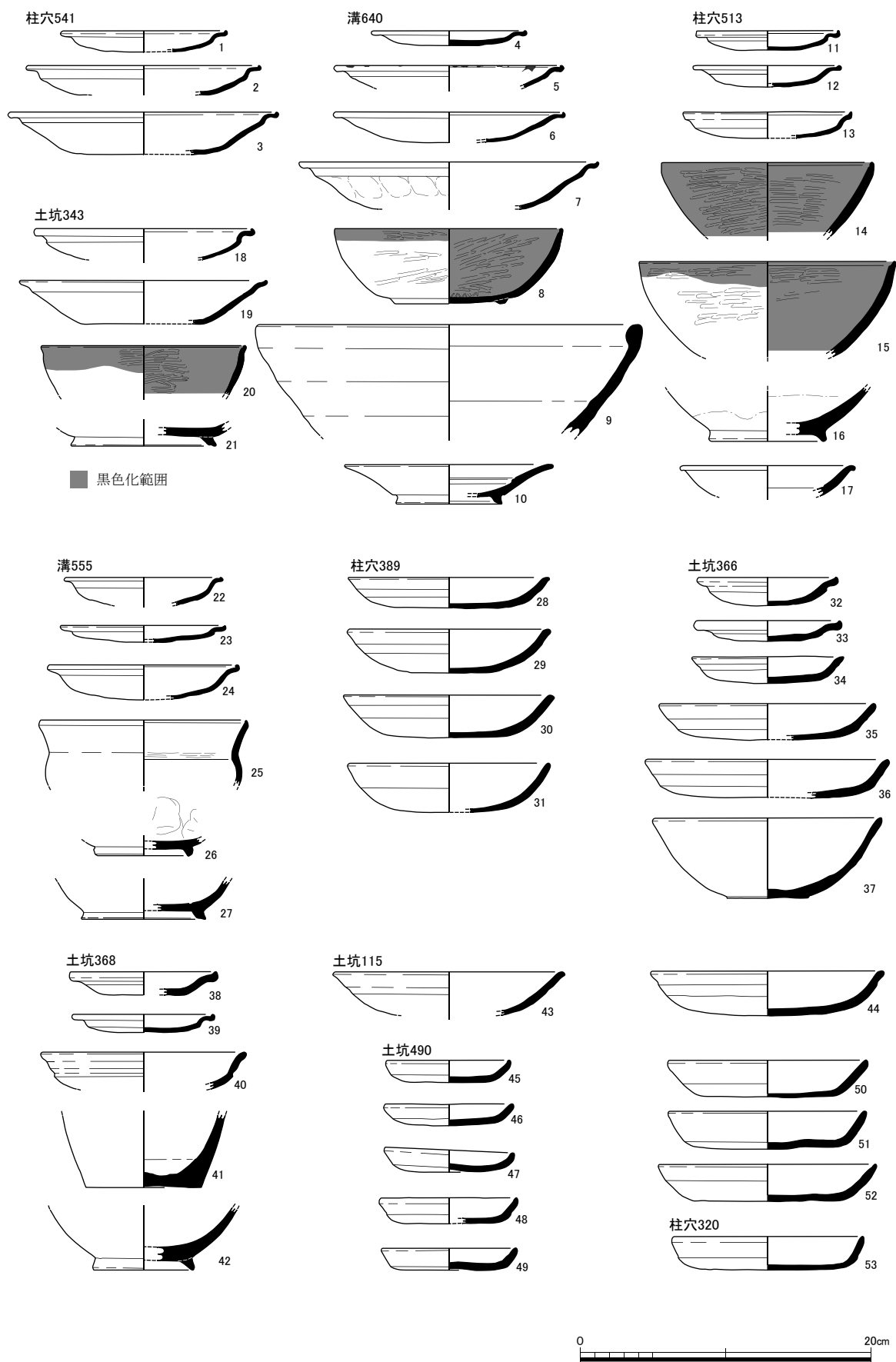


图9 出土遺物実測図1 (1 : 4)

～新段階と考えられる。

柱穴 389 出土遺物 (図9 28～31)

28～31は土師器皿Nである。やや厚みがあり、口縁部の二段ナデ調整がみられる。京都IV期新段階と考えられる。

土坑 366 出土遺物 (図9 32～37)

32～36は土師器皿である。32・33は土師器皿Aで、器壁にやや厚みがある。34～36は土師器皿Nでやや厚みがあり、口縁部の二段ナデ調整がみられる。37は須恵器の鉢である。京都IV期新段階～V期古段階と考えられる。

土坑 368 出土遺物 (図9 38～42)

38～40は土師器皿である。38・39は土師器皿Aで、器壁にやや厚みがある。40は土師器皿Nで口縁部の二段ナデ調整がみられる。41は灰釉陶器の壺である。42は灰釉陶器の碗である。京都IV期新段階と考えられる。

土坑 115 出土遺物 (図9 43・44)

43・44は土師器皿Nである。口縁部に二段ナデ調整がみられる。京都V期古段階と考えられる。

土坑 490 出土遺物 (図9 45～52)

45～52は土師器皿Nである。口縁部に一段ナデ調整がみられる。京都VI期古段階と考えられる。

柱穴 320 出土遺物 (図9 53)

53は土師器皿Nである。口縁部に一段ナデ調整がみられる。京都VI期古～中段階と考えられる。

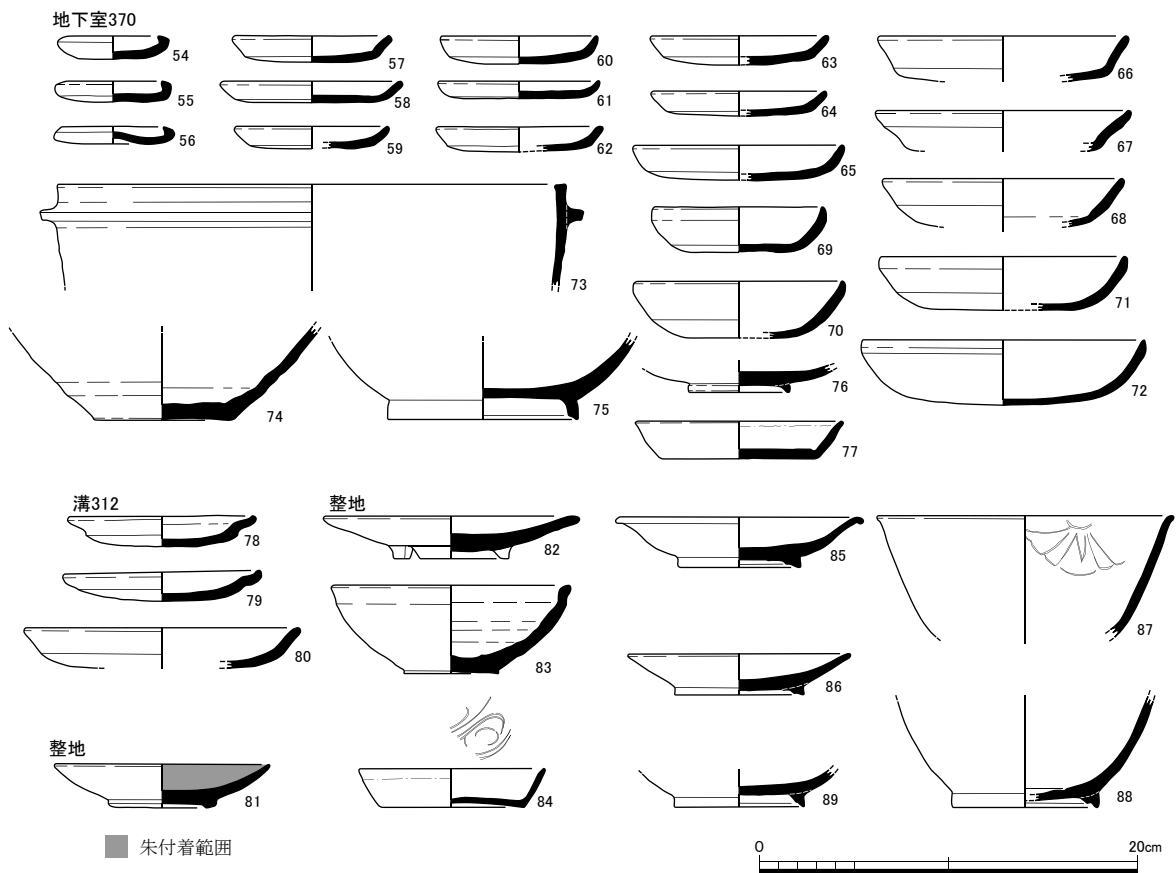


図10 出土遺物実測図2 (1:4)

地下室 370 出土遺物 (図 10 54～77)

54～72 は土師器皿である。54～56 は土師器皿 A c である。57～68 は土師器皿 N で口縁部に一段ナデ調整がみられる。57～65 は小皿である。69～72 は土師器皿 S で、底部は平底ぎみで、体部から口縁部が内湾して立ち上がる。口縁部は一段ナデ調整がみられる。胎土は灰白色である。73 は瓦質土器の羽釜である。鏝部は短く断面方形である。74 は須恵器の鉢である。75 は緑釉陶器の碗である。76 は灰釉陶器の皿である。77 は白磁の小皿である。口縁端部に白磁釉を施さない口禿皿である。京都Ⅵ期新段階～Ⅶ期古段階と考えられる。

溝 312 出土遺物 (図 10 78～80)

78～80 は土師器皿である。78・79 は皿 A で、扁平で器壁に厚みがある。80 は皿 N で口縁部外面に一段ナデ調整がみられる。京都Ⅳ期中～新段階と考えられる。

整地出土遺物 (図 10 81～89)

81・82 は白色土器の皿である。81 は内面全体に朱が付着している。82 は高台に切り欠きがある。83 は須恵器の碗である。84 は青白磁の皿である。見込みに線刻がある。85～89 は緑釉陶器である。85・86 は皿である。87～89 は碗である。87 は口縁部内面に半裁花紋を線刻している。88 の高台の内面は有段である。京都Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。

(2) 室町時代から安土桃山時代の遺物

第 2 面から出土した遺物で、室町時代～安土桃山時代を中心にした遺物である。土坑 163 と井戸 304 の上層で室町時代の土師器が多量に出土した。

井戸 304 出土遺物 (図 11 90～120)

90～106 は土師器皿である。90～98 は小皿である。90～93 は土師器皿 S h で、いわゆるへそ皿である。突出した底面には爪痕が残る。95～104 は皿 S で口縁部が開き、口縁部外面を丁寧にナデ調整している。94・105・106 は皿 N で体部外面に指の押圧痕が明瞭に残る。107・108 は緑釉陶器である。107 は耳皿である。108 は壺である。肩部に斜格子紋を楕円描している。109～111 は国産施釉陶器で 109 は灰釉平碗、110 は天目茶碗、111 は鉢である。瀬戸美濃産である。112 は石鍋である。滑石製で内面は非常に平滑である。113 は青磁の酒会壺の蓋である。波状に成形した鏝をもち、天井部に鏝紋を陽刻する。114～118 は瓦質土器である。114 は鍋、115～118 は火舎である。119・120 は焼締陶器の甕である。119 の口縁部は短く折り返し、120 は強く外反して端部を拡張する。119 は丹波産、120 は常滑産である。これらの遺物は京都Ⅸ期古段階～中段階と考えられる。ただし 107・108 は平安時代の遺物で混入品である。

土坑 306 出土遺物 (図 12 121～125)

121～123 は国産施釉陶器である。121 は直縁大皿か。122 は大型の鉢で注口をもつ。123 は丸碗である。124 は青磁の酒会壺の蓋である。波状の大きな鏝を持つ。天井部におたまじゃくし状の紐状の突起を貼り付ける。125 は焼締陶器の甕である。これらの遺物は京都Ⅸ期古段階～中段階と考えられる。

土坑 270 出土遺物 (図 12 126～130)

126～128 は土師器皿である。126・127 は小皿である。126 は皿 S h、127 は皿 N である。128

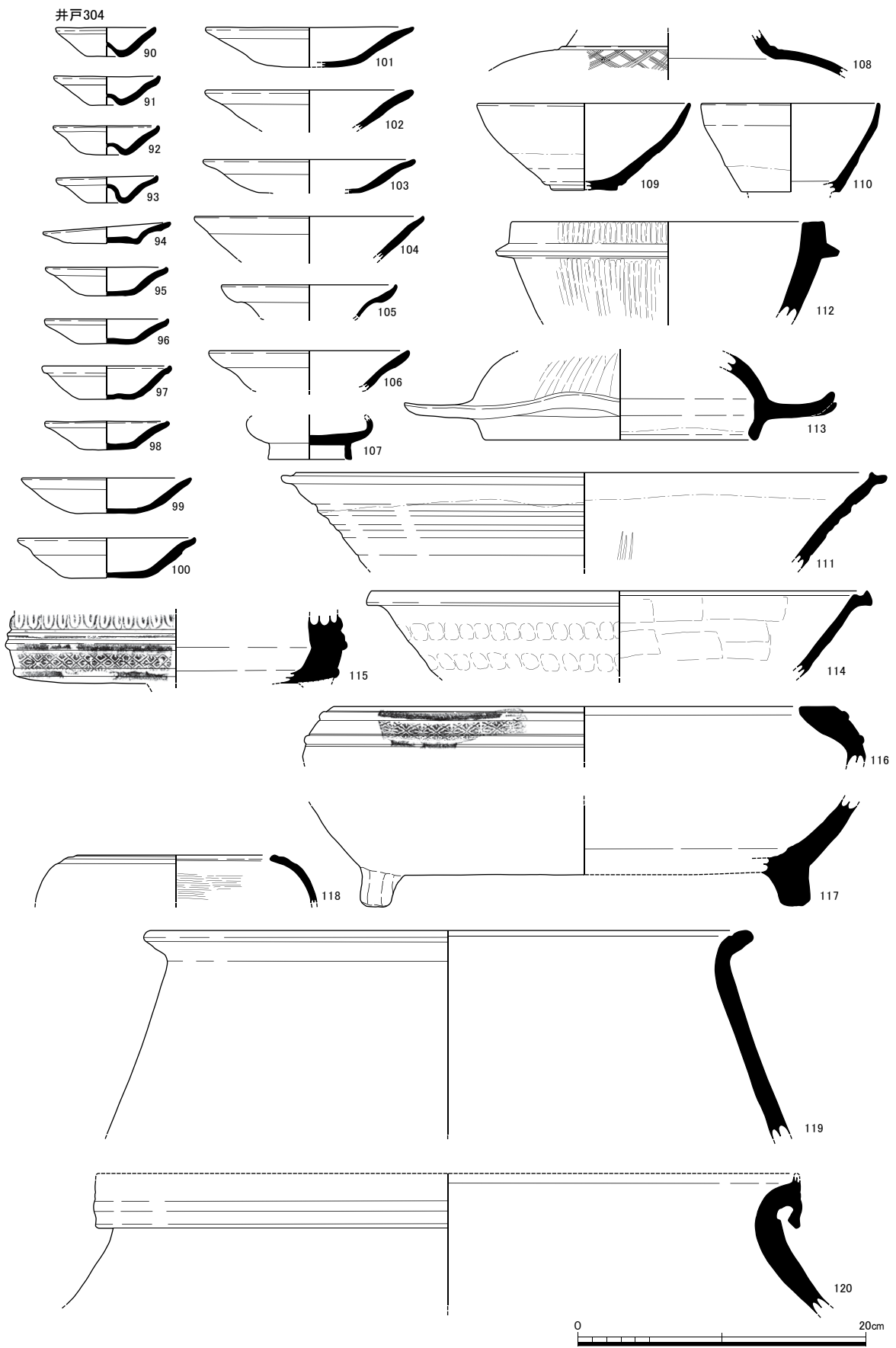


图 11 出土遺物実測図 3 (1 : 4)

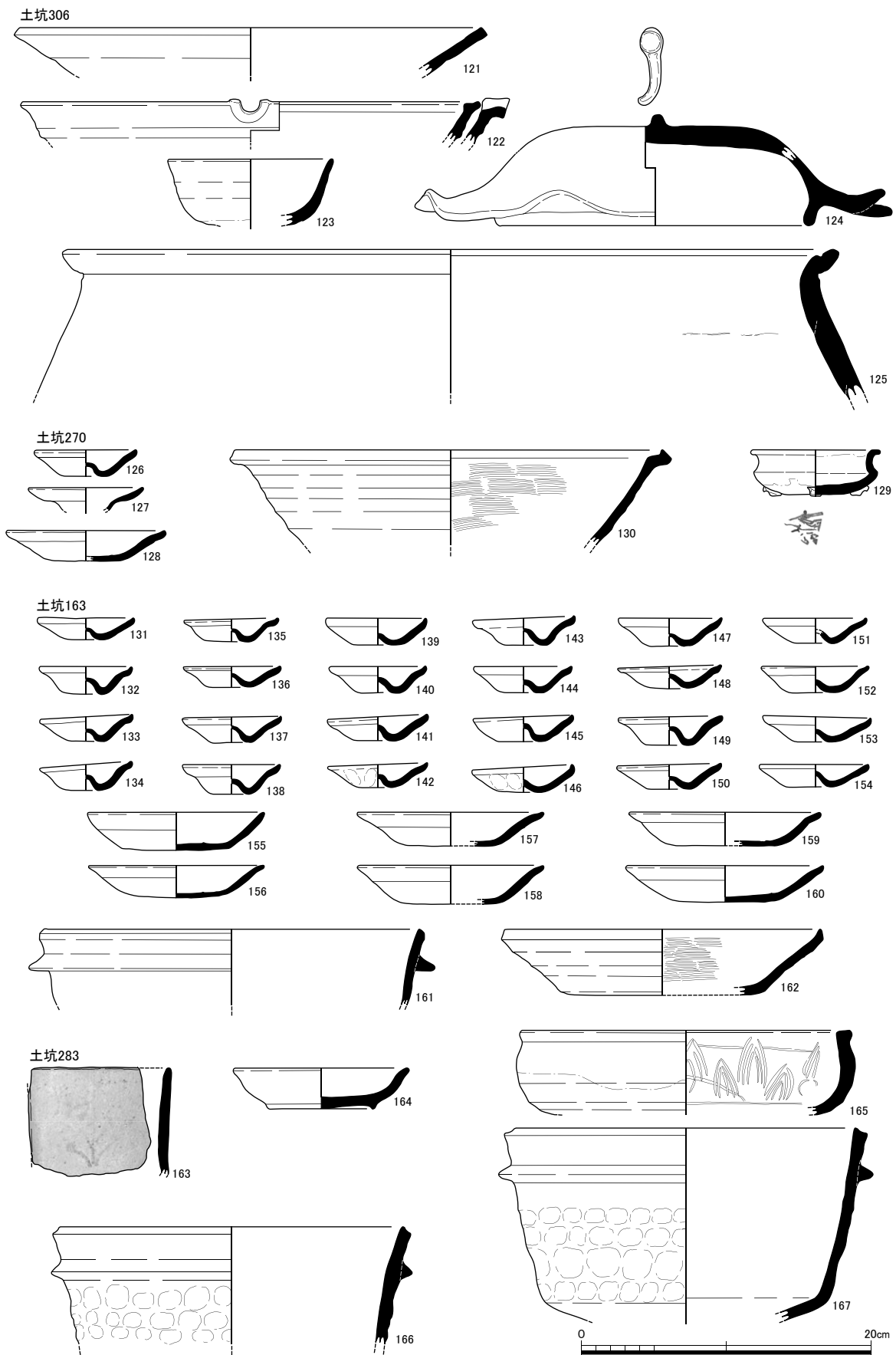


图 12 出土遗物实测图 4 (1 : 4)

は皿Sである。129は施釉陶器の香炉である。底部に小さな脚を三か所に貼り付ける。底部外面には「龍」の墨書がある。130は瓦質土器の鍋である。これらの遺物は京都IX期古段階～中段階と考えられる。

土坑 163 出土遺物 (図 12 131～162)

131～160は土師器皿である。131～154は皿Shである。131～153は白色系で、154は黄褐色系で異なる。器高が低く形状もやや異なる。155～160は皿Sである。161・162は瓦質土器である。161は羽釜である。鏝の断面はやや長い三角形である。162は鉢である。これらの遺物は京都IX期古段階～中段階と考えられる。

土坑 283 出土遺物 (図 12 163～167)

163～165は施釉陶器である。163は方形の向付か。鉄絵で草を描く。志野。164は丸皿である。瀬戸美濃産である。165は盤である。内面に葉紋と横線の線刻のち内面と外面上半に釉薬を施している。輸入品と考えられる。166・167は瓦質土器の羽釜である。両者とも断面三角形の鏝をもつ。これらの遺物は京都X期中段階～新段階と考えられる。

井戸 136 出土遺物 (図 13 168～176)

168～171は土師器皿である。168・169は小皿で底部が丸みを帯びる皿Sb、170・171が皿Sである。172は青磁碗である。外面に雷紋を陰刻する。173・174は施釉陶器である。173は天目茶碗、174は丸皿である。175は瓦質土器の羽釜である。口縁部が内傾する。176は備前産の播鉢である。これらの遺物は京都X期古段階～中段階と考えられる。

溝 170 出土遺物 (図 13 177～179)

177・178は土師器皿Shである。179は施釉陶器の皿である。これらの遺物は京都X期古段階～中段階と考えられる。

柱穴 218 出土遺物 (図 13 180)

180は瓦質の小型壺である。時期不明である。

土坑 302 出土遺物 (図 13 181～201)

181～186は土師器皿Sである。燈明皿(182・185)も確認できる。187～190は土師器の塩壺である。蓋は丸みをもち、身はわずかに肩部をもつ。寸胴タイプ(189)と下膨れタイプ(190)がある。191は土師器の小型壺である。いわゆるつぼつぼである。192～199は施釉陶器である。192・193は天目茶碗である。194は輪花の折皿である。内面に草花紋を描く。195・196は向付である。195は角型、196は箱型で織部である。197・198は大型の鉢である。瀬戸美濃産である。199は陶器の壺か。褐色釉を施し、底部に3条の突帯を巡らす。200は染付皿である。内面に草花紋を呉須で描く。底部に離れ砂が認められる。201は焼締陶器の播鉢である。丹波産である。これらの遺物は京都X期新段階～XI期古段階と考えられる。

土坑 27 出土遺物 (図 14 202～224)

202は土師器皿Nrである。203～214は土師器皿Sである。燈明皿(203～205・208)も確認できる。215は土師器の塩壺の身である。体部がやや丸みをもつ。216は土師器の甕で混入品である。217は焙烙である。218～220は施釉陶器である。218は瀬戸美濃産の丸碗、219は唐津産の皿である。220は褐釉陶器の壺である。体部下半以外に褐色の釉薬を施す。内外面にタタキ調整の痕跡が

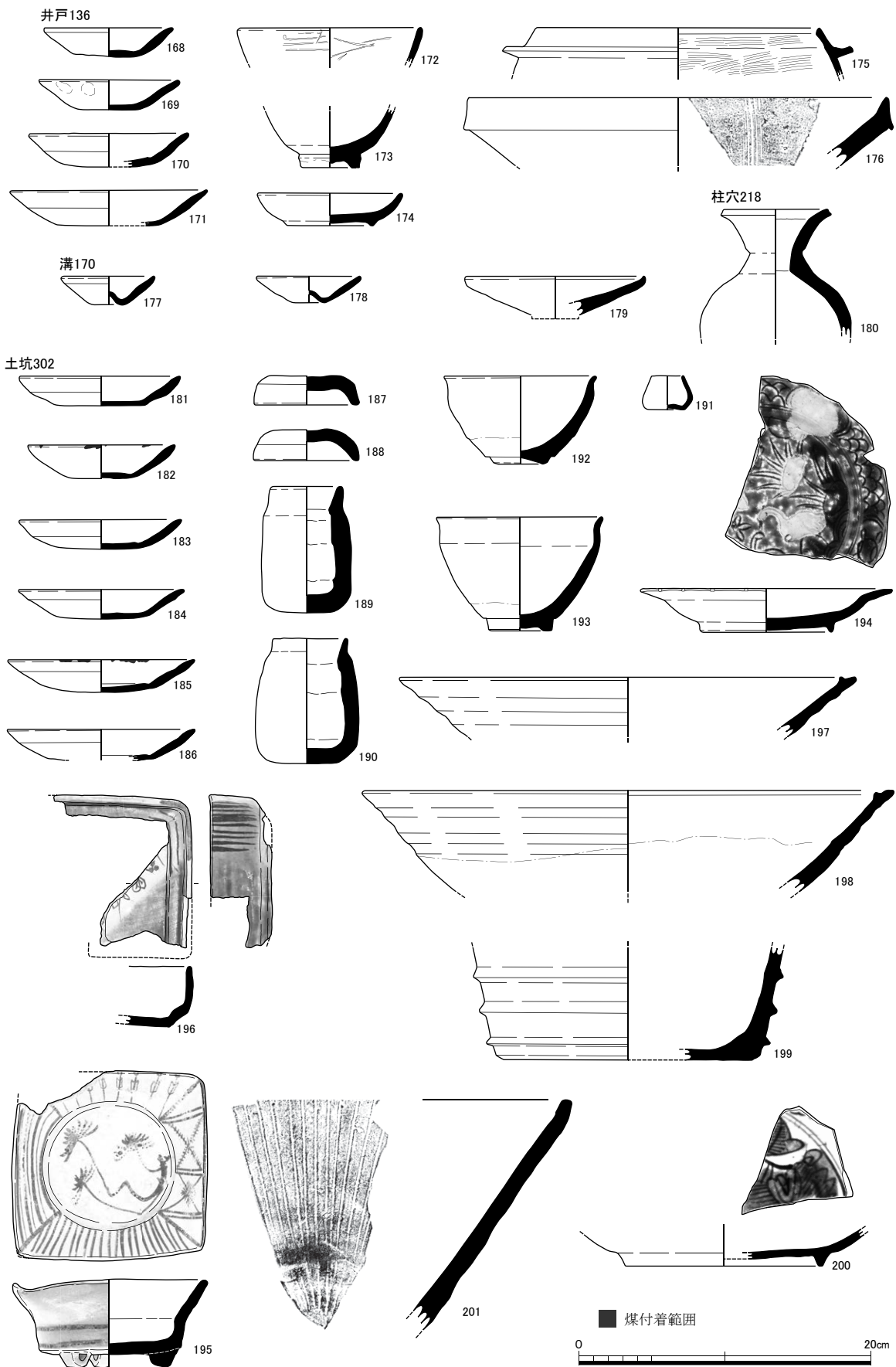


图 13 出土遺物実測図 5 (1 : 4)

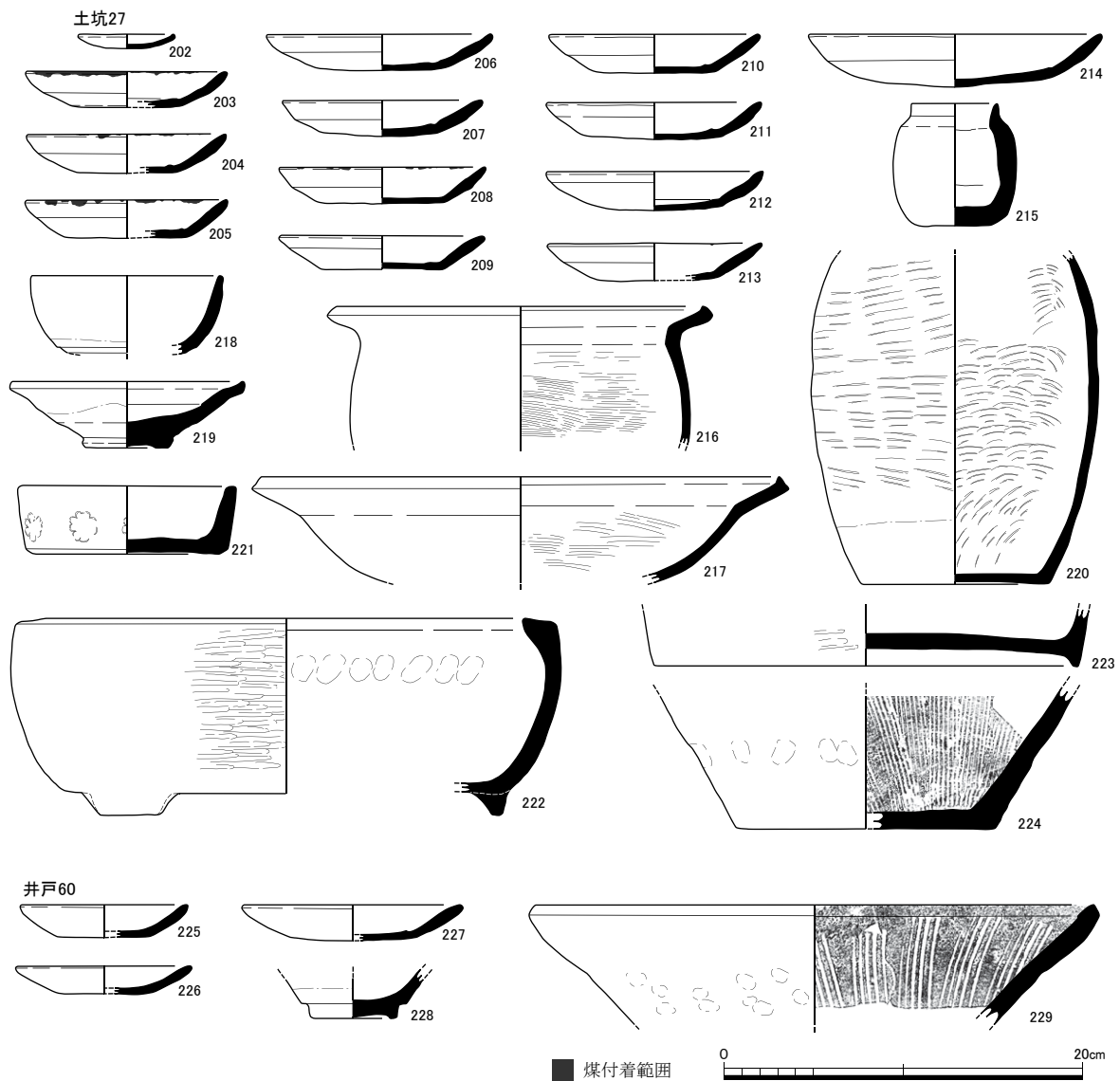


図14 出土遺物実測図6 (1:4)

明瞭に残る。221～223は瓦質土器である。221は小型の火鉢、222・223は火舎である。222は扁平な脚部をつける。224は焼締陶器の播鉢である。丹波産と考えられる。これらの遺物は京都XI期古段階～中段階と考えられる。

井戸60出土遺物 (図14 225～229)

225～227は土師器皿Sである。228は施釉陶器で、天目茶碗である。瀬戸美濃産。229は焼締陶器の播鉢である。丹波産と考えられる。これらの遺物は京都XI期古段階～中段階と考えられる

(3) 瓦・その他瓦質製品 (図15)

瓦1～3・7は軒丸瓦である。瓦1の瓦当紋様は范が弱く不明。蓮華紋か。瓦2・3は八葉蓮華紋である。両者とも范は弱くまた粗雑な印象を受ける。外区の珠紋はいびつである。瓦当面はやや横長の扁平である。瓦7は巴紋である。瓦1は柱穴541、瓦2は土坑343、瓦3は溝555から出土した。平安時代後期である。瓦7は土坑298から出土した。室町時代である。

瓦4～6・8は軒平瓦である。瓦4は唐草紋を配しているが范が雑に押し込められているようで外区で明

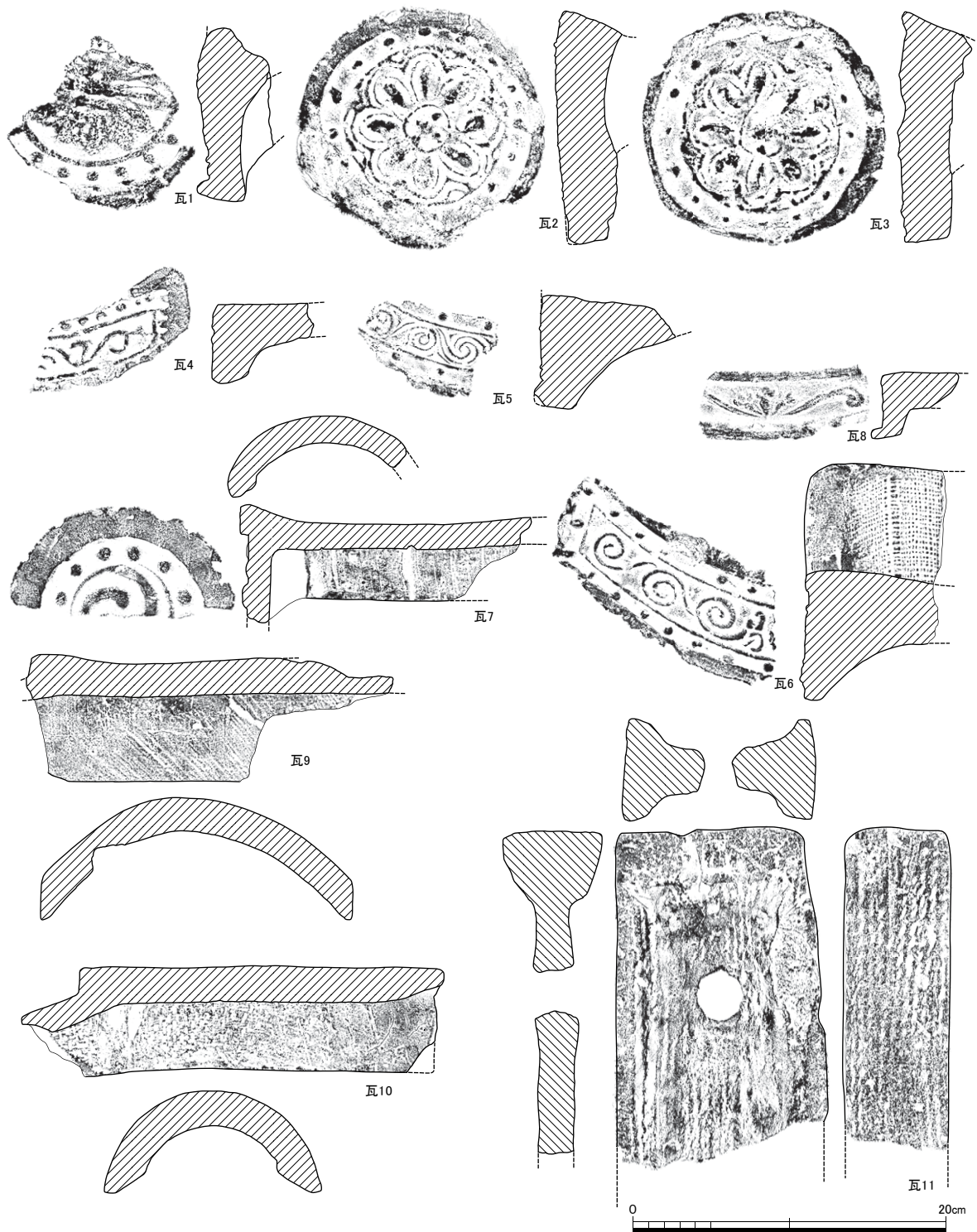


図15 出土瓦拓影・実測図(1:4)

瞭な珠紋は上部のみに確認できる。瓦5・6・8は唐草紋である。瓦4は土坑599、瓦5は柱穴86(建物6)、瓦6は瓦溜まり678から出土した。平安時代後期である。瓦8は井戸136から出土した。室町時代である。

瓦9・10は丸瓦である。瓦9はコビキの痕跡が明瞭に残る。大型の丸瓦である。瓦9・10は井戸136から出土した。

瓦11は瓦質の磚状製品である。長方形で中心部が凹む。中央より偏った位置に円形に穿孔して

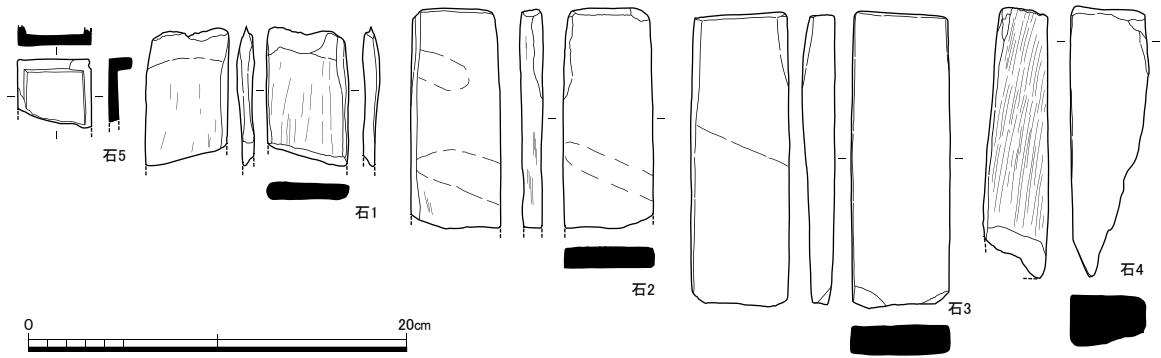


図 16 石製品実測図（1 : 4）

いる。全体に縄目痕が残る。瓦 11 は井戸 304 から出土した。

（4）石製品（図 16）

石 1～4 は砥石である。石 1～3 は扁平な砥石で粒子が細かい。石 2 は長軸に対して斜め方向に凹んでおり、局部的な使用が認められる。色調はすべて黄褐色系である。石 4 は角柱状で石材から切り出した痕跡が残る。粒子は細かい。色調は黄褐色系である。石 1 は地下室 370 から、石 2～4 は土坑 302 から出土した。

石 5 は硯である。小型で携帯用と考えられる。色調は暗緑色である。土坑 302 から出土した。

（5）金属製品（図 17）

金 1 は取手金具である。直径 15.0cm の円盤に円環取手を頭に取り付けた釘を中心に貫通させている。円盤の裏側には小さな突起状の釘が 8 か所ある。中心の釘は先端が折れ曲がっており、木質が付着している。円環取手は直径 8.0cm を測り、厚みは 1.0cm である。中心の釘は円環を取り付ける頭部に円形の穿孔があり、釘の部分の長さは 12cm である。円盤に対して斜めに打ち込まれている。円盤の一部は欠損している。

金 2～8 は合釘である。合釘は板材同士をつなげる補強金具で、小刀のような形状をしている。片面は湾曲し、もう一方は突起状に段を有する。長さは 16.6～20.4cm を測り、厚さは 0.3～0.4cm で扁平である。刃部はない。両面に木質が付着している。

金 9～59 は釘である。欠損して不明なものもあるが、すべて頭を折り曲げたものである。長さは完存するもので 3.4cm～20.9cm までである。先端が欠損したものや折れ曲がっているものがある。また、金 31 は円弧を描くように先が曲がっている。金 1～59 は地下室 370 から出土した。

金 60～62 は銅銭である。金 60 は 8 枚の銅銭が重なった状態で付着しており、緡銭の一部と考えられる。表側で見える銭種は軋重元寶である。北宋銭である。金 61・62 は皇宋通寶である。何れも北宋銭である。金 60 は井戸 304、金 61・金 62 は地下室 370 から出土した。

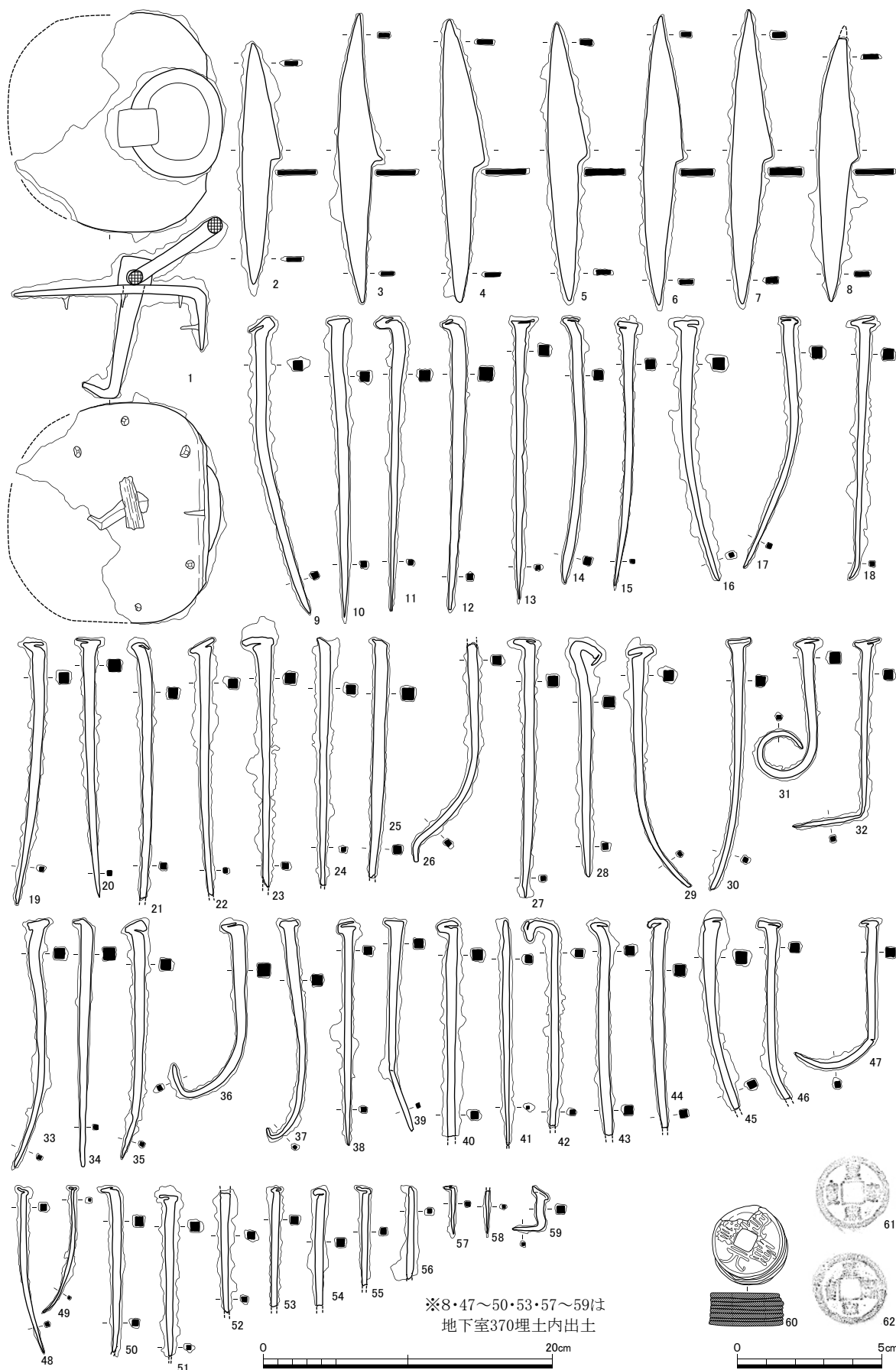


图 17 金属製品実測図（1：4、1：2）

5. まとめ

今回の調査では、主な成果として平安時代後期の鳥羽天皇御所に関係する遺構（雨落ち溝 100）と鎌倉時代の地下室があげられる。以下各項目について詳述する。

（1）鳥羽天皇御所（大炊殿）の雨落ち溝について

平安時代後期には平安宮に居住して行事を行うことは少なくなり、公家の邸宅を借用した里内裏が一般的となっていた。鳥羽天皇も同様で、内裏が存在していたにも係わらず平安京内の貴族邸も借用していた。鳥羽天皇が御所とした場所は、第1期大炊殿、第2・3期大炊殿、西六条殿、内裏、土御門高倉殿、高陽院、大炊御門万里小路殿、鳥羽殿、三条烏丸殿、土御門烏丸殿があげられ、これらを往復している時期もある。

第1期大炊殿（大炊御門北・東洞院西の1町）は、嘉承2（1107）年に当初から宗仁親王（のちの鳥羽天皇）御所として白河上皇によって造営されたもので、幼少で鳥羽天皇が踐祚したのちも里内裏として使用した。しかし天永2（1111）年、第1期大炊殿で怪異が起きることを理由に東隣の1町規模の宅地に移転することとなった。しかし第2期大炊殿（大炊御門北・東洞院東の1町）は永久2（1114）年に焼失した。鳥羽天皇は大炊御門万里小路殿や西六条殿、土御門高倉殿を御所として転々とし、永久3（1115）年に第3期大炊殿（大炊御門北・東洞院東の1町）が再度建築された。しかし第3期大炊殿も永久4（1116）年に焼失した。その後大炊御門万里小路殿、土御門高倉殿、鳥羽殿、三条烏丸殿を借用し、永久5（1117）年に新造した土御門烏丸殿を御所とした。そして保安4（1123）年鳥羽天皇は譲位した。

鳥羽天皇時代の御所の特徴は、天皇（親王）のために御所を内裏の外に新造していることである。大炊殿の特徴は、第1期大炊殿は親王のために平安宮以外に造られた邸宅で、内裏に準ずる構成とされる。第2期大炊殿は第1期大炊殿を移築しているため同様の構成と考えられるが、一部内裏に準ずる様式が付加され、南庭に内裏と同様桜と橘が植えられていたとされる。第3期大炊殿は詳細が不明であるが当初から鳥羽天皇御所として新造されているため、第2期大炊殿に準じた構成と様式と考えられる。そして永久5（1117）年に新造された土御門烏丸殿は「殿舎大略模大内」（『百鍊抄』）とあることから、内裏を模した最初の平安宮外の邸宅であるとされる。

遺構説明でも記したが、改めて雨落ち溝 100 について説明すると次の通りである。調査区南端で検出した雨落ち溝 100 は、溝肩を三列ずつの石組で造作した東西方向の溝である。石組を含めると幅 1.12 m である。溝の南側整地土は、調査区全体の他では確認できなかったような粒度の細かい土を使用し、ゆるやかな勾配となって高まっている。また、雨落ち溝の西側延長上の整地は溝の標高よりも 5 cm 程度高く、強く締め固められている。これらから、雨落ち溝は西側に延長せず、後世の攪乱で壊された部分で南側に直角に曲がると推定される。

今回の調査地は鳥羽天皇御所の一つである大炊殿跡（第2・3期大炊殿）とされる。この邸宅全体の指図は現存していないが、限りなく近い形ではないかとされている資料が当地邸宅の西隣にあった第1期大炊殿の指図である¹。第2・3期大炊殿の宅地範囲に雨落ち溝 100 の位置を配置したもの（図 18）と第1期大炊殿指図を比較すると、同じ位置に当てはまるものはないが、「寝殿（南

殿) もしくは「西対」の南辺に相当する建物が想定できる。そして南側で検出したきめの細かい整地土は南庭の可能性が考えられる。また、溝 100 の上面およびその周辺には炭片が確認できたことは上記に述べた建物の焼失の痕跡と考えられる。

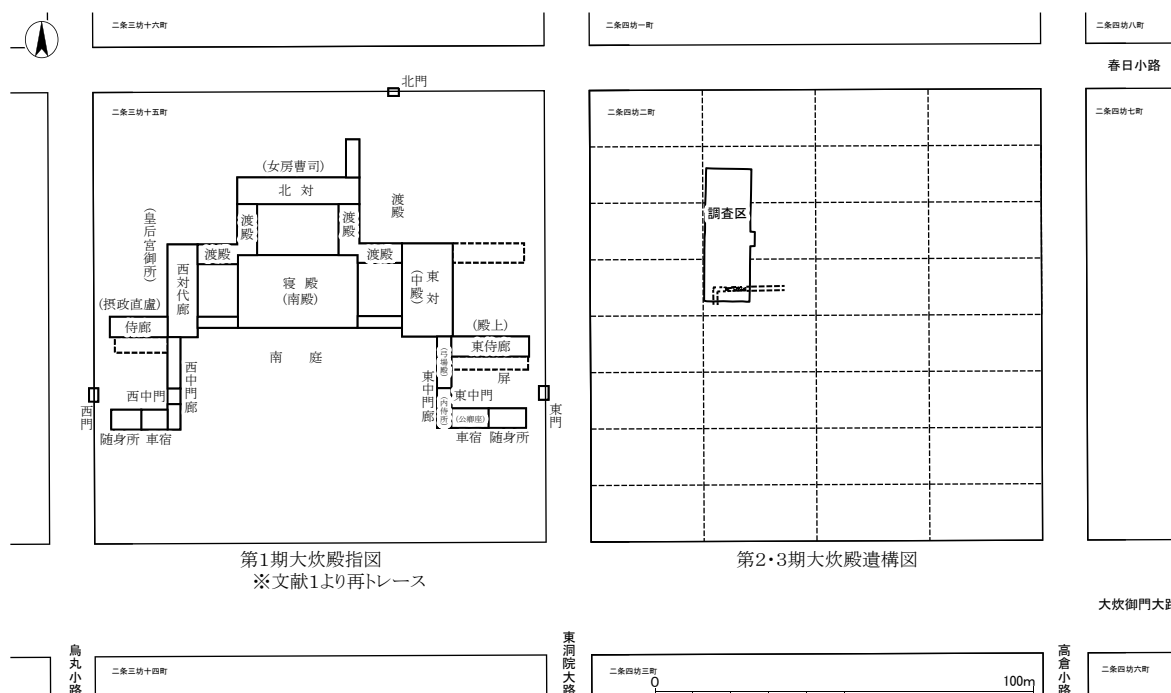


図 18 大炊殿建物配置図 (1 : 2,000)

(2) 鎌倉時代の地下室について

検出した地下室 370 は合釘や取手金具などの金属部材に加え、床に石を据え置くなど様々な手を加えた特異な遺構である。諸々の検出状況から遺構の復元を試みた (図 19)。

土坑の底周囲で頭を下にして出土した釘の配置状況からみて、地上で作成した箱をひっくり返して土坑内部に収めたものであると考えられる。ちなみに土坑上部は掘り返されて壊されているため詳細は不明である。なお出土した釘の長さで分類して、3cm 前後を一寸釘、6cm 前後を二寸釘、9cm 前後を三寸釘、12cm 前後を四寸釘、15cm 前後を五寸釘、18cm 前後を六寸釘、21cm 前後を七寸釘とした。出土した釘が折れや曲げ、欠損があるため細かな分類は避け大まかに分類、呼称することとした。そうすると地下室 370 の底部周縁から出土した釘はすべて折釘で、5~7寸釘が使用されている。なお欠損のため当初の長さが不明な釘 (金 51・52・54・56) や明らかに短い釘 (金 59) はここでの考察からは除外した。

まず床面全体の規模は、地下室 370 の底部周縁で出土した釘列の外周範囲から東西長 140cm、南北長 154cm であると考えられる。床板一枚ずつの規模を検討するにあたっては、まず合釘の位置から検討した。合釘は厚い板をはぎ合わせてずれないようにするための釘で、醍醐寺五重塔の扉に使用された例などがある²。合釘の先端は東西方向を向いていることから南北方向に板が並んでいたことがわかる。また合釘の位置をおおよそ均等に配置し直すと、板幅は 35cm で 4 枚配置できる。板は東西両端の釘列までであるから、長さは 154cm である。板の厚みは一般的な大工仕事を参考にすると、材木を釘で打ち付けて連結する場合には釘を打ち付ける側の材木の厚さの倍の釘の長さが必要とされる。底部周縁から出土した釘の多くが 5 寸釘 (15cm 前後) 以上であったことから板の厚みは 7cm と想定した。この厚さであれば幅が 1.1cm 前後の合釘を打ち込んでも割れることはない。

このような板を4枚ならべてみると小口側（南北端）で板1枚につき3本の釘が打ち込まれていることになる。ただし、東端の一枚は北端1本、南端2本となるため一定の法則ではない。また東から2枚目の北端は4本となるが、金59は極端に短い釘で除外している。次に木端側（東西端）をみると釘の間隔が小口側（南北端）よりも広い。そして床面に設置された石の位置と合わせてみると石の位置とほぼ同じ場所にある釘が目される。西端側の釘（金15・9・51・19）と東端側の釘（金24・21・33・18・28）はほとんどが6寸釘で他よりも長い釘を使用している。以上のことから床板とした4枚の板の下に補強のための胴木を設けていたと考えた。胴木は7cm角材の半分の厚さで東西方向に4本通したものと想定した。これによって安定した広い面が確保でき、底に設置した石を噛ますことで沈下を防ぐことができる。

そして側面の横板は、周縁の釘のなかで他と違って水平方向で出土した釘（金10、11、12、13、16、34、54）に注目すると、南北方向の板材（長さ154cm）から東西方向の板材（長さ124cm）にむけて2本の釘を打ち付けていると考えられる。板材の厚さは床材と同じと想定した。また横板がどの位置まであったかは土坑上部では釘が原位置に残っていなかったため不明であるが、ここでは土坑の地上部まであったと想定して幅50cmの横板を復元した。

また土坑の底から出土した取手金具（金1）や埋土中から出土した合釘（金8）の存在から箱をふさぐ蓋板の存在が想定される。さらに蓋板は地上部以上にあったと想定し、復元図では地上部よりも40cm高い位置とした。これは床下収納を想定したものである。蓋板も床板と同様に合釘を使用したと考えられるが、1点しか出土していないため組み合わせ方法など詳細は不明である。仮に床板と同等の規模（140cm×154cm×7cm）であった場合、取手金具の板側の釘の長さは、先端を折り返した部分を除くと7cm程度でちょうど収まる。金具の円盤部分の一旦が折れ曲がっているのが落下した衝撃で曲がったものでないのであれば、蓋板の小口側もしくは木端側に取り付けられるようになっていたと想定できる。しかし取手金具1か所で蓋板を持ち上げるのはかなりの重量であろうと想像できる。仮に蓋板に使用された木材がヒノキ（比重0.41 g/cm³）であれば、36.8kg程度でかなりの重量となる。このためどのような構造となるのか今回の考察では及ばなかった。いずれにせよかなり強固な箱で、沈下して変形しないように造作されているため、重要なものを保管していたと考えられる。

地下室370の周辺をみると建物6の柱列には巨大な礎石が使用されているなど特殊性が考えられる。さらに南に約5m離れた土坑140は地下室370と同規模の掘方で、重複する縦長の土坑212は床に据えた石を取り除いたためにできた痕跡とも考えられる。これらが寺院の堂宇などであれば、経典や仏像を安置する目的も考えられる。

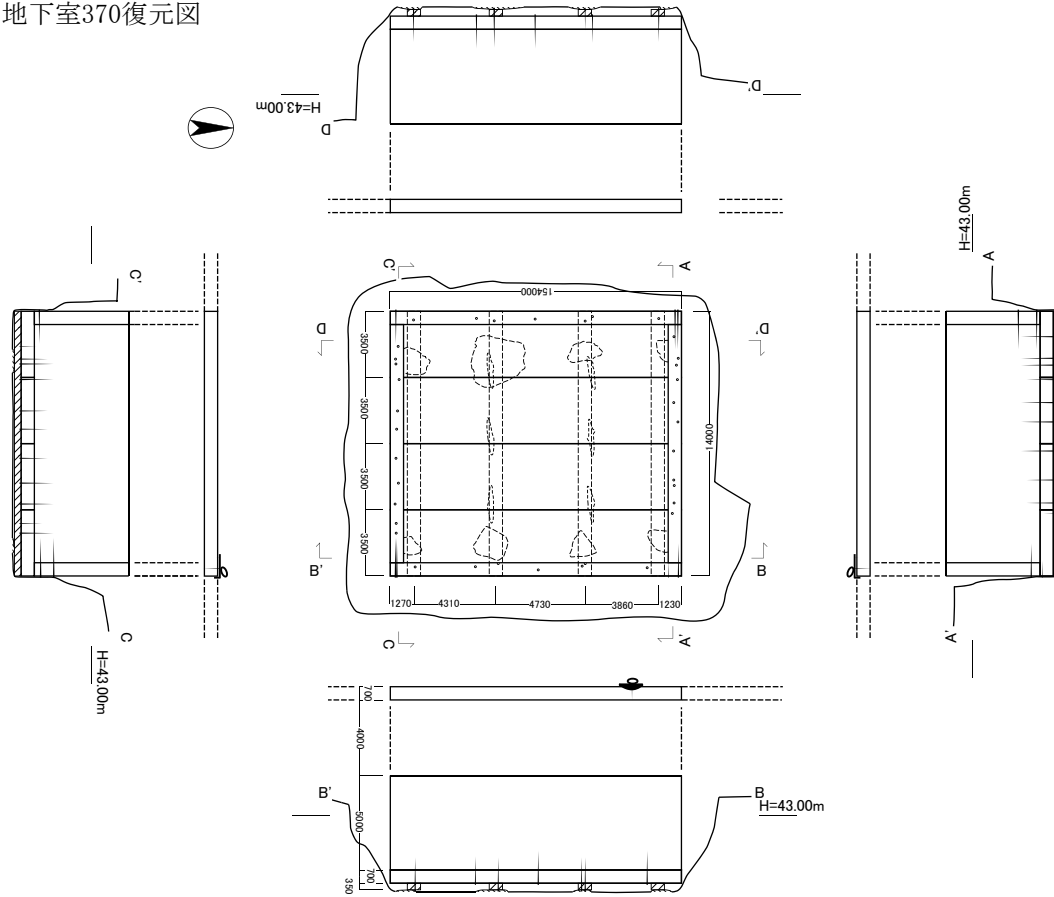
注釈

- 1 太田静六 1987 「第九節 大炊殿と六条殿」『寝殿造の研究』
- 2 堀川一男・梅沢義信 1962 「古代鉄釘の冶金学的調査」『鉄と鋼』第1号

参考文献

- ・平山育男 2000 「土御門鳥丸殿創建の意義」『日本建築学会計画系論文集』第530号
- ・平山育男 1992 「鳥羽天皇御所について」『建築史学』18号

地下室370復元図



地下室370釘位置図

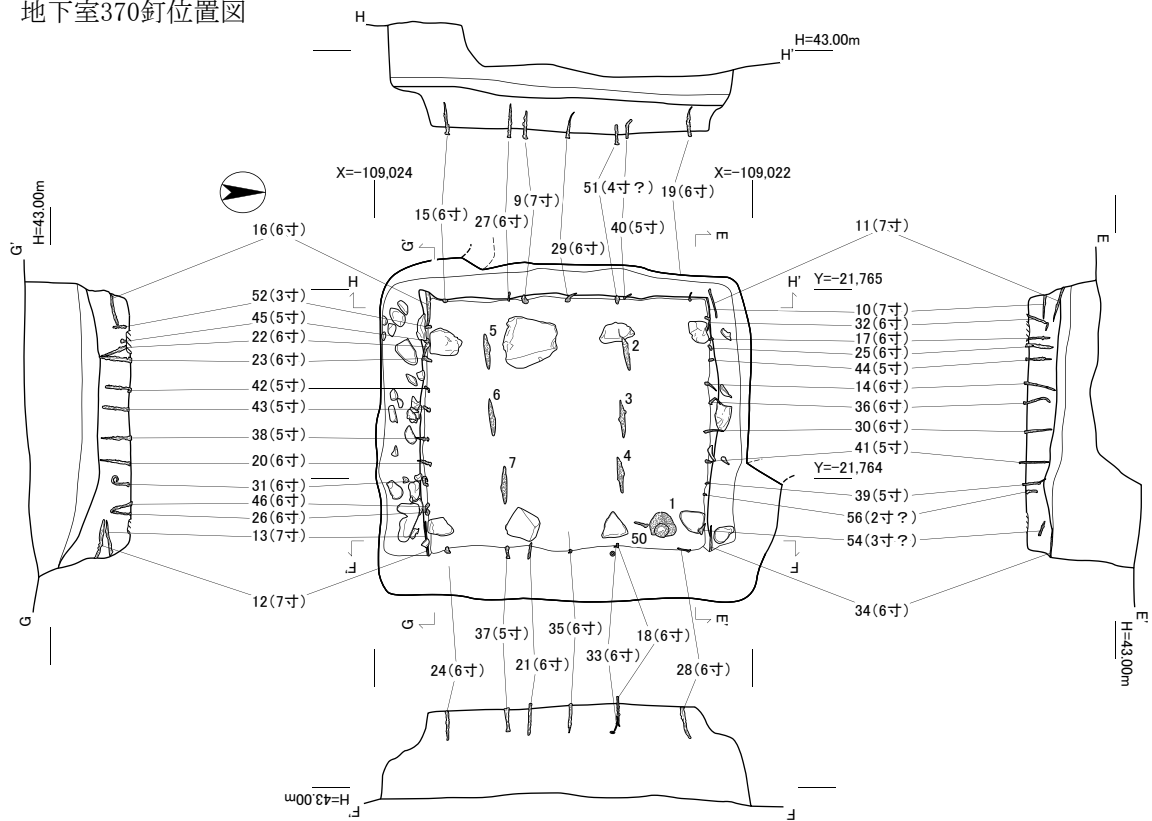


图 19 地下室 370 復元図、釘位置図 (1 : 40)

表3 出土遺物観察表

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 ()は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)				
1	柱穴541	土師器	皿A	11.4	1.4	5.4	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
2	柱穴541	土師器	皿A	15.9	(2.0)	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
3	柱穴541	土師器	皿A	18.4	2.9	8.6	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
4	溝640	土師器	皿A	10.8	1.0	4.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
5	溝640	土師器	皿A	15.4	—	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	口縁端部に煤が付着
6	溝640	土師器	皿A	16.1	2.1	6.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
7	溝640	土師器	皿A	20.4	(3.2)	—	平安	外：ナデ、横ナデ、ユビオサエ 内：横ナデ	黄橙色	
8	溝640	黒色土器	碗	15.6	5.1	7.4	平安	外：ミガキ 内：ミガキ	外：橙色、黒色 内：黒色	
9	溝640	須恵器	鉢	26.0	(7.6)	—	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰白色	
10	溝640	緑釉陶器	皿	14.2	2.7	7.2	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：黄褐色 釉薬：オリーブ黄色	
11	柱穴513	土師器	皿A	10.0	1.3	4.8	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
12	柱穴513	土師器	皿A	10.0	1.5	3.2	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
13	柱穴513	土師器	皿A	11.6	1.8	4.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
14	柱穴513	黒色土器	碗	14.4	(5.0)	—	平安	外：ミガキ 内：ミガキ	黒色	
15	柱穴513	黒色土器	碗	17.4	(6.5)	—	平安	外：ミガキ 内：ミガキ	淡黄橙色～黒色	
16	柱穴513	灰釉陶器	碗	—	(3.7)	7.6	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	
17	柱穴513	緑釉陶器	皿	11.6	(2.1)	—	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：淡黄褐色 釉薬：オリーブ黄色	
18	土坑343	土師器	皿A	14.8	(2.1)	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
19	土坑343	土師器	皿A	16.8	3.0	8.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
20	土坑343	黒色土器	碗	14.0	(3.3)	—	平安	外：ミガキ 内：ミガキ	外：黄橙色、黒色 内：黒色	
21	土坑343	緑釉陶器	皿	—	(1.5)	10.0	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：橙色 釉薬：緑色	
22	溝555	土師器	皿A	10.8	(1.8)	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
23	溝555	土師器	皿A	11.2	1.1	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄褐色	
24	溝555	土師器	皿A	13.0	2.4	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄褐色	
25	溝555	土師器	鉢	14.0	(4.5)	—	平安	外：ナデ 内：ナデ、横ハケ	黄褐色	
26	溝555	灰釉陶器	皿	—	(1.2)	6.1	平安	ロクロナデ	灰白色	
27	溝555	緑釉陶器	碗	—	(2.6)	8.6	平安	ロクロナデ	胎土：赤橙色 釉薬：深緑色	
28	柱穴389	土師器	皿N	13.6	2.1	7.4	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
29	柱穴389	土師器	皿N	13.8	3.0	6.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
30	柱穴389	土師器	皿N	14.0	2.9	8.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
31	柱穴389	土師器	皿N	14.0	3.4	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい黄橙色	
32	土坑366	土師器	皿A	9.4	2.0	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
33	土坑366	土師器	皿A	10.2	1.4	5.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
34	土坑366	土師器	皿N	10.4	1.8	3.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
35	土坑366	土師器	皿N	15.0	2.5	8.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄褐色	
36	土坑366	土師器	皿N	16.6	2.6	10.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄褐色	
37	土坑366	須恵器	鉢	15.6	5.5	5.6	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色	

遺物 番号	遺構	器種	器形	法 量 ()は残存値			遺物の 時期	調整技法	色調	備考
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
38	土坑368	土師器	皿A	10.0	1.6	5.6	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
39	土坑368	土師器	皿A	9.8	1.2	4.8	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
40	土坑368	土師器	皿N	14.0	(2.5)	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
41	土坑368	灰釉陶器	壺	—	(5.0)	8.0	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色	
42	土坑368	灰釉陶器	碗	—	(4.3)	6.8	平安	ロクロナデ	灰色	内面に重ね焼き痕跡
43	土坑115	土師器	皿N	15.6	(3.0)		平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
44	土坑115	土師器	皿N	16.0	3.0	5.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
45	土坑490	土師器	皿N	8.2	1.5	5.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい黄橙色	
46	土坑490	土師器	皿N	8.8	1.5	3.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい黄橙色	
47	土坑490	土師器	皿N	9.0	1.3	5.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄褐色	
48	土坑490	土師器	皿N	9.2	1.8	6.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
49	土坑490	土師器	皿N	9.2	1.5	6.6	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
50	土坑490	土師器	皿N	13.6	2.5	8.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい黄橙色	
51	土坑490	土師器	皿N	13.6	2.6	9.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
52	土坑490	土師器	皿N	14.8	2.5	10.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
53	柱穴320	土師器	皿N	13.0	2.3	8.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
54	地下室370	土師器	皿Ac	4.8	1.3	3.4	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
55	地下室370	土師器	皿Ac	5.1	1.1	5.4	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
56	地下室370	土師器	皿Ac	5.4	0.9	5.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
57	地下室370	土師器	皿N	8.0	1.4	4.8	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄褐色	
58	地下室370	土師器	皿N	9.7	1.1	7.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
59	地下室370	土師器	皿N	8.1	1.2	4.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	橙色	
60	地下室370	土師器	皿N	8.3	1.5	3.8	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	橙色	
61	地下室370	土師器	皿N	8.5	1.0	6.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄褐色	
62	地下室370	土師器	皿N	8.8	1.2	—	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい橙色	
63	地下室370	土師器	皿N	9.4	1.5	3.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄褐色	
64	地下室370	土師器	皿N	9.2	1.3	3.4	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	橙色	
65	地下室370	土師器	皿N	11.0	1.9	4.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡橙色	
66	地下室370	土師器	皿N	13.2	(2.5)	—	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	橙色	
67	地下室370	土師器	皿N	13.2	(2.1)	—	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	砂粒粗い。
68	地下室370	土師器	皿N	13.0	2.3	—	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	にぶい黄橙色	
69	地下室370	土師器	皿S	9.0	2.4	5.6	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
70	地下室370	土師器	皿S	11.2	3.0	4.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
71	地下室370	土師器	皿S	12.8	2.9	7.6	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
72	地下室370	土師器	皿S	15.0	3.4	6.0	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
73	地下室370	瓦質土器	羽釜	26.8	(5.3)	—	鎌倉	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰色、黒色	
74	地下室370	須恵器	鉢	—	(5.0)	7.4	鎌倉	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色	
75	地下室370	緑釉陶器	碗	—	(4.3)	10.1	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：緑色	混入品

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 ()は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)				
76	地下室370	灰釉陶器	皿	—	(1.5)	5.2	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色	混入品
77	地下室370	白磁	口禿皿	10.8	2.0	8.0	鎌倉	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	
78	溝312	土師器	皿A	10.0	1.6	4.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
79	溝312	土師器	皿A	10.5	1.6	5.0	平安	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
80	溝312	土師器	皿N	14.4	(2.1)	—	平安	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
81	整地	白色土器	皿	11.4	2.3	5.8	平安	ロクロナデ	白色	内面に朱が付着
82	整地	白色土器	皿	13.5	2.3	6.0	平安	ロクロナデ	白色	
83	整地	須恵器	碗	12.6	4.7	5.0	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色	
84	整地	青白磁	口禿皿	10.0	2.0	7.8	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：透明	
85	整地	緑釉陶器	皿	13.2	2.7	6.3	平安	ロクロナデ	胎土：灰黄褐色 釉薬：緑色	
86	整地	緑釉陶器	皿	11.8	2.2	6.8	平安	ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：オリーブ黄色	
87	整地	緑釉陶器	碗	15.7	(6.3)	—	平安	ロクロナデ	胎土：灰黄褐色 釉薬：緑色	
88	整地	緑釉陶器	碗	—	6.0	7.8	平安	ロクロナデ	胎土：灰黄褐色 釉薬：緑色	
89	整地	緑釉陶器	碗	—	(2.0)	6.9	平安	ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：オリーブ黄色	
90	井戸304	土師器	皿Sh	6.8	2.0	2.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	灰白色	
91	井戸304 下層	土師器	皿Sh	7.0	2.0	2.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	灰白色	
92	井戸304	土師器	皿Sh	7.0	2.0	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
93	井戸304	土師器	皿Sh	7.0	1.9	2.4	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
94	井戸304 上層	土師器	皿N	8.8	1.5	4.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
95	井戸304	土師器	皿S	8.4	2.0	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	灰白色	
96	井戸304	土師器	皿S	8.6	1.7	4.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
97	井戸304	土師器	皿S	8.8	2.3	4.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
98	井戸304	土師器	皿S	8.4	2.0	4.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
99	井戸304	土師器	皿S	11.6	2.5	4.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	灰白色	
100	井戸304 上層	土師器	皿S	12.2	2.8	10.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	灰白色	
101	井戸304	土師器	皿S	14.4	2.7	4.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄褐色	
102	井戸304 上層	土師器	皿S	14.4	(2.7)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
103	井戸304	土師器	皿S	14.6	2.3	7.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
104	井戸304	土師器	皿S	15.8	(2.0)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
105	井戸304	土師器	皿N	12.0	(2.2)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡褐色	
106	井戸304	土師器	皿N	14.0	(2.7)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
107	井戸304 下層	緑釉陶器	耳皿	—	(2.7)	6.0	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：緑色	混入品
108	井戸304	緑釉陶器	壺	—	(2.9)	—	平安	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：深緑色	混入品
109	井戸304	施釉陶器	平碗	14.6	6.0	4.6	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：黄橙色 釉薬：オリーブ黄色	瀬戸美濃産
110	井戸304	施釉陶器	天目茶碗	12.2	(6.1)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：褐色	瀬戸美濃産
111	井戸304	陶器	播鉢	42.6	(6.6)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：オリーブ黄色	瀬戸美濃産
112	井戸304	石製品	石鍋	21.6	(6.8)	—	室町	外：縦ケズリ 内：ケズリ	灰白色	
113	井戸304	青磁	蓋	18.8	(6.0)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰色 釉薬：オリーブ黄色	

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 ()は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
114	井戸304	瓦質土器	鍋	34.8	(5.8)	—	室町	外：ナデ、ユビオサエ 内：イタナデ	灰色、黒色	外面に煤付着
115	井戸304 下層	瓦質土器	火舎	—	(4.6)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色、黒色	
116	井戸304 上層	瓦質土器	火舎	34.8	(4.0)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	灰色、黒色	
117	井戸304 下層	瓦質土器	火舎	—	(6.5)	31.0	室町	外：ナデ 内：ナデ	黒色	
118	井戸304 下層	瓦質土器	火舎	13.0	(3.3)	—	室町	外：ナデ 内：横ハケ、ナデ	黒色	
119	井戸304 下層	焼締陶器	甕	42.4	(14.6)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐色	丹波産
120	井戸304	焼締陶器	甕	49.0	(9.5)	—	室町	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	褐色	常滑産
121	土坑306	施釉陶器	皿	32.8	(3.3)	—	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	
122	土坑306	施釉陶器	鉢	31.8	(2.8)	—	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	
123	土坑306	施釉陶器	丸碗	11.2	(4.5)	—	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：白色	
124	土坑306	青磁	蓋	21.2	7.6	—	室町	ロクロナデ	胎土：灰黄橙色 釉薬：オリーブ黄色	
125	土坑306	焼締陶器	甕	53.6	(9.9)	—	室町	ロクロナデ	灰褐色	
126	土坑270	土師器	皿Sh	7.0	1.8	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡褐色	
127	土坑270	土師器	皿N	8.0	(1.5)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
128	土坑270	土師器	皿S	11.0	2.1	4.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
129	土坑270	施釉陶器	香炉	9.0	3.2	6.4	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：灰オリーブ色	底部外面に「龍」の墨書
130	土坑270	瓦質土器	鍋	29.2	(6.5)	—	室町	外：横ナデ 内：横ハケ	灰色	外面に煤付着
131	土坑163	土師器	皿Sh	6.6	1.5	2.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡褐色	
132	土坑163	土師器	皿Sh	6.6	1.8	2.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄橙色	
133	土坑163	土師器	皿Sh	6.6	1.7	2.9	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
134	土坑163	土師器	皿Sh	6.6	1.8	2.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
135	土坑163	土師器	皿Sh	6.6	1.6	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
136	土坑163	土師器	皿Sh	6.7	1.4	2.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄橙色	
137	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	1.8	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
138	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	2.1	2.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	浅黄色	
139	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	1.8	2.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
140	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	1.8	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
141	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	1.6	2.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
142	土坑163	土師器	皿Sh	6.8	1.5	2.0	室町	外：ユビオサエ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
143	土坑163	土師器	皿Sh	7.0	2.0	3.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
144	土坑163	土師器	皿Sh	7.0	1.8	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
145	土坑163	土師器	皿Sh	7.0	1.6	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
146	土坑163	土師器	皿Sh	7.0	1.7	2.2	室町	外：ユビオサエ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
147	土坑163	土師器	皿Sh	7.1	1.9	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
148	土坑163	土師器	皿Sh	7.1	1.6	2.6	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡褐色	
149	土坑163	土師器	皿Sh	7.2	2.0	2.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡黄橙色	
150	土坑163	土師器	皿Sh	7.2	1.8	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 ()は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)				
151	土坑163	土師器	皿Sh	7.3	1.7	2.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
152	土坑163	土師器	皿Sh	7.4	1.8	3.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
153	土坑163	土師器	皿Sh	7.5	1.8	2.2	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
154	土坑163	土師器	皿Sh	7.5	1.5	2.9	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
155	土坑163	土師器	皿S	12.2	2.6	7.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	浅黄橙色	
156	土坑163	土師器	皿S	12.2	2.2	6.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	浅黄橙色	
157	土坑163	土師器	皿S	12.8	2.3	5.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
158	土坑163	土師器	皿S	12.8	2.6	6.4	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄橙色	
159	土坑163	土師器	皿S	13.0	2.3	6.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄橙色	
160	土坑163	土師器	皿S	13.5	2.5	6.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	橙色	
161	土坑163	瓦質土器	羽釜	26.0	(5.2)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	灰色	
162	土坑163	瓦質土器	鉢	22.0	4.5	12.2	室町	外：横ナデ 内：横ハケ	灰色	
163	土坑283	施釉陶器	志野向付	—	(7.4)	—	室町	型押し成形	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	瀬戸美濃産
164	土坑283	施釉陶器	志野皿	12.2	2.8	7.0	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：白色	瀬戸美濃産
165	土坑283	施釉陶器	盤	22.8	(5.8)	—	鎌倉～室町	ロクロナデ	胎土：灰黄橙色 釉薬：赤褐色、黄褐色	
166	土坑283	瓦質土器	羽釜	23.6	(8.0)	—	室町	外：ナデ、ユビオサエ 内：板ナデ	灰白色	
167	土坑283	瓦質土器	羽釜	23.3	(13.3)	—	室町	外：ナデ、ユビオサエ 内：板ナデ	灰白色	
168	井戸136	土師器	皿Sb	8.8	2.0	3.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
169	井戸136	土師器	皿Sb	9.4	2.0	4.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
170	井戸136	土師器	皿S	11.0	2.3	4.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
171	井戸136	土師器	皿S	13.4	2.4	6.8	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
172	井戸136	青磁	碗	12.4	(2.4)	—	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	
173	井戸136	施釉陶器	天目茶碗	—	(4.0)	4.0	室町	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	
174	井戸136	施釉陶器	丸皿	10.0	2.2	6.0	室町	ロクロナデ	胎土：黄褐色 釉薬：褐色	
175	井戸136	瓦質土器	羽釜	19.2	(3.3)	—	室町	外：ナデ、横ナデ 内：横ハケ	灰色	
176	井戸136	焼締陶器	播鉢	28.6	(6.6)	—	室町	ロクロナデ	褐色	5条一単位。備前。
177	溝170	土師器	皿Sh	6.4	1.9	2.1	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
178	溝170	土師器	皿Sh	7.2	1.8	2.0	室町	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	淡橙色	
179	溝170	施釉陶器	皿	12.3	(2.5)	—	室町	ロクロナデ	淡橙色	
180	柱穴218	瓦質土器	壺	7.0	(8.8)	—	中世	外：ナデ、ミガキカ 内：ナデ	外：黒色 内：浅黄橙色	
181	土坑302	土師器	皿S	10.8	2.0	6.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	
182	土坑302	土師器	皿S	10.2	2.2	3.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	黄橙色	燈明皿
183	土坑302	土師器	皿S	11.0	2.0	4.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
184	土坑302	土師器	皿S	11.4	2.0	4.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	
185	土坑302	土師器	皿S	12.8	2.3	—	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	燈明皿
186	土坑302	土師器	皿S	13.0	2.1	—	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
187	土坑302	土師器	塩壺蓋	7.0	2.0	—	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 ()は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
188	土坑302	土師器	塩壺蓋	7.0	2.1	—	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
189	土坑302	土師器	塩壺身	5.0	8.6	4.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、未調整	橙色	
190	土坑302	土師器	塩壺身	5.2	8.5	4.0	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、未調整	橙色	
191	土坑302	土師器	小型壺	2.2	2.3	2.1	安土桃山	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	灰白色	
192	土坑302	施釉陶器	天目茶碗	10.4	6.0	3.1	安土桃山	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：黒褐色	
193	土坑302	施釉陶器	天目茶碗	11.5	7.8	4.4	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：黒褐色	
194	土坑302	施釉陶器	輪花皿	17.2	3.0	9.0	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：緑色	
195	土坑302	施釉陶器	向付	13.5	6.0	9.2	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	底部外面にトチン痕残る。
196	土坑302	施釉陶器	向付	—	(4.2)	—	安土桃山	型押し成形	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	
197	土坑302	施釉陶器	鉢	31.5	(4.5)	—	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	瀬戸美濃産
198	土坑302	施釉陶器	鉢	36.5	(7.5)	—	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：オリーブ黄色	瀬戸美濃産
199	土坑302	施釉陶器	壺か	—	(7.6)	17.0	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：褐色	
200	土坑302	輸入染付	皿	—	(2.5)	13.2	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	
201	土坑302	焼締陶器	播鉢	—	(15.5)	—	安土桃山	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	赤褐色	丹波産
202	土坑27	土師器	皿Nr	5.5	0.8	—	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄褐色	
203	土坑27	土師器	皿S	11.0	2.0	5.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	燈明皿
204	土坑27	土師器	皿S	11.0	2.2	5.6	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	燈明皿
205	土坑27	土師器	皿S	11.0	2.1	6.6	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄橙色	燈明皿
206	土坑27	土師器	皿S	12.5	2.0	5.6	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄褐色	
207	土坑27	土師器	皿S	11.0	2.0	6.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	黄褐色	
208	土坑27	土師器	皿S	11.4	2.0	6.8	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	燈明皿
209	土坑27	土師器	皿S	11.4	1.9	6.8	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄褐色	
210	土坑27	土師器	皿S	11.6	2.1	6.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	黄褐色	
211	土坑27	土師器	皿S	12.0	2.1	6.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ	淡黄褐色	
212	土坑27	土師器	皿S	12.0	2.1	5.8	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	淡黄褐色	
213	土坑27	土師器	皿S	12.0	2.1	7.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	淡黄褐色	
214	土坑27	土師器	皿S	16.2	3.0	—	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、ナデ	橙色	
215	土坑27	土師器	塩壺身	4.8	6.8	4.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：横ナデ、未調整	橙色	
216	土坑27	土師器	甕	20.4	(7.6)	—	平安	外：ナデ 内：横ハケ、ナデ	灰黄褐色	混入品
217	土坑27	土師器	焙烙	29.0	(5.8)	—	安土桃山 ～江戸	外：ナデ 内：ハケ、ナデ	黄褐色	外面に煤付着
218	土坑27	施釉陶器	丸碗	10.5	(4.2)	—	安土桃山 ～江戸	ロクロナデ	胎土：淡黄色 釉薬：灰白色	瀬戸美濃産
219	土坑27	施釉陶器	皿	13.3	3.7	4.6	安土桃山 ～江戸	ロクロナデ	胎土：黄褐色 釉薬：オリーブ黄色	唐津産
220	土坑27	施釉陶器	壺	—	(18.3)	10.6	安土桃山 ～江戸	外：タタキ 内：充て具痕	胎土：黄褐色 釉薬：オリーブ黄色	
221	土坑27	瓦質土器	火鉢	12.2	3.8	10.4	安土桃山 ～江戸	外：ミガキ 内：ミガキ	淡黄褐色～黒色	
222	土坑27	瓦質土器	火舎	26.2	11.0	—	安土桃山 ～江戸	外：ミガキ 内：ナデ、指オサエ	灰黄褐色～灰色	
223	土坑27	瓦質土器	火舎	—	(3.1)	23.6	安土桃山 ～江戸	外：ミガキ 内：板ナデ	灰黄褐色～灰色	
224	土坑27	焼締陶器	播鉢	—	(7.9)	14.4	安土桃山 ～江戸	ロクロナデ	褐色	丹波産
225	井戸60	土師器	皿S	9.4	1.8	5.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	

遺物番号	遺構	器種	器形	法量 () は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)				
226	井戸60	土師器	皿S	9.9	1.5	4.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
227	井戸60	土師器	皿S	12.3	2.0	7.0	安土桃山 ～江戸	外：ナデ、横ナデ 内：ナデ	橙色	
228	井戸60	施釉陶器	天目茶碗	—	2.8	5.0	安土桃山 ～江戸	ロクロナデ	胎土：灰白色 釉薬：黒褐色	瀬戸美濃産
229	井戸60	焼締陶器	播鉢	31.0	(6.6)	—	安土桃山 ～江戸	ロクロナデ	赤褐色	丹波産

表4 出土瓦観察表

遺物番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	備考
				瓦当高 (cm)	瓦当幅 (cm)	瓦当厚 (cm)				
瓦1	柱穴541	瓦	軒丸瓦	瓦当高 (11.4)	瓦当幅 (13.4)	瓦当厚 2.5	平安後期	ナデ	黒灰色	蓮華紋軒丸瓦。范が弱く粗雑な造り。
瓦2	土坑343	瓦	軒丸瓦	瓦当高 15.0	瓦当幅 15.7	瓦当厚 3.7	平安後期	ナデ	灰黄褐色	八葉単弁蓮華紋軒丸瓦。瓦当は楕円形である。珠紋に范傷が2か所認められる。范が弱く粗雑な造り。
瓦3	溝555	瓦	軒丸瓦	瓦当高 14.6	瓦当幅 15.2	瓦当厚 3.2	平安後期	ナデ	灰黄褐色	八葉単弁蓮華紋軒丸瓦。瓦当は楕円形である。范傷有り。
瓦4	土坑599	瓦	軒平瓦	瓦当高 (5.3)	瓦当幅 (10.4)	瓦当厚 2.5	平安後期	ナデ	黒灰色	唐草紋軒平瓦。中心飾りに向かい合わせのC字紋を配置する。平瓦部に布目痕が残る。
瓦5	柱穴86	瓦	軒平瓦	瓦当高 (7.2)	瓦当幅 —	厚さ 4.0	平安後期	板ナデ、ナデ	灰色	唐草紋軒平瓦。
瓦6	瓦溜り678	瓦	軒平瓦	瓦当高 (10.0)	瓦当幅 (13.5)	厚さ 4.0	平安後期	板ナデ、ナデ	灰色	唐草紋軒平瓦。中心飾りに小さなC字紋を背面で向かい合わせに配置する。平瓦部に布目痕が残る。
瓦7	土坑298	瓦	軒丸瓦	瓦当高 (7.0)	幅 (14.3)	長さ (18.5)	室町	板ナデ、ナデ	灰色	巴紋軒丸瓦。
瓦8	井戸136	瓦	軒平瓦	瓦当高 4.2	瓦当幅 (11.0)	厚さ 2.3	室町	板ナデ、ナデ	灰色	唐草紋軒平瓦。
瓦9	井戸136	瓦	丸瓦	長さ (25.0)	幅 19.9	厚さ 2.2	室町	板ナデ、ナデ	灰色	外面は丁寧板ナデしている。内面には布目痕が残る。
瓦10	井戸136	瓦	丸瓦	長さ 26.7	幅 14.0	厚さ 2.2	室町	板ナデ、ナデ	灰色	外面は丁寧板ナデしている。内面には布目痕が残る。
瓦11	井戸304 下層	瓦質製品	磚か	幅 12.5	長さ (21.2)	厚さ 6.6	室町	ナデ	灰色	形状は長方形で、外形の一回り小さい範囲を表裏両面を抉り、直径1.5cm程度の穿孔を施す。縄目が全体に残る。

表5 出土石製品観察表

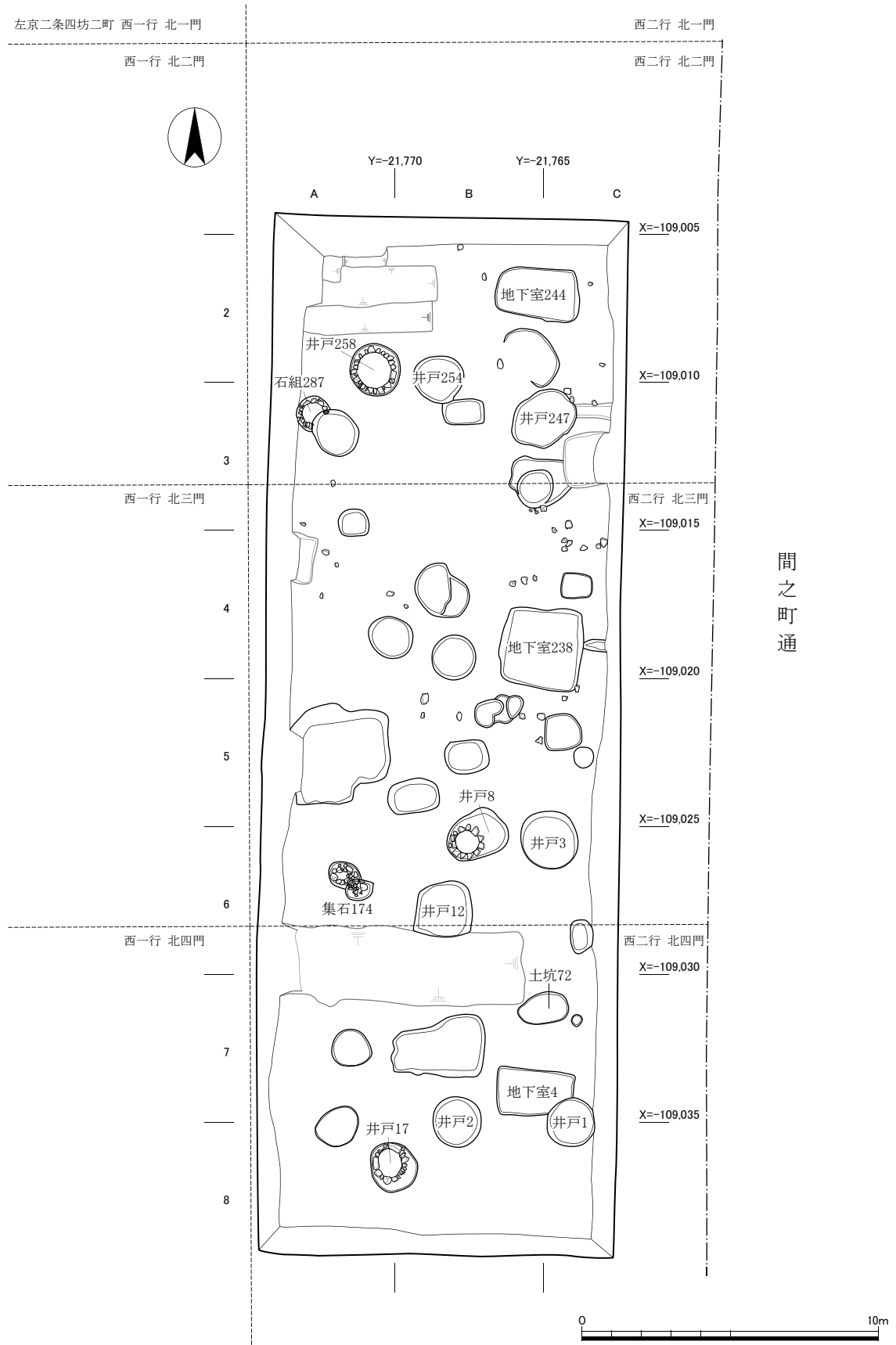
遺物番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			遺物の時期	調整技法	色調	特徴
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
石1	地下室370	石製品	砥石	(7.4)	4.4	0.6	鎌倉	ケズリ	黄褐色	中砥。使用により両面にゆるやかな凹凸がある。明瞭な使用痕は認められない。
石2	土坑302	石製品	砥石	(11.6)	4.8	1.2	室町	ケズリ	黄褐色	短冊形の中砥。使用により両面に局所的な凹みがある。欠損している。
石3	土坑302	石製品	砥石	15.7	5.2	1.7	室町	ケズリ	黄褐色	短冊形の中砥。片面がなだらかに凹む。明瞭な使用痕は認められない。欠損している。
石4	土坑302	石製品	砥石	(14.3)	4.1	3.4	室町	ケズリ	黄褐色	角柱状の中砥。明瞭な使用痕跡は認められない。一側面に製品を切り出した痕跡が残る。
石5	土坑302	石製品	硯	(3.2)	3.9	0.4	室町	ケズリ	暗緑色	小型の硯。欠損している。

表6 出土金属製品観察表

遺物番号	遺構	種類	器種	法量 () は残存値			遺物の時期	特徴
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
金1	地下室370	鉄製品	取手金具	13.0	15.0	0.3	鎌倉	円環引手の取り付け金具。円盤の中心に引手を通すために頭を穿孔した釘を差し込んでいる。円盤の裏側に止め釘を施す。木質が残る。
金2	地下室370	鉄製品	合釘	16.6	2.5	0.3	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.3cmを測る。
金3	地下室370	鉄製品	合釘	19.8	2.93	0.4	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.4cmを測る。
金4	地下室370	鉄製品	合釘	19.5	2.94	0.4	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.4cmを測る。
金5	地下室370	鉄製品	合釘	19.0	2.7	0.3	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.3cmを測る。
金6	地下室370	鉄製品	合釘	20.0	2.7	0.4	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.4cmを測る。
金7	地下室370	鉄製品	合釘	20.4	2.8	0.4	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.4cmを測る。
金8	地下室370	鉄製品	合釘	(18.2)	2.7	0.3	鎌倉	平面形は小刀のような形状で片方が突起状に膨らむ。反対側は緩やかな弧を描く。厚みが一定で0.3cmを測る。一方の先端が欠損している。
金9	地下室370	鉄製品	釘	20.9	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。全体が弧を描くように曲がっている。断面は方形。
金10	地下室370	鉄製品	釘	20.5	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金11	地下室370	鉄製品	釘	20.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金12	地下室370	鉄製品	釘	20.0	—	1.0	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金13	地下室370	鉄製品	釘	19.1	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金14	地下室370	鉄製品	釘	18.3	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金15	地下室370	鉄製品	釘	18.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端がやや曲がっている。断面は方形。
金16	地下室370	鉄製品	釘	18.2	—	0.8	鎌倉	頭部を折り返している。全体が弧を描くように曲がっている。断面は方形。
金17	地下室370	鉄製品	釘	18.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端にむけて曲がっている。断面は方形。
金18	地下室370	鉄製品	釘	18.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金19	地下室370	鉄製品	釘	18.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端がやや曲がっている。断面は方形。
金20	地下室370	鉄製品	釘	18.0	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金21	地下室370	鉄製品	釘	(17.8)	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金22	地下室370	鉄製品	釘	(17.8)	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金23	地下室370	鉄製品	釘	(17.2)	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金24	地下室370	鉄製品	釘	(17.0)	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金25	地下室370	鉄製品	釘	(16.5)	—	1.0	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金26	地下室370	鉄製品	釘	(15.6)	—	0.5	鎌倉	頭部が欠損している。先端が弧を描くように曲がっている。断面は方形。
金27	地下室370	鉄製品	釘	17.9	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金28	地下室370	鉄製品	釘	17.8	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。首部が鋭角に折れ曲がっている。先端は欠損している。断面は方形。
金29	地下室370	鉄製品	釘	17.7	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端がやや曲がっている。断面は方形。
金30	地下室370	鉄製品	釘	17.5	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金31	地下室370	鉄製品	釘	17.2	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端が渦を巻くように曲がっている。断面は方形。
金32	地下室370	鉄製品	釘	17.1	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が直角に折れ曲がっている。断面は方形。
金33	地下室370	鉄製品	釘	17.2	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。全体が波打っている。断面は方形。
金34	地下室370	鉄製品	釘	17.0	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金35	地下室370	鉄製品	釘	16.4	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が曲がっている。断面は方形。
金36	地下室370	鉄製品	釘	15.8	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端が大きく曲がっている。断面は方形。

遺物 番号	遺構	種類	器種	法 量 () は残存値			遺物の 時期	特徴
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
金37	地下室370	鉄製品	釘	15.8	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が曲がっている。断面は方形。
金38	地下室370	鉄製品	釘	15.4	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。断面は方形。
金39	地下室370	鉄製品	釘	15.0	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。先端が折れ曲がっている。断面は方形。
金40	地下室370	鉄製品	釘	(15.0)	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金41	地下室370	鉄製品	釘	(15.5)	—	0.5	鎌倉	頭部と先端部を欠損している。断面は方形。
金42	地下室370	鉄製品	釘	(15.2)	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。首部が直角に折れ曲がっている。先端は欠損している。断面は方形。
金43	地下室370	鉄製品	釘	(14.7)	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端は欠損している。断面は方形。
金44	地下室370	鉄製品	釘	(14.5)	—	0.7	鎌倉	頭部を折り返している。先端は欠損している。断面は方形。
金45	地下室370	鉄製品	釘	(13.4)	—	0.8	鎌倉	頭部を折り返している。全体が弧を描くように曲がっている。先端が欠損している。断面は方形。
金46	地下室370	鉄製品	釘	(12.3)	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が弧を描くように曲がっている。先端が欠損している。断面は方形。
金47	地下室370	鉄製品	釘	13.8	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。途中から折れ、先端に向けて曲がっている。断面は方形。
金48	地下室370	鉄製品	釘	11.5	—	0.4	鎌倉	細い釘。頭部を折り返している。先端がやや曲がっている。断面は方形。
金49	地下室370	鉄製品	釘	9.0	—	0.3	鎌倉	細い釘。頭部を折り返している。先端がやや曲がっている。断面は方形。
金50	地下室370	鉄製品	釘	(11.5)	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金51	地下室370	鉄製品	釘	(11.0)	—	0.6	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金52	地下室370	鉄製品	釘	(8.8)	—	0.5	鎌倉	頭部と先端が欠損している。断面は方形。
金53	地下室370	鉄製品	釘	(8.4)	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金54	地下室370	鉄製品	釘	(8.0)	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金55	地下室370	鉄製品	釘	(6.8)	—	0.5	鎌倉	頭部を折り返している。先端が欠損している。断面は方形。
金56	地下室370	鉄製品	釘	(6.5)	—	0.4	鎌倉	頭部と先端が欠損している。断面は方形。
金57	地下室370	鉄製品	釘	3.4	—	0.3	鎌倉	細い釘。頭部を折り返している。断面は方形。
金58	地下室370	鉄製品	釘	(2.8)	—	0.2	鎌倉	細い釘。頭部は欠損している。断面は方形。
金59	地下室370	鉄製品	釘	4.5	—	0.5	鎌倉	細い釘。頭部を折り返している。途中で直角に折れ曲がる。断面は方形。
金60	井戸304	銅製品	銭	銭径 2.4	銭厚 0.08	全体厚 1.2cm	平安	繙銭の一部。8枚が重なって付着している。表面で確認できる銭種は軋重元寶のみである。北宋銭。
金61	地下室370	銅製品	銭	銭径 2.3	—	銭厚 0.07	平安～ 鎌倉	皇宋通寶 (北宋銭)
金62	地下室370	銅製品	銭	銭径 2.4	—	銭厚 0.08	平安～ 鎌倉	皇宋通寶 (北宋銭)

図 版



間之町通

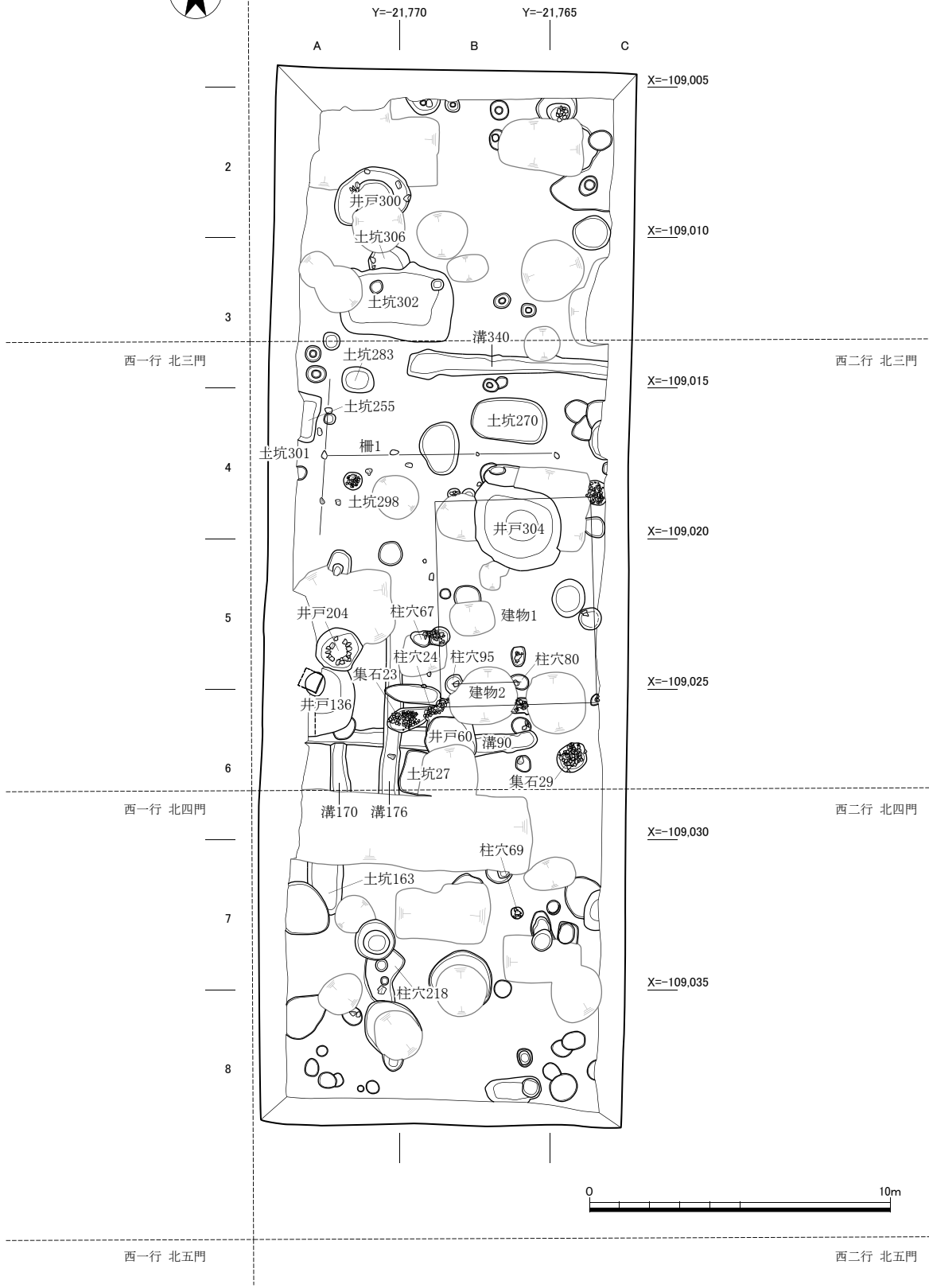
第1面 江戸時代の遺構 (1 : 200)

左京二条四坊二町 西一行 北一門

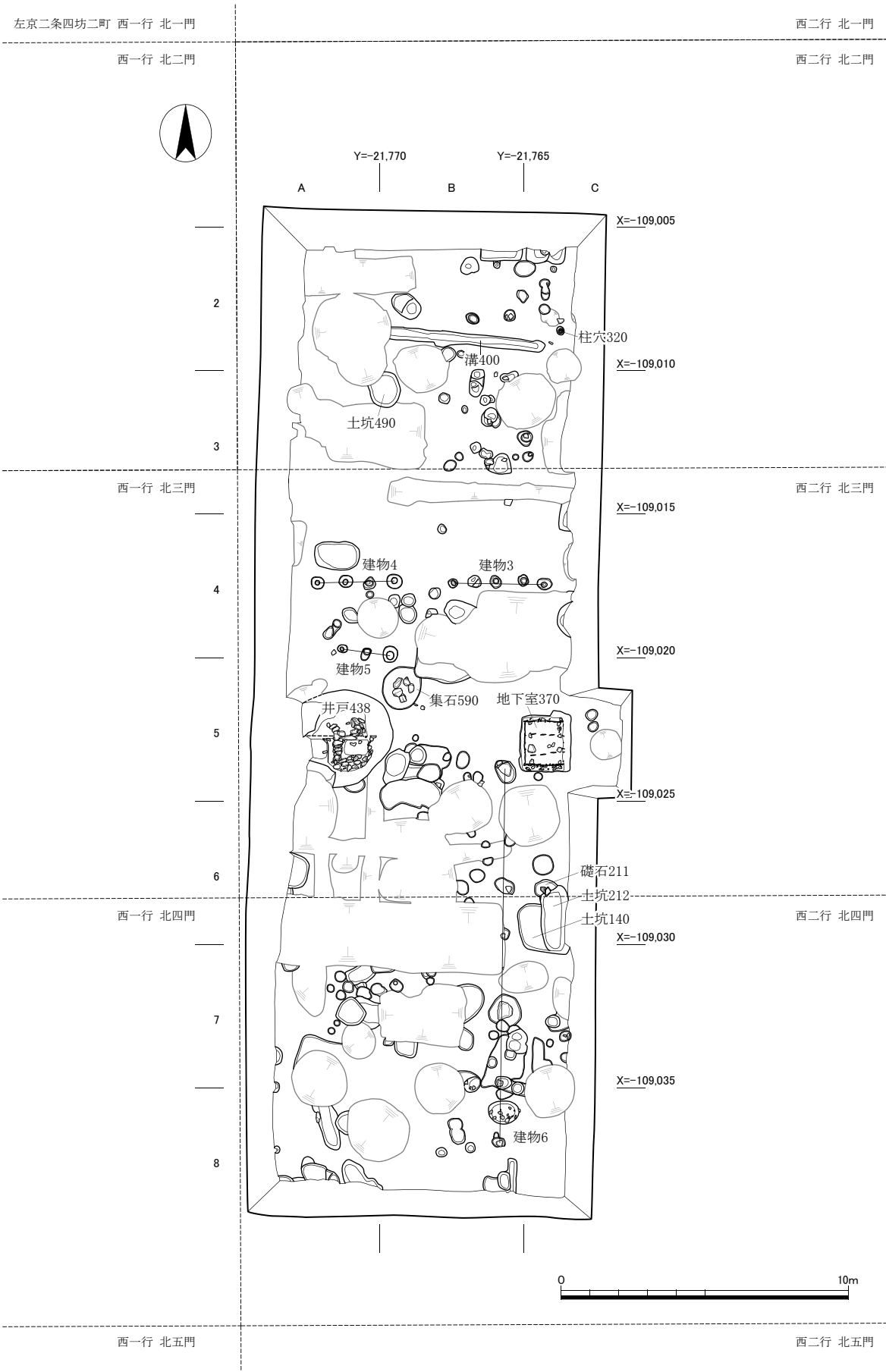
西二行 北一門

西一行 北二門

西二行 北二門



第2面 室町時代の遺構 (1 : 200)



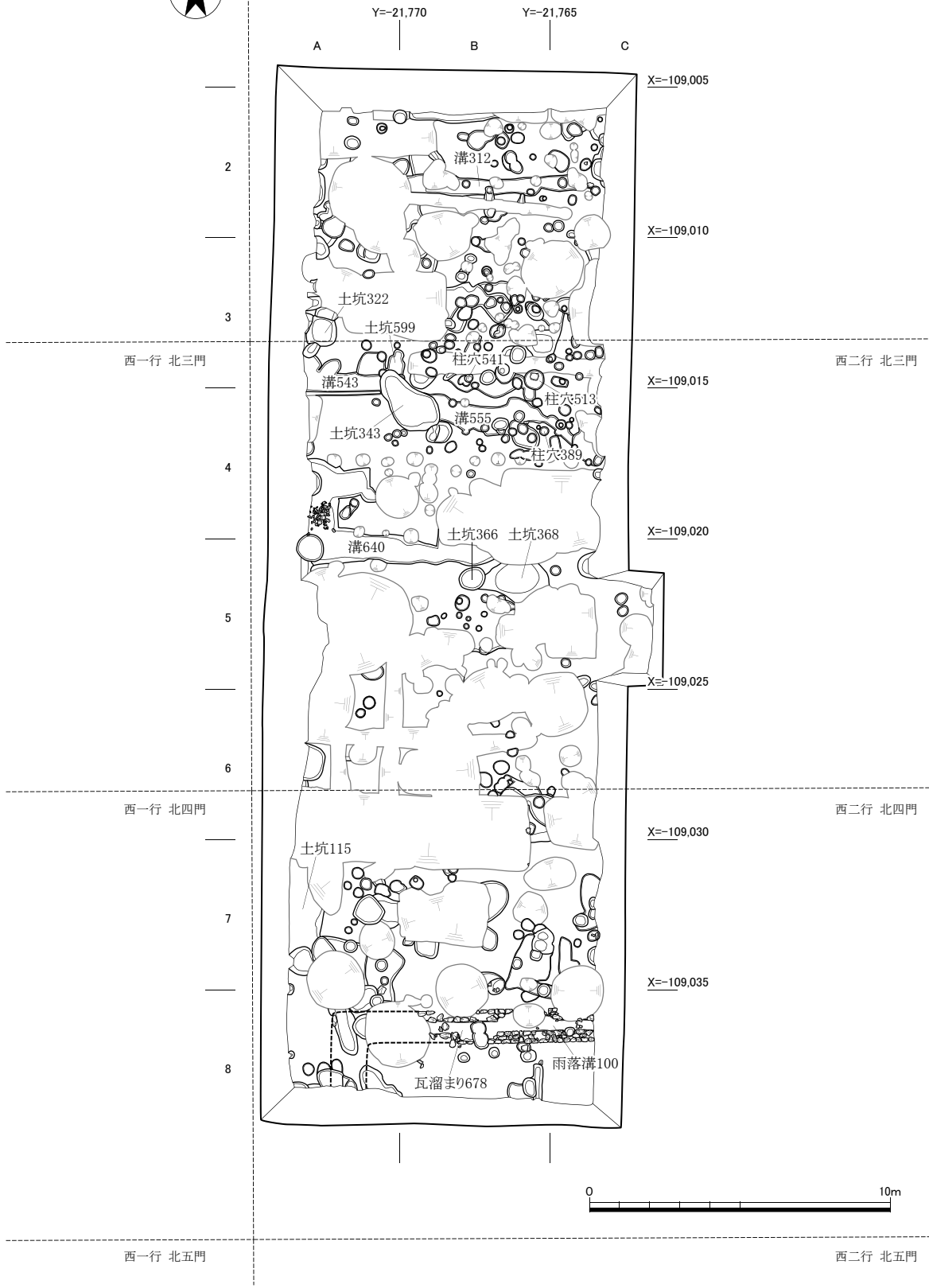
第3面 1期 鎌倉時代の遺構 (1 : 200)

左京二条四坊二町 西一行 北一門

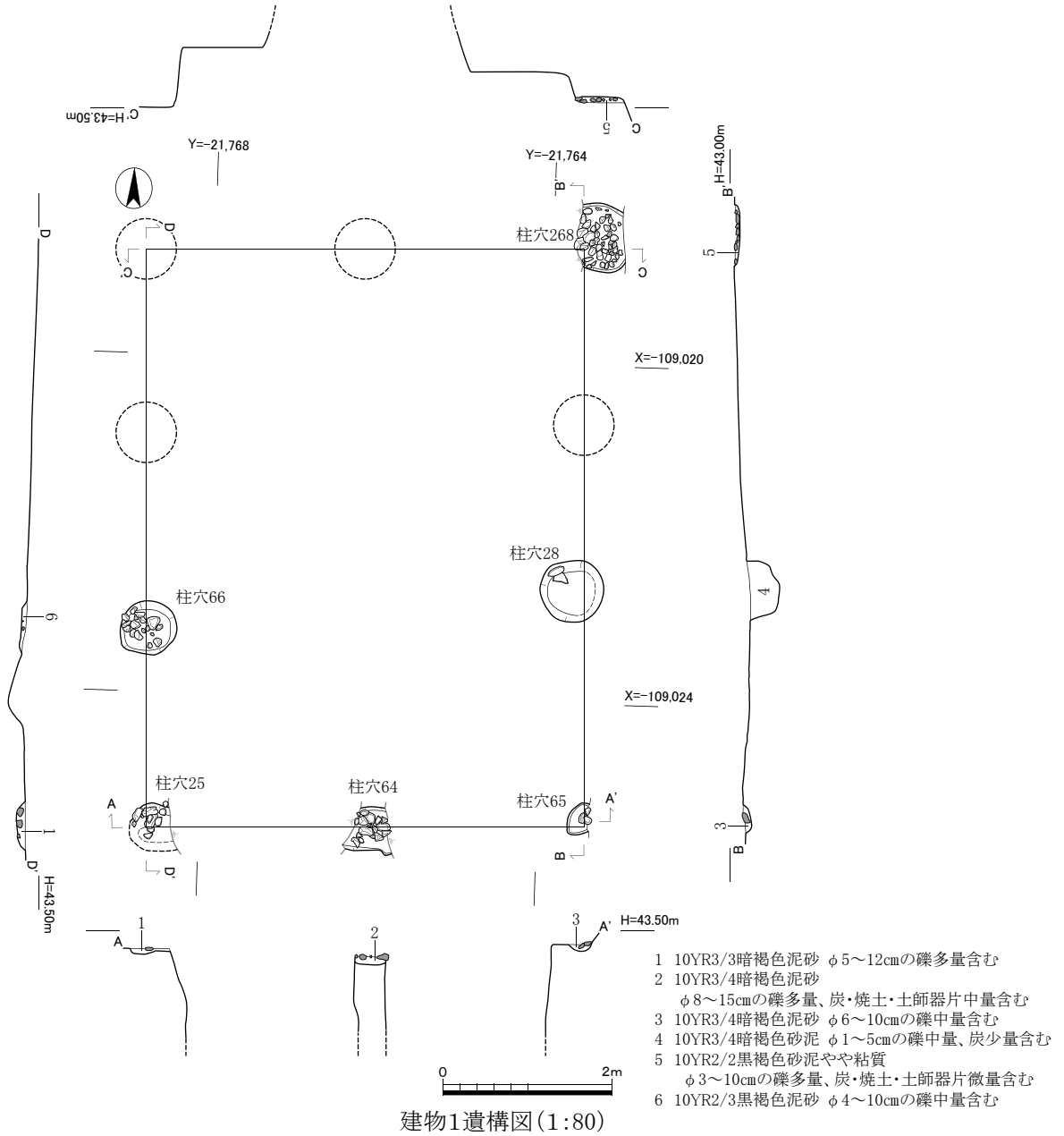
西二行 北一門

西一行 北二門

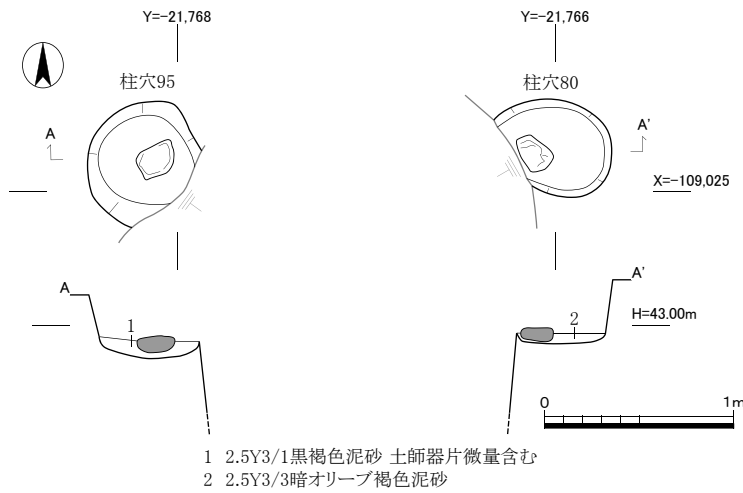
西二行 北二門



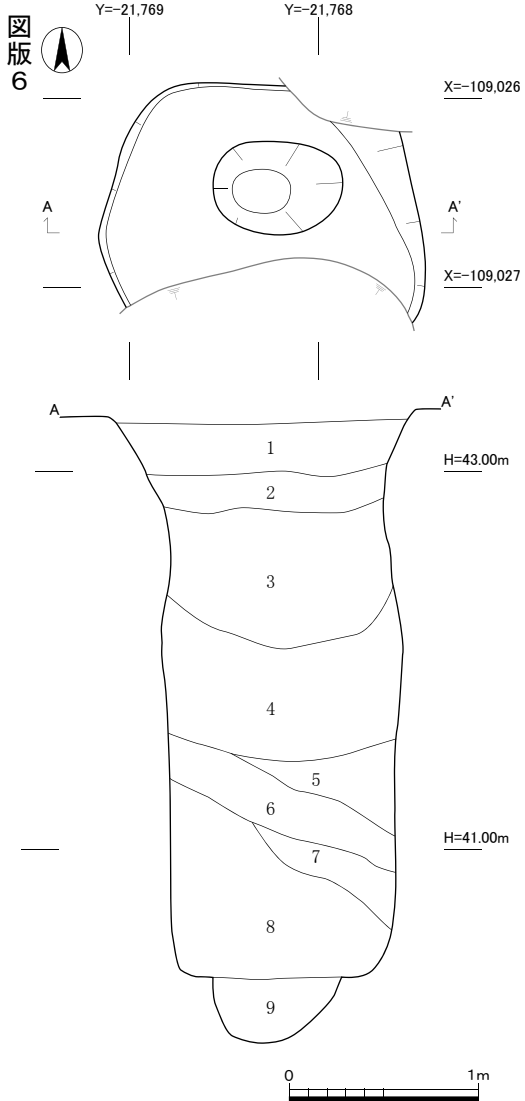
第3面 2期 平安時代の遺構 (1 : 200)



建物1遺構図(1:80)

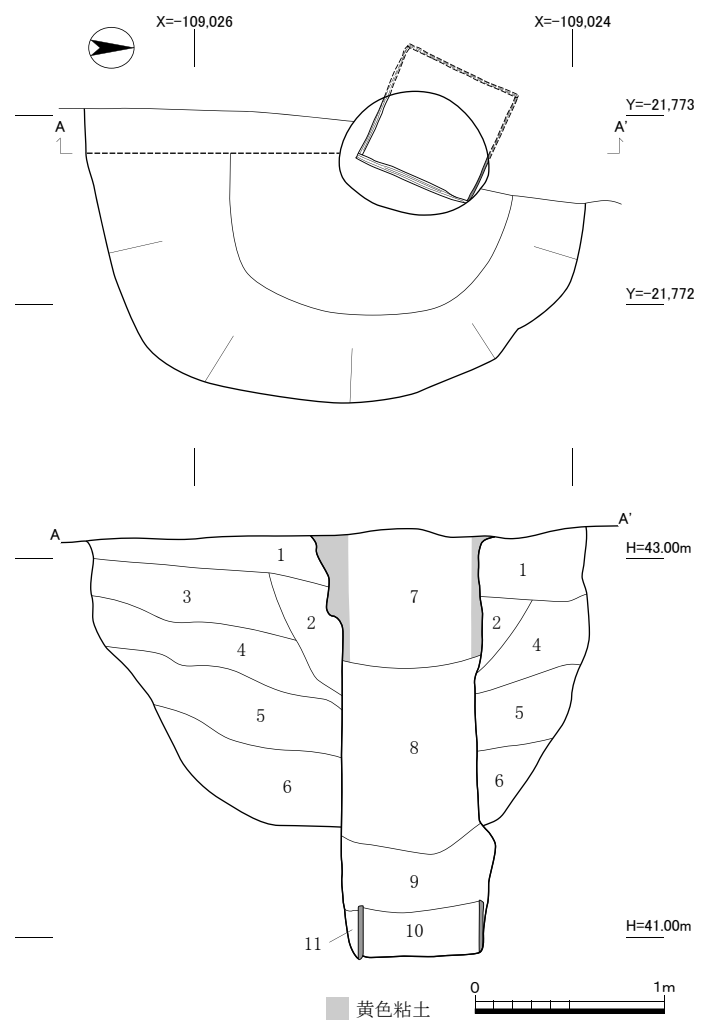


建物2遺構図(1:40)



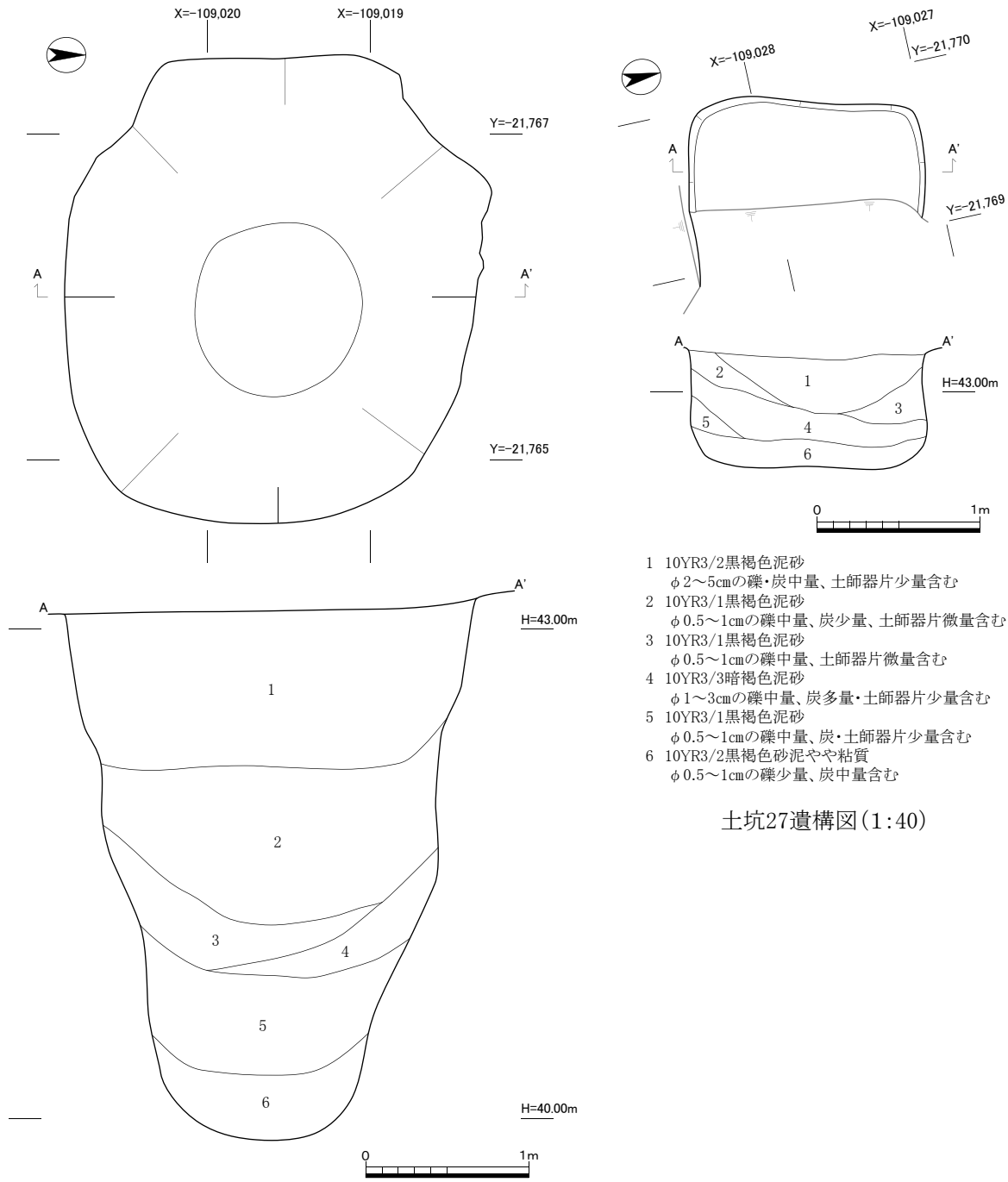
- 1 10YR3/2黒褐色泥砂
φ5~12cmの礫少量、炭微量、土師器片少量含む
- 2 10YR3/1黒褐色泥砂
φ1~2cmの礫微量、土師器片少量含む
- 3 10YR4/3こぶい黄褐色
φ2~5cmの礫・土師器片少量含む
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂
φ1~15cmの礫多量、土師器片少量含む
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂
φ1~15cmの礫多量、炭・土師器片微量含む
- 6 10YR3/2黒褐色泥砂
φ1~5cmの礫多量、土師器片微量含む
- 7 10YR3/2黒褐色泥砂
φ1~5cmの礫少量、炭・土師器片微量、木片含む
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 灰色シルトブロック多く含む
φ1~3cmの礫少量含む
- 9 10YR4/1褐灰色泥砂 φ5~10cmの礫中量含む

井戸60遺構図(1:40)



- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 φ4~10cmの礫中量、炭少量含む
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 φ3~8cmの礫中量含む
- 3 2.5Y3/1黒褐色砂泥
- 4 10YR3/1黒褐色砂泥 炭少量含む
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 6 2.5Y2/1黒色シルト
- 7 10YR3/2黒褐色泥砂 φ1~3cmの礫多く含む
層の境界で黄色粘土を貼り付ける
- 8 10YR3/1黒褐色泥砂 φ1~3cmの礫少量含む
- 9 10YR2/1黒色砂泥 φ1~5cmの礫少量含む
- 10 10YR2/1黒色シルト質土 しまり弱い
- 11 10YR3/2黒褐色泥砂 φ5~10cmの礫多く含む

井戸136遺構図(1:40)

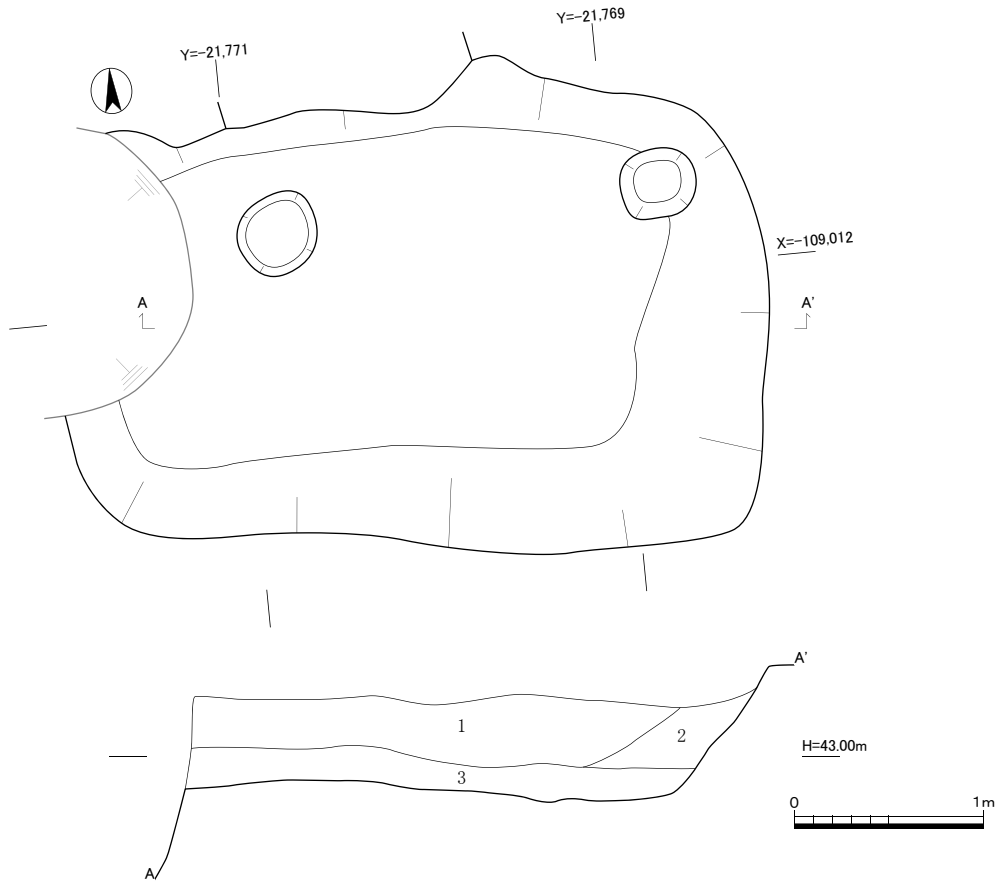


- 1 10YR3/2黒褐色泥砂
φ 2~5cmの礫・炭中量、土師器片少量含む
- 2 10YR3/1黒褐色泥砂
φ 0.5~1cmの礫中量、炭少量、土師器片微量含む
- 3 10YR3/1黒褐色泥砂
φ 0.5~1cmの礫中量、土師器片微量含む
- 4 10YR3/3暗褐色泥砂
φ 1~3cmの礫中量、炭多量・土師器片少量含む
- 5 10YR3/1黒褐色泥砂
φ 0.5~1cmの礫中量、炭・土師器片少量含む
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥やや粘質
φ 0.5~1cmの礫少量、炭中量含む

土坑27遺構図(1:40)

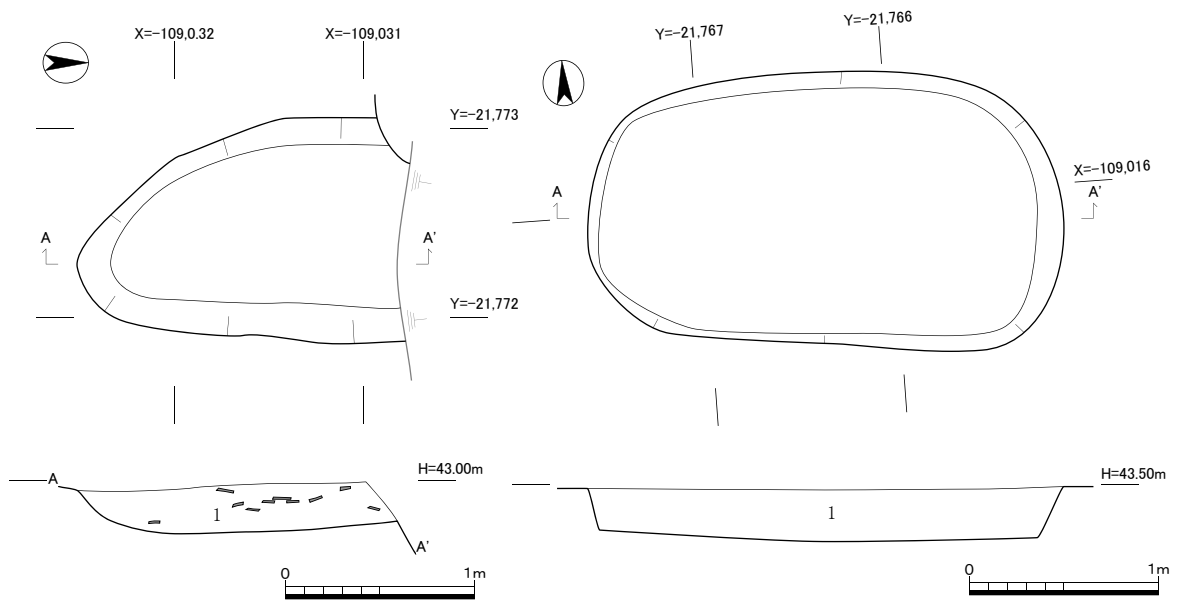
- 1 2.5Y4/1黄灰色泥砂 土師器片多量含む
- 2 2.5Y3/1黒褐色泥砂
- 3 2.5Y3/2黒褐色泥砂
- 4 2.5Y4/1黄灰色泥砂
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥 φ 10~20cmの礫多量含む
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色細砂

井戸304遺構図(1:40)



- 1 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 φ1~10cmの礫多量 炭少量、焼土中量、土師器片多量含む
- 2 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 3 10YR2/1黒色砂泥 φ1~3cmの礫・炭・焼土・土師器片少量含む

土坑302遺構図(1:40)

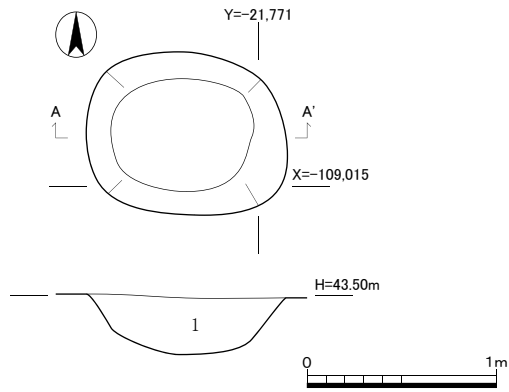


- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂 土師器片多量含む

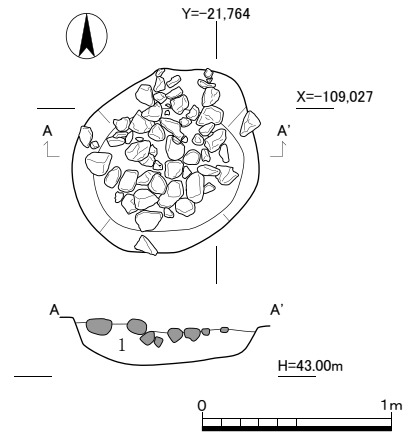
土坑163遺構図(1:40)

- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂

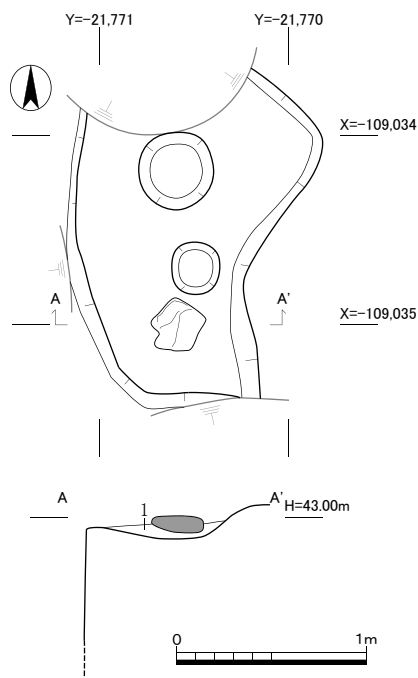
土坑270遺構図(1:40)



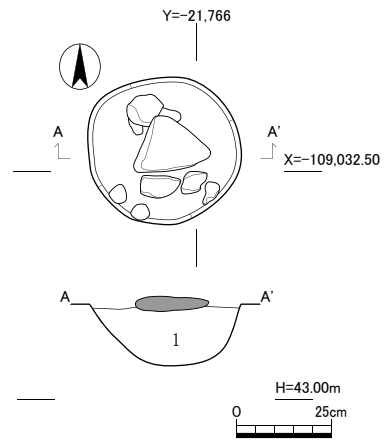
1 2.5Y4/1黄灰色泥砂
土坑283遺構図(1:40)



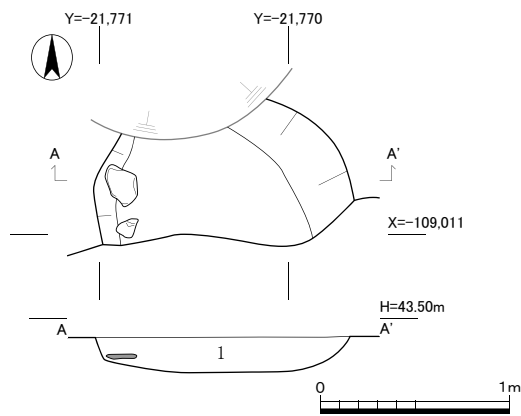
1 10YR2/2黒褐色砂泥
φ6~12cmの礫多量、炭・焼土・土師器片微量含む
集石29遺構図(1:40)



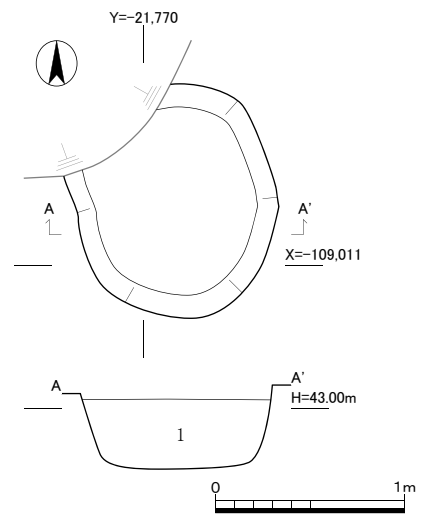
1 10YR3/1黒褐色泥砂 炭・土師器片微量含む
柱穴218遺構図(1:40)



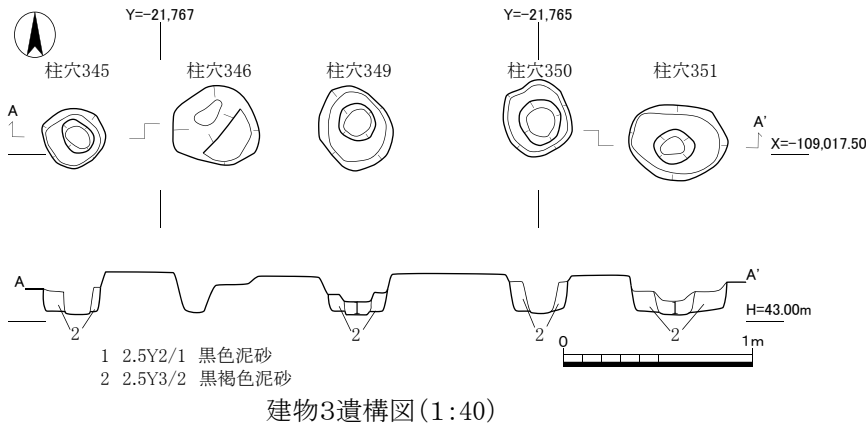
1 10YR3/4暗褐色砂泥
柱穴69遺構図(1:20)



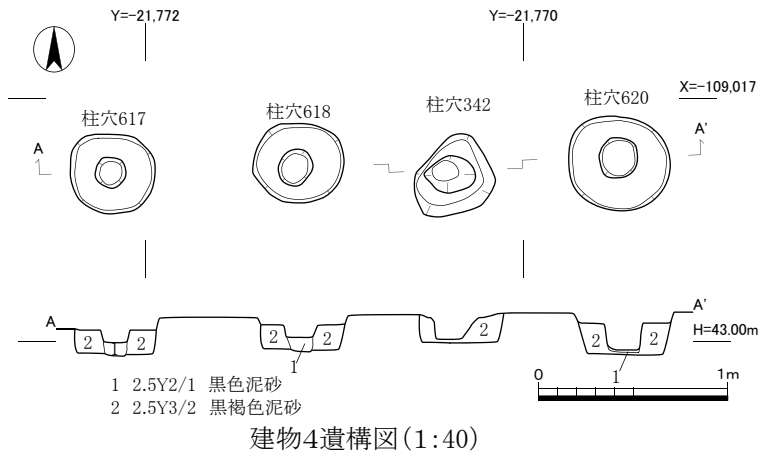
1 2.5Y3/1黒褐色砂泥
土坑306遺構図(1:40)



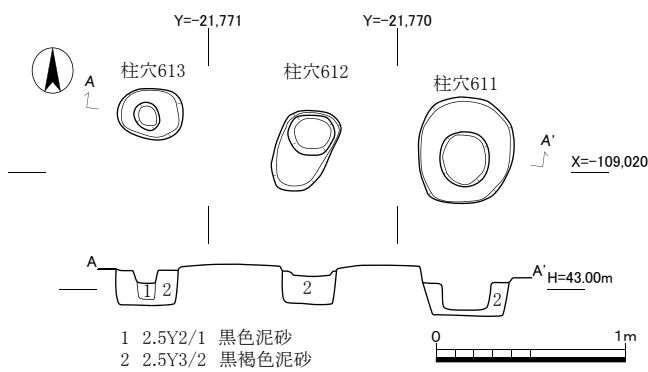
1 2.5Y2/1黒色砂泥 炭微量、土師器片多量含む
土坑490遺構図(1:40)



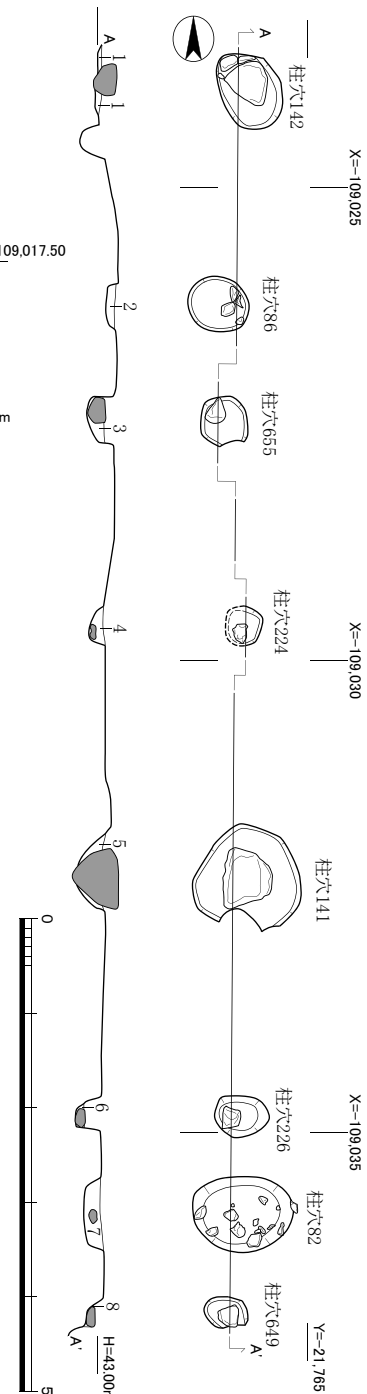
建物3遺構図(1:40)



建物4遺構図(1:40)

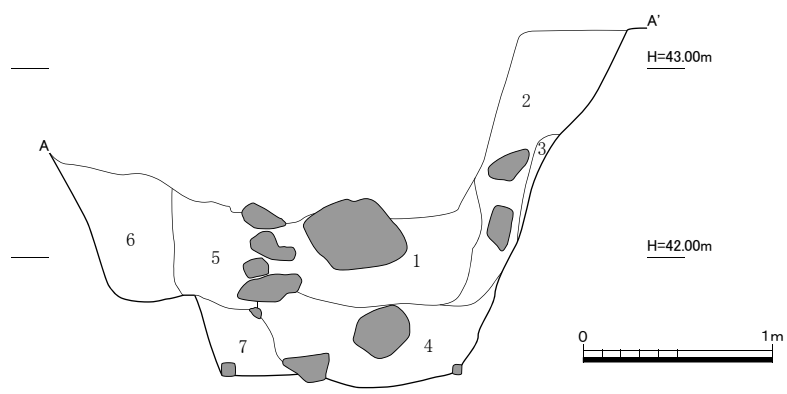
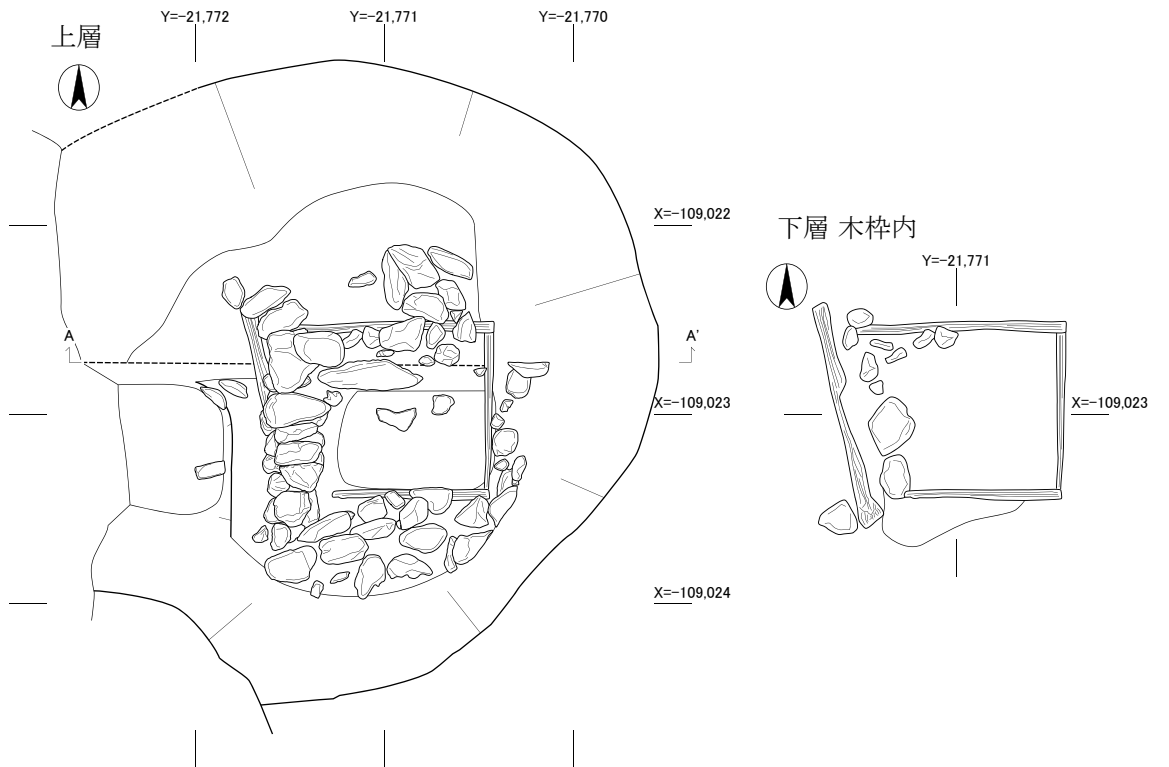


建物5遺構図(1:40)



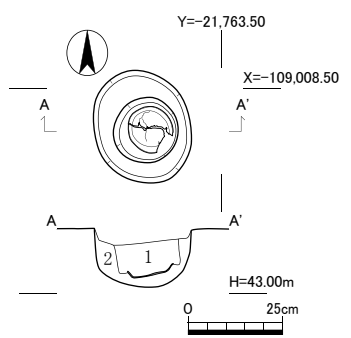
- 1 2.5Y3/1黒褐色泥土 炭微量含む
- 2 2.5Y3/2黒褐色泥砂
φ5~10cmの礫・土師器片微量含む
- 3 2.5Y2/1黒色砂泥
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
φ3~20cmの礫少量含む
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 炭微量含む
- 6 2.5Y3/2黒褐色砂泥
φ3~8cmの礫少量、炭・土師器片微量含む
- 7 10YR3/2黒褐色泥砂
φ5~10cmの礫中量、土師器片微量含む
- 8 2.5Y2/1黒色砂泥

建物6遺構図(1:80)



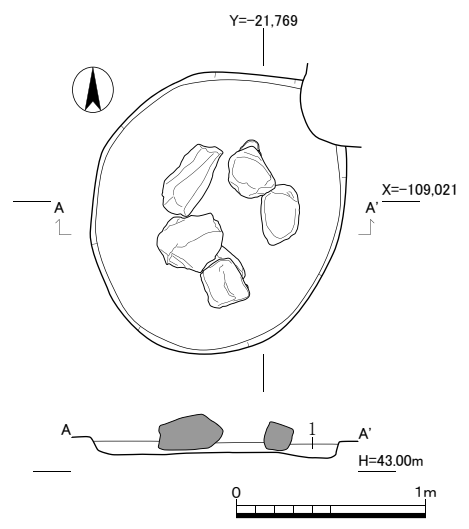
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ10~20cmの礫多量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 3 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質 φ12~20cmの礫少量含む
- 5 10YR4/4褐色砂泥 φ5~10cmの礫少量含む
- 6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
- 7 10YR5/6黄褐色砂泥

井戸438遺構図(1:40)



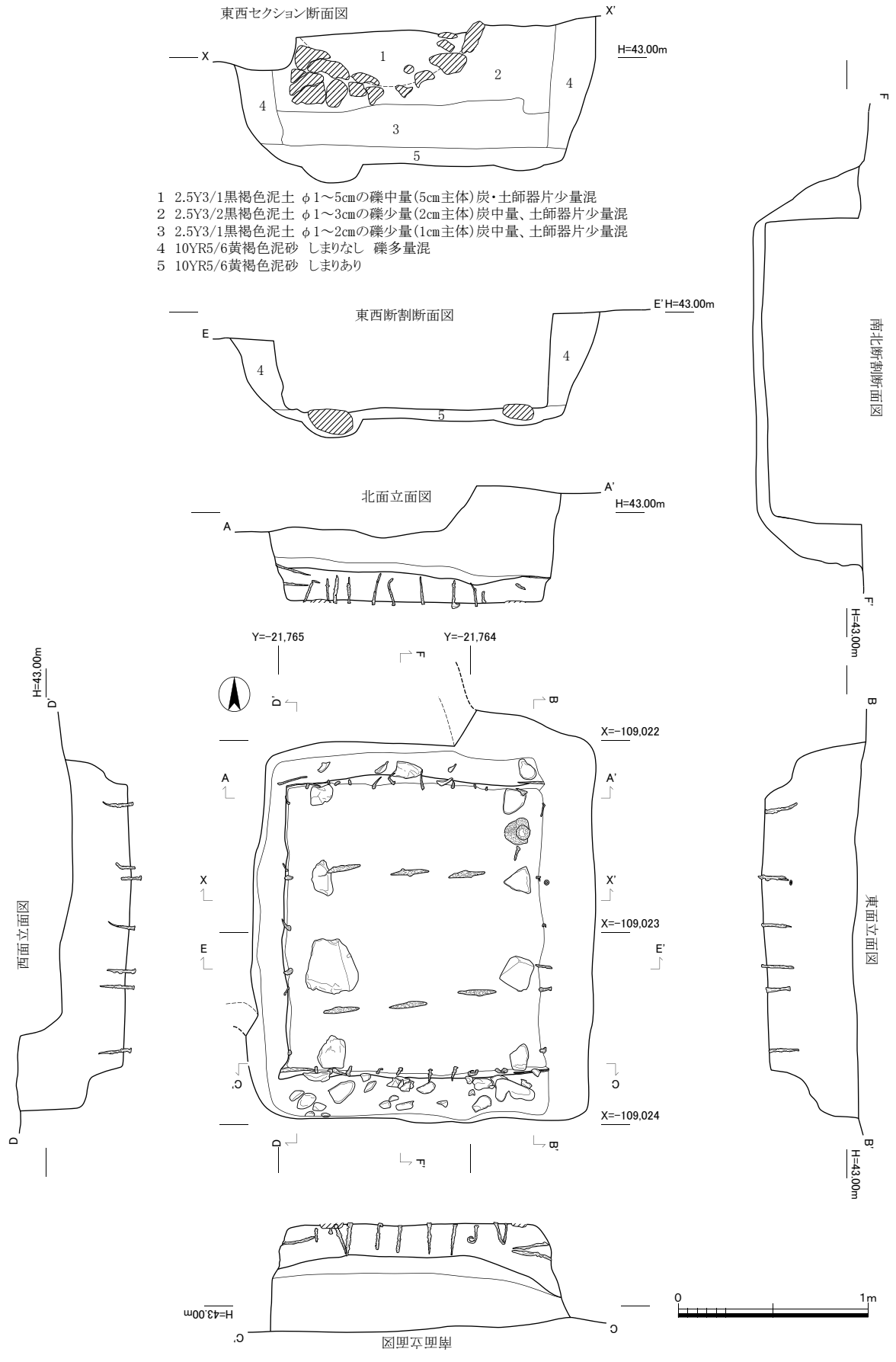
- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂
- 2 2.5Y2/1黒色泥砂 土師器片微量

柱穴320遺構図(1:20)



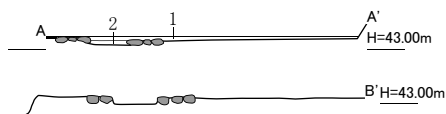
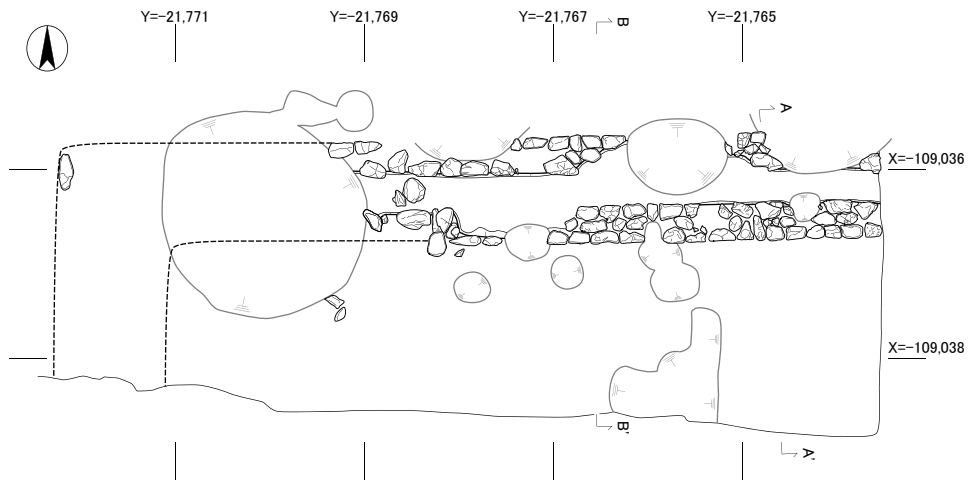
- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ8~15cmの礫中量含む

集石590遺構図(1:40)



地下室370遺構図1(1:30)

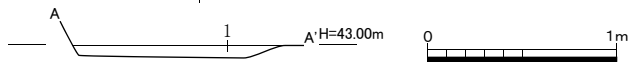
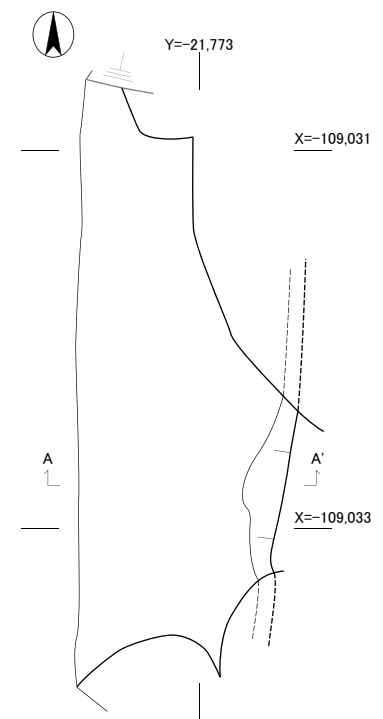
第3面 1期 個別遺構図3(1:30)



- 1 10YR2/1黒色シルト 炭多量含む
- 2 10YR3/3暗褐色泥砂

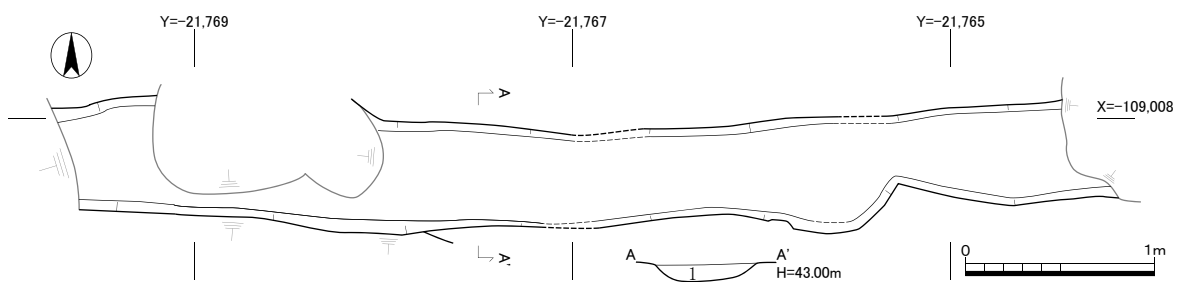


雨落ち溝100遺構図(1:80)



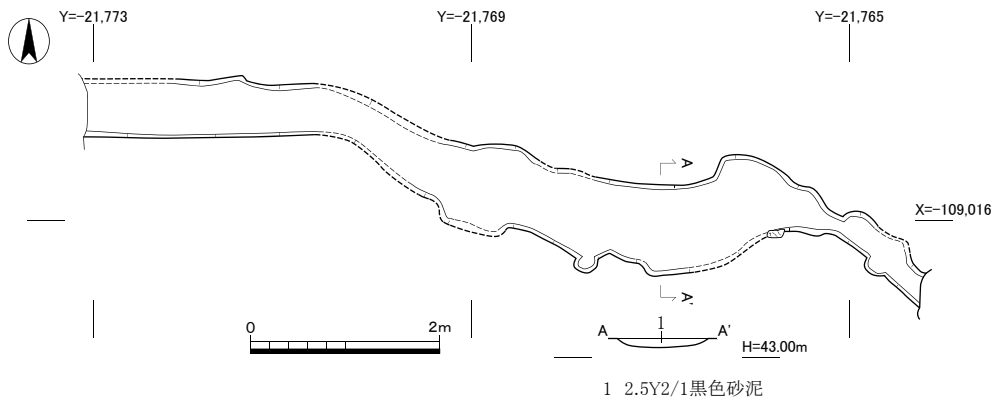
- 1 2.5Y3/2黒褐色泥砂 土師器片微量含む

土坑115遺構図(1:40)

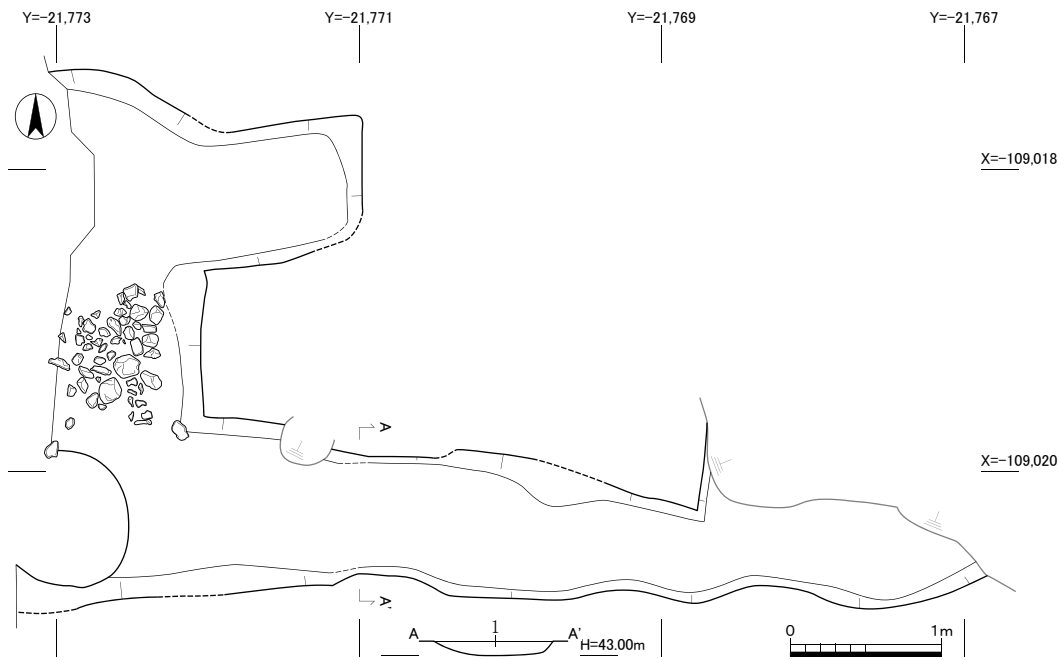


- 1 2.5Y5/1黄灰色砂泥

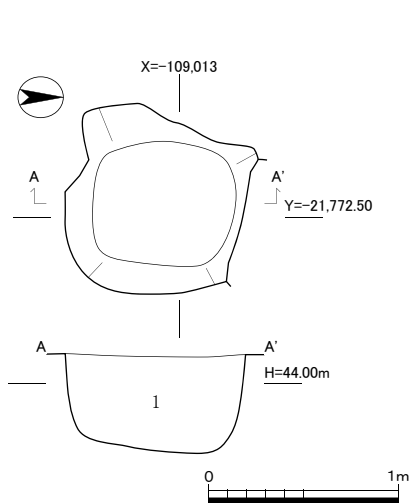
溝312遺構図(1:40)



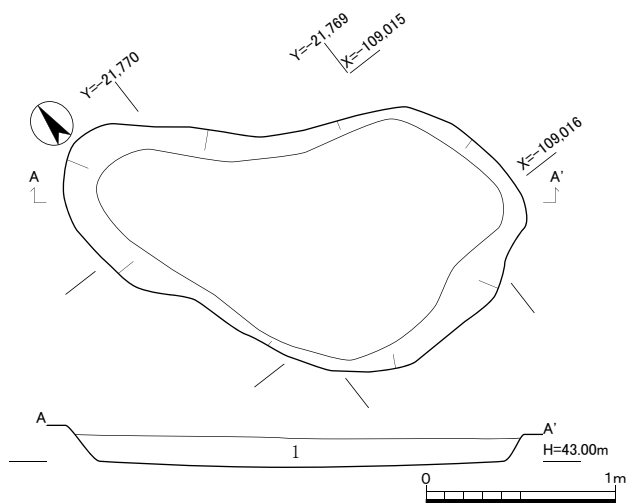
1 2.5Y2/1黒色砂泥
溝555遺構図(1:80)



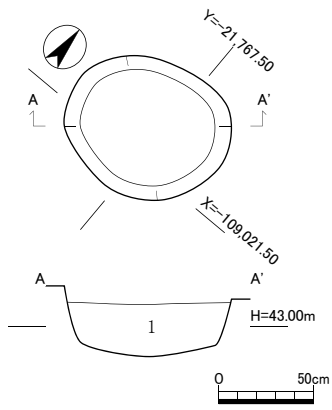
1 2.5Y2/1黒色砂泥
溝640遺構図(1:50)



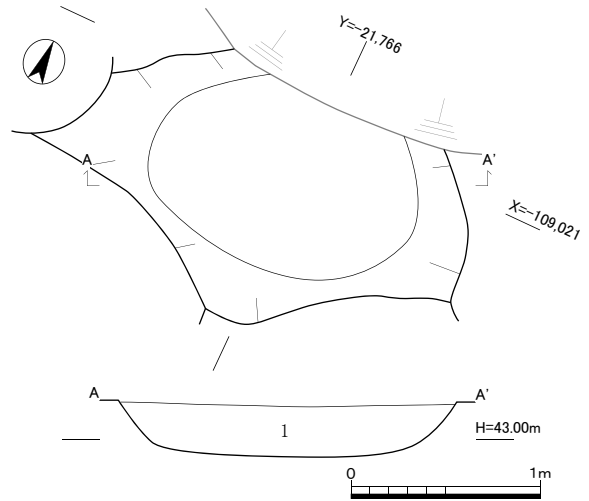
1 2.5Y4/1黄灰色泥土
土坑322遺構図(1:40)



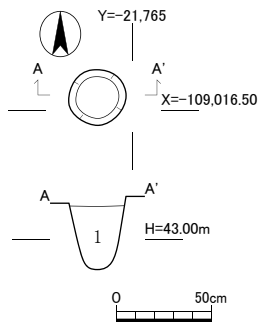
1 2.5Y4/1黄灰色泥砂 φ1~3cmの礫少量 炭・土師器片微量含む
土坑343遺構図(1:40)



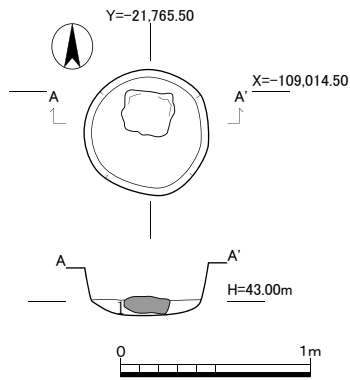
1 2.5Y2/1黒色粘土質シルト
φ1~5cmの礫中量、土師器片微量含む
土坑366遺構図(1:40)



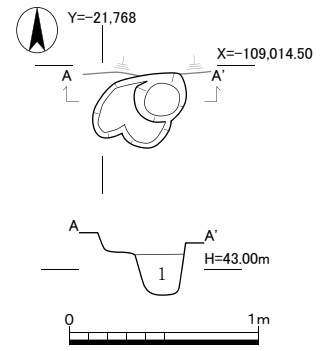
1 2.5Y2/1黒色粘土質シルト
φ1~10cmの礫中量、炭少量、土師器片微量含む
土坑368遺構図(1:40)



1 2.5Y2/1黒色砂泥
柱穴389遺構図(1:40)



1 2.5Y2/1黒色砂泥
柱穴513遺構図(1:40)

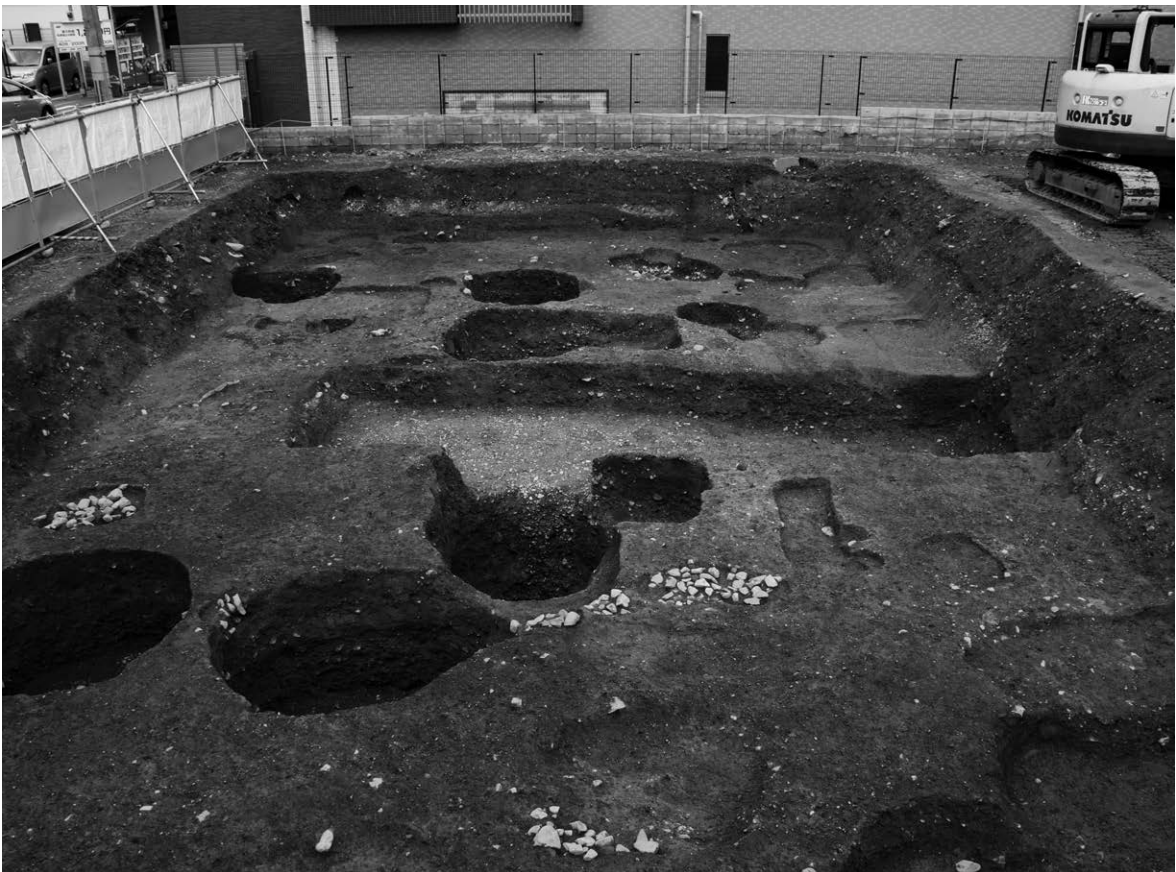


1 2.5Y2/1黒色砂泥
柱穴541遺構図(1:40)

第3面 2期 個別遺構図3 (1:40)



1 調査区南半第1面 (北から)



2 調査区南半第2面 (北から)



1 井戸 136 (東から)



2 井戸 60 (東から)



3 井戸 136 井戸枠部 (東から)



1 調査区北半第1面（南から）



2 調査区北半第2面（南から）



1 土坑 302 (南西から)



2 井戸 304 (東から)



3 井戸 438 (南から)



1 調査区全景第3面（北から）



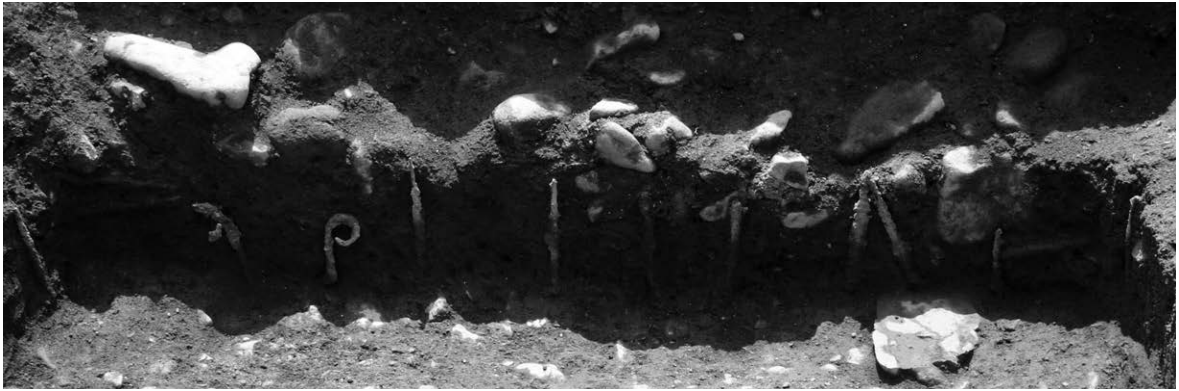
1 地下室 370 (北西から)



1 地下室 370 (北から)



2 地下室 370 (北から)



1 地下室 370 南壁釘出土状況（北から）



2 地下室 370 西壁釘出土状況（東から）



3 地下室 370 北壁釘出土状況（南から）



4 地下室 370 東壁釘出土状況（西から）



1 雨落ち溝 100 (北西から)



2 雨落ち溝 100 (北西から)



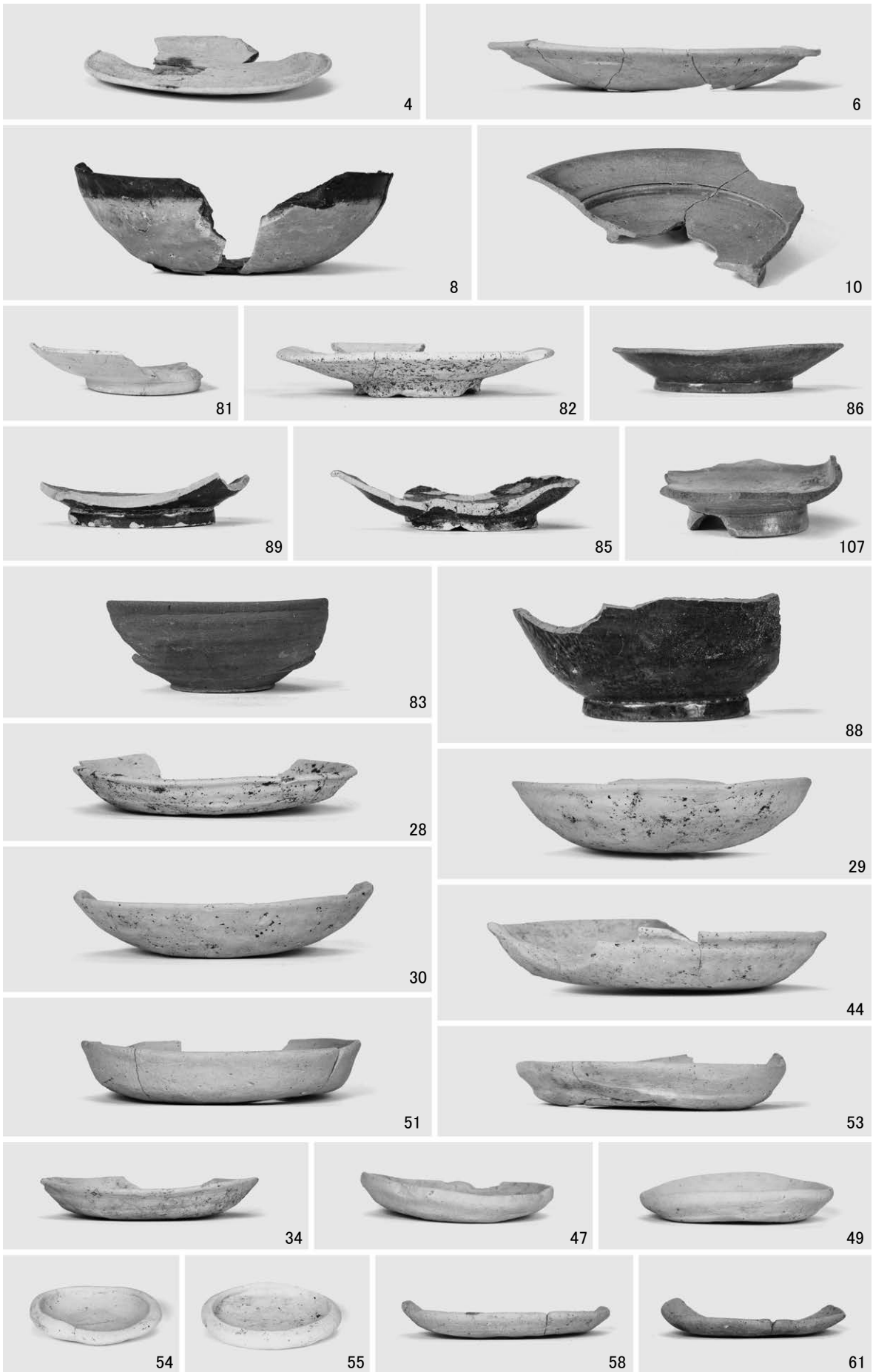
3 雨落ち溝 100 (東から)



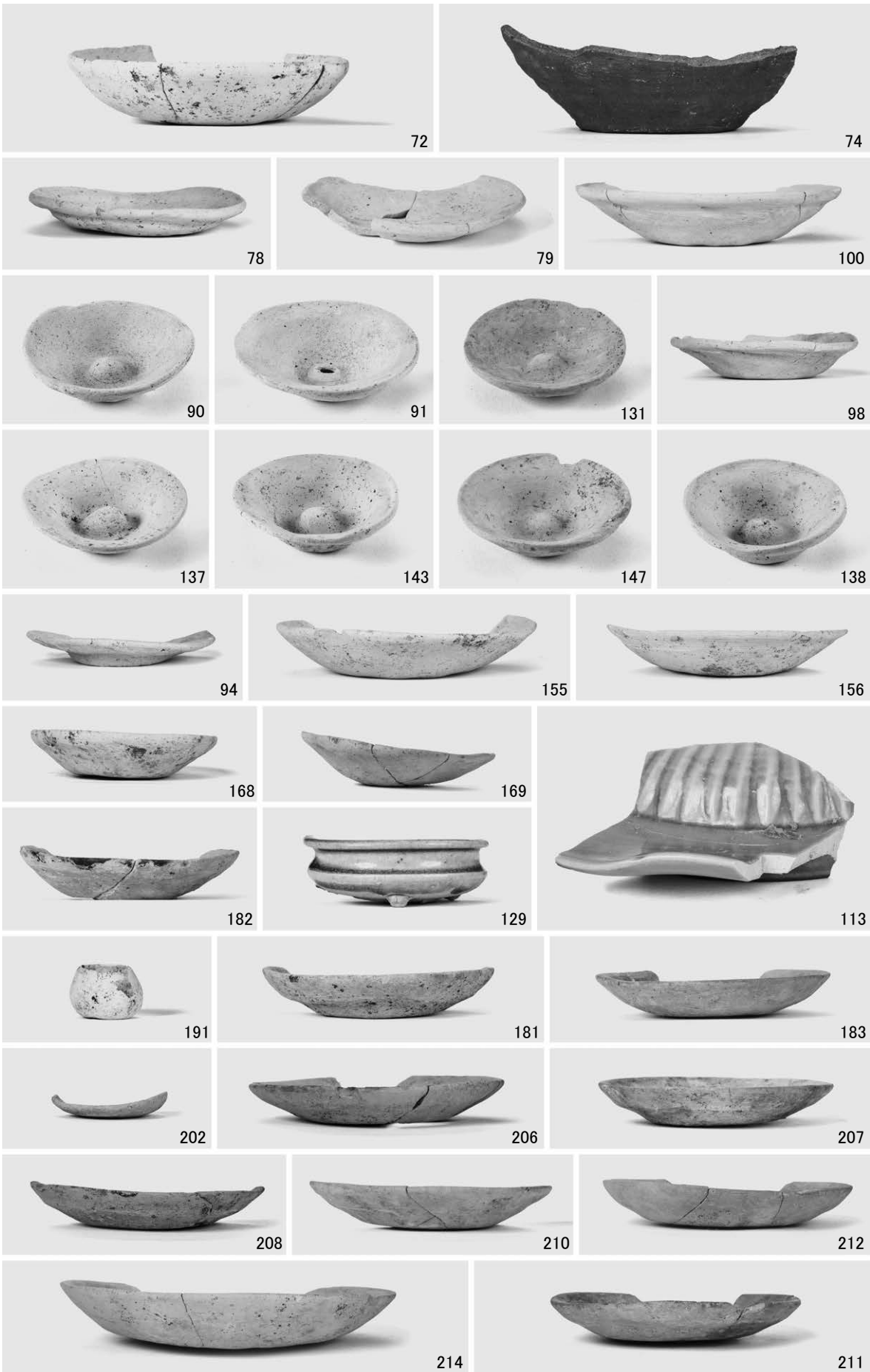
1 柱穴 142 (西から)



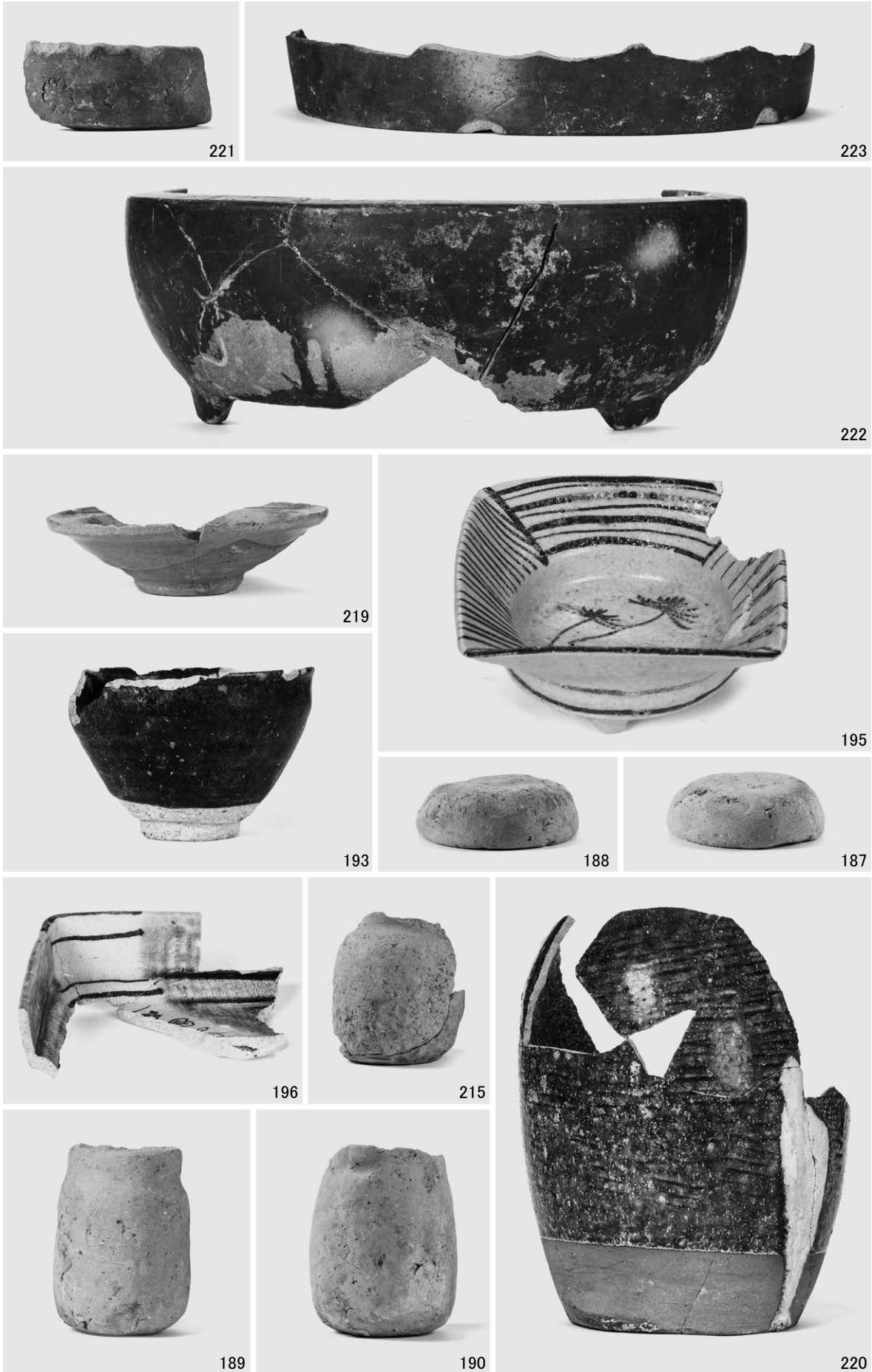
2 柱穴 141 (北から)



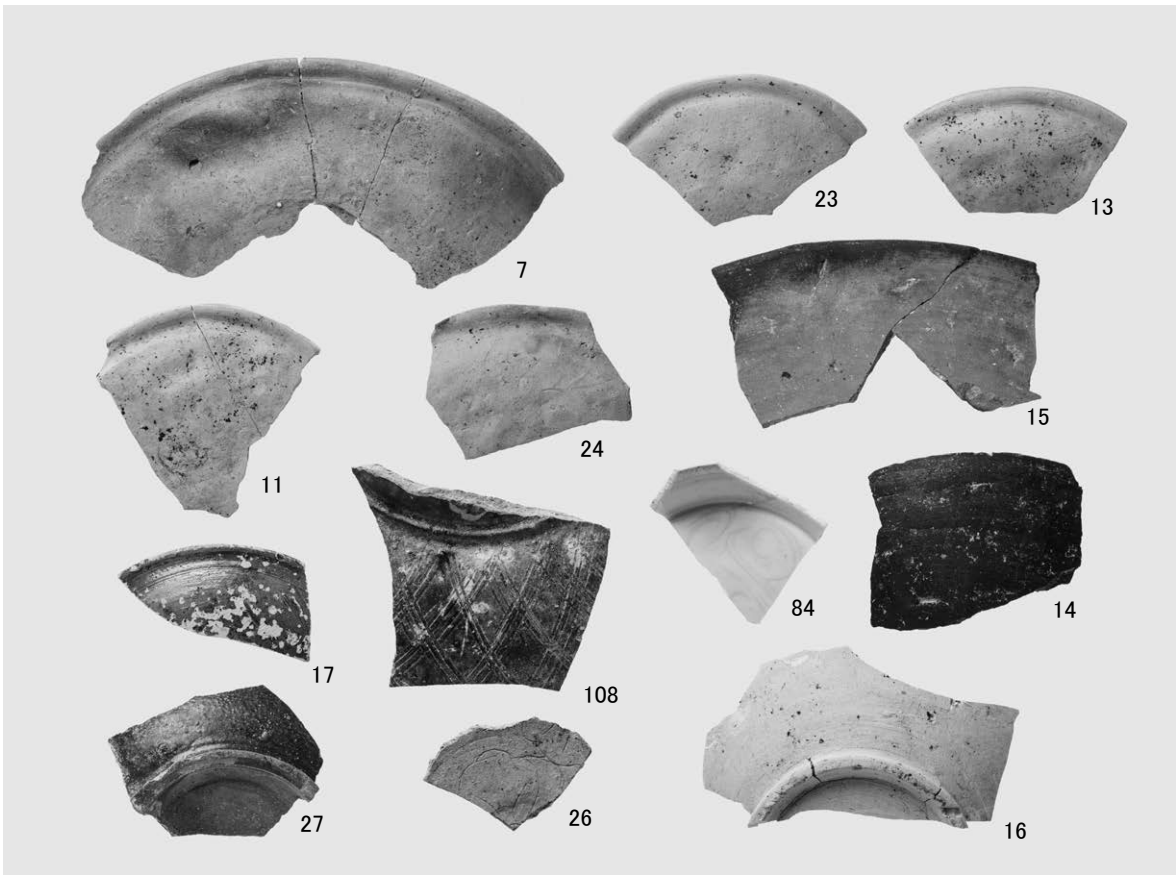
出土遺物 1



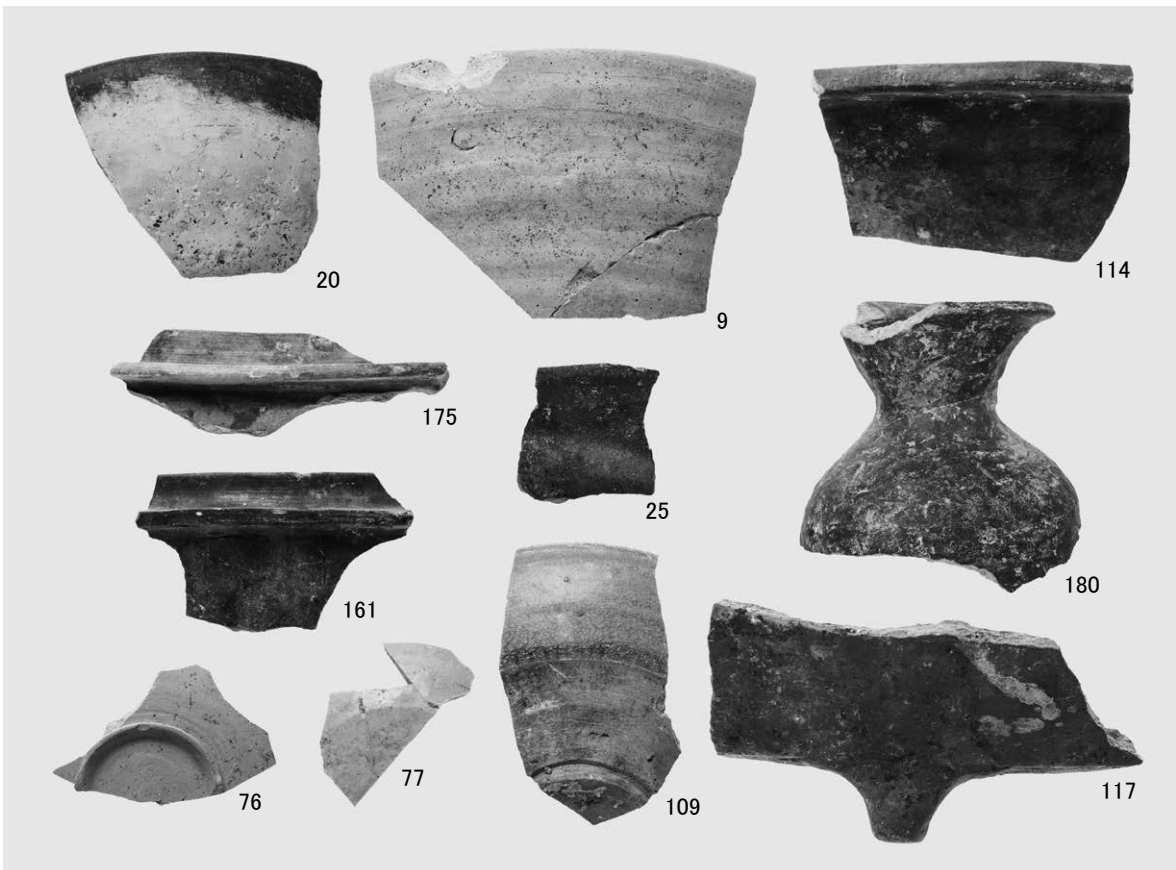
出土遺物 2



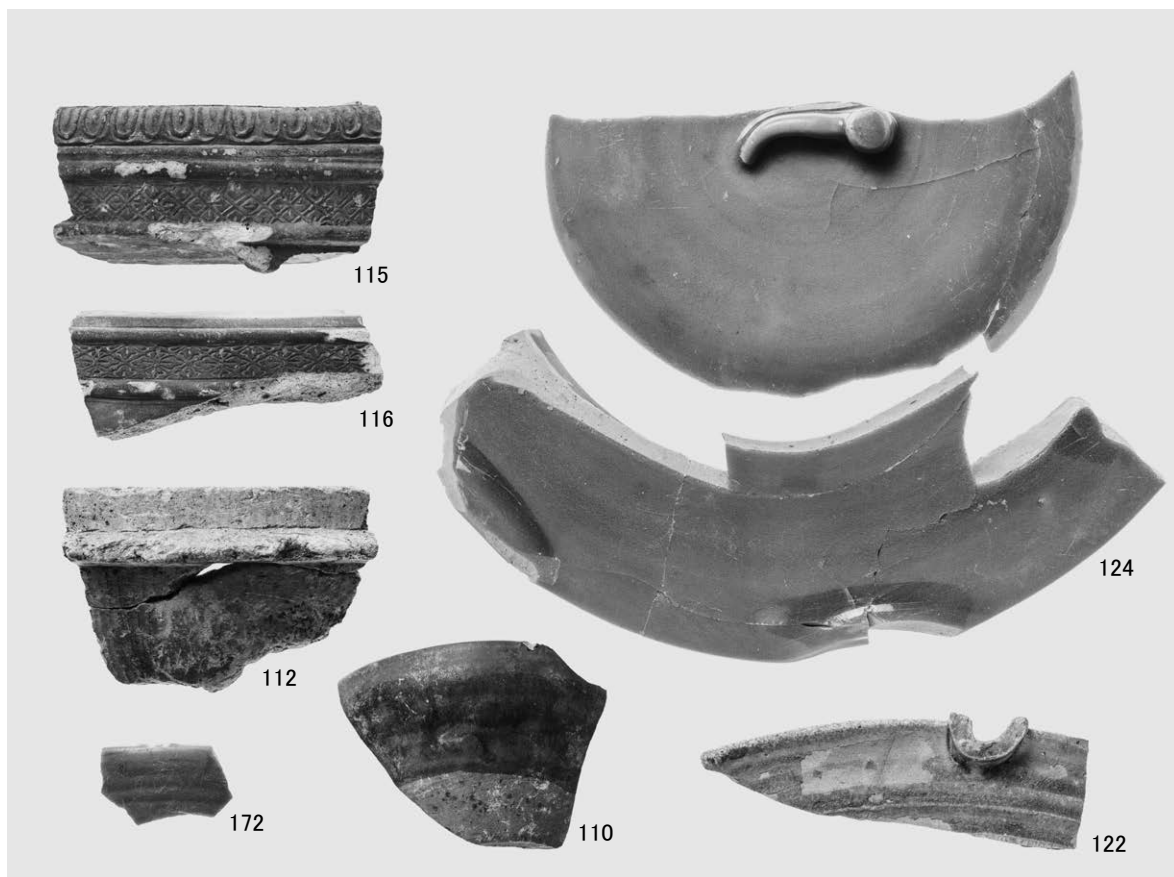
出土遺物 3



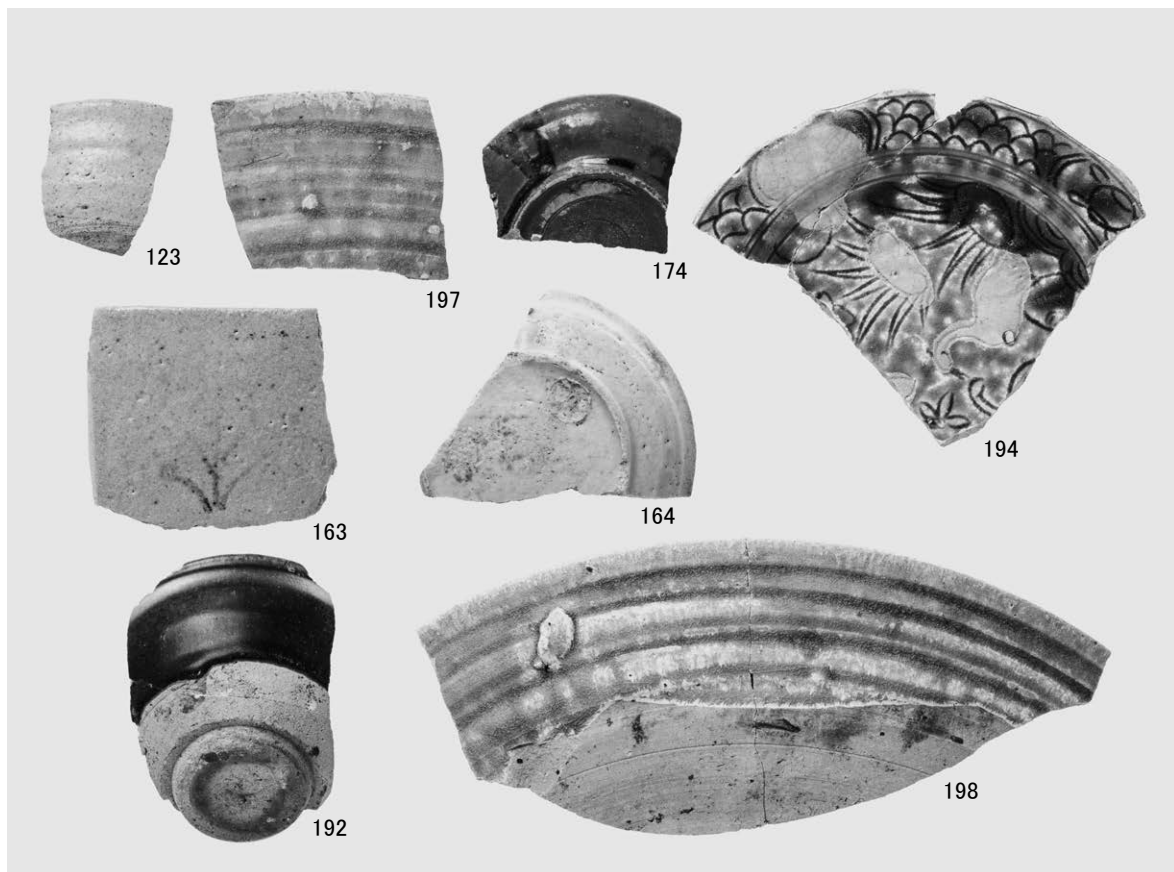
出土遺物 4



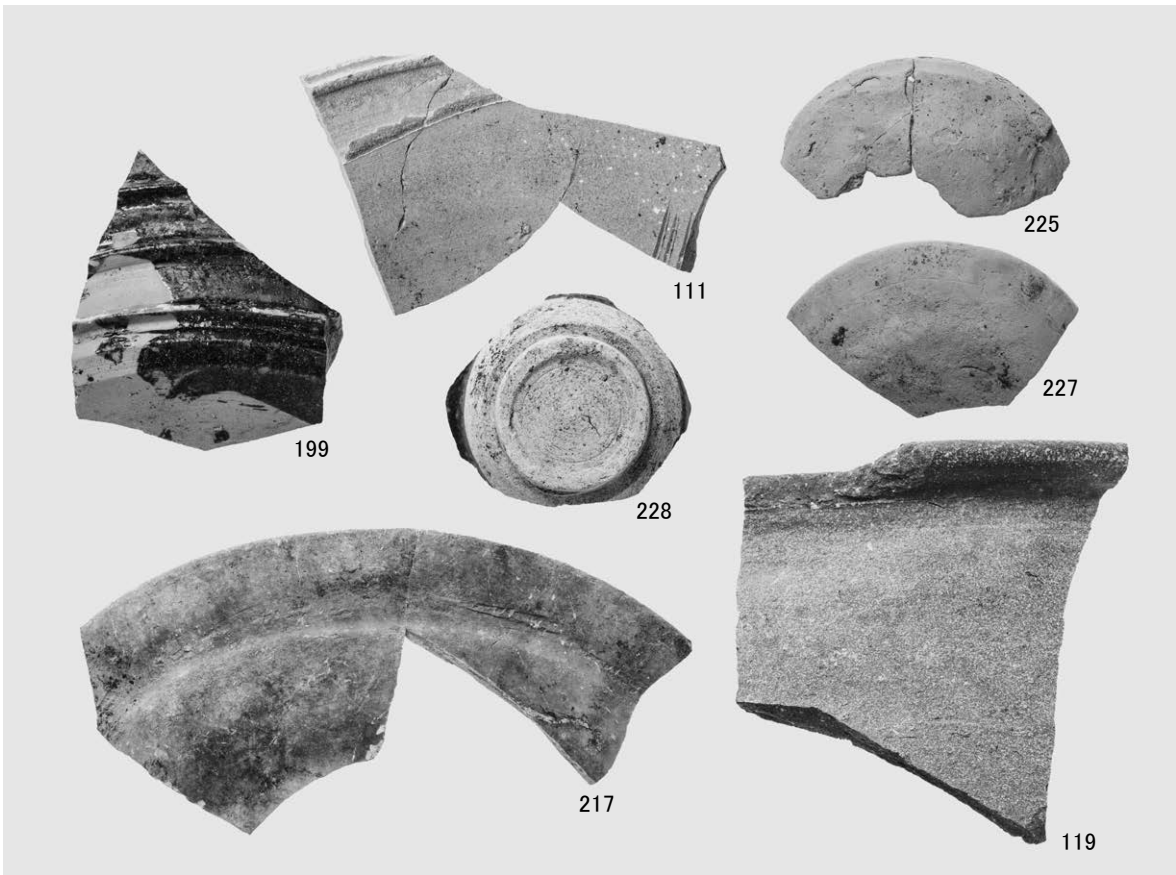
出土遺物 5



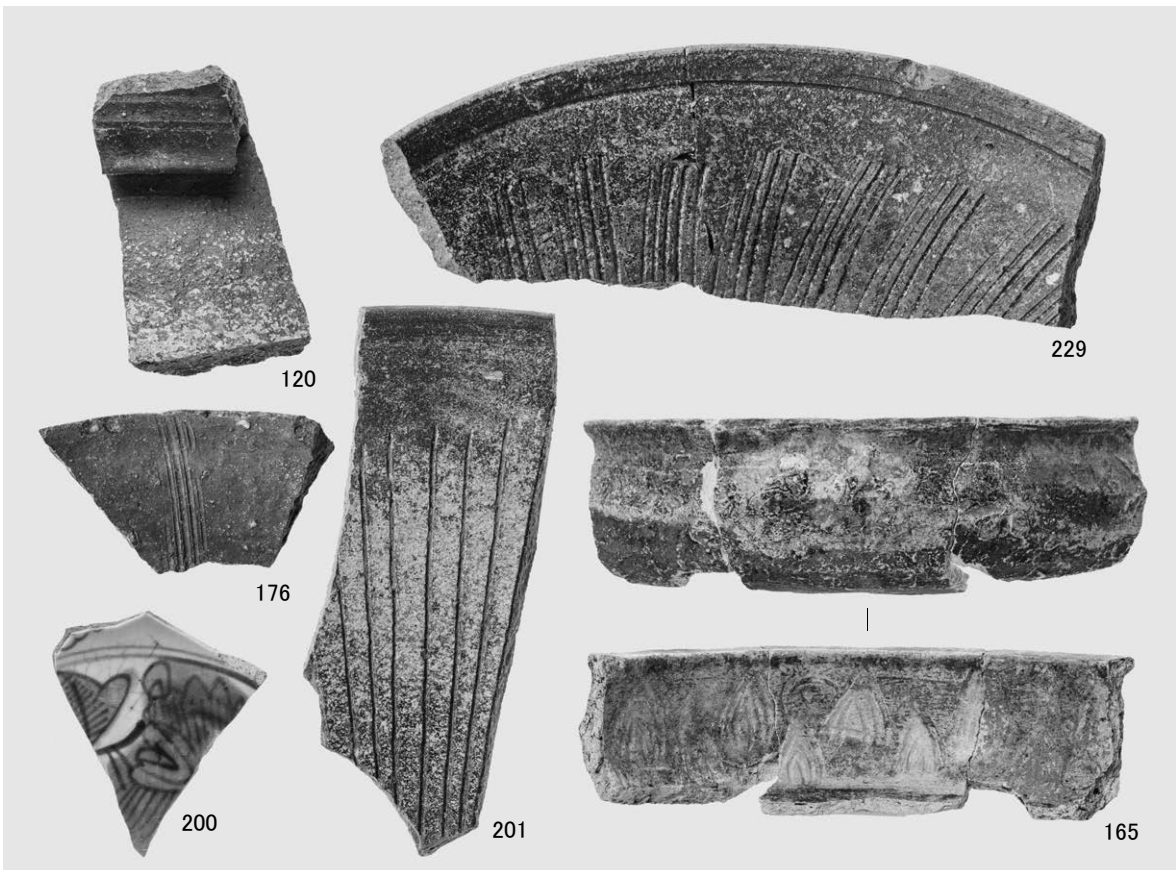
出土遺物 6



出土遺物 7



出土遺物 8



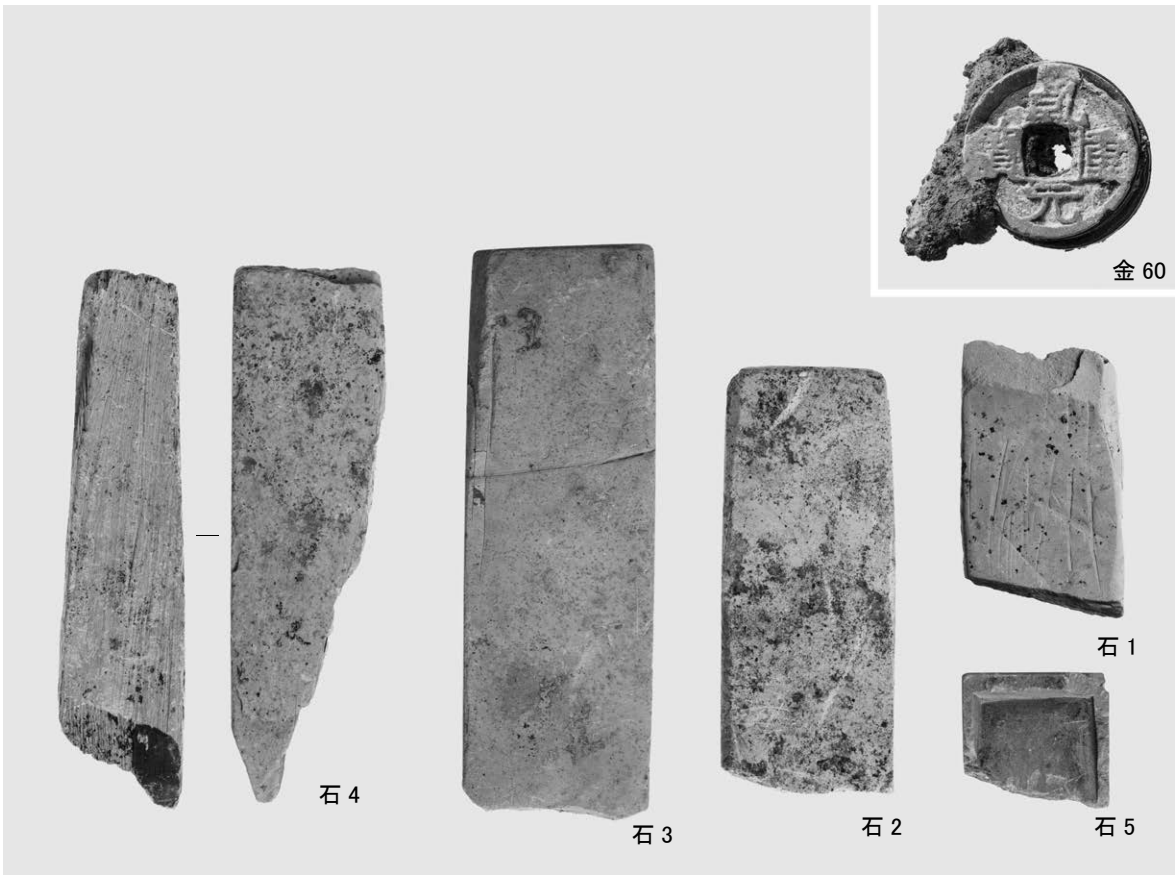
出土遺物 9



出土遺物 10



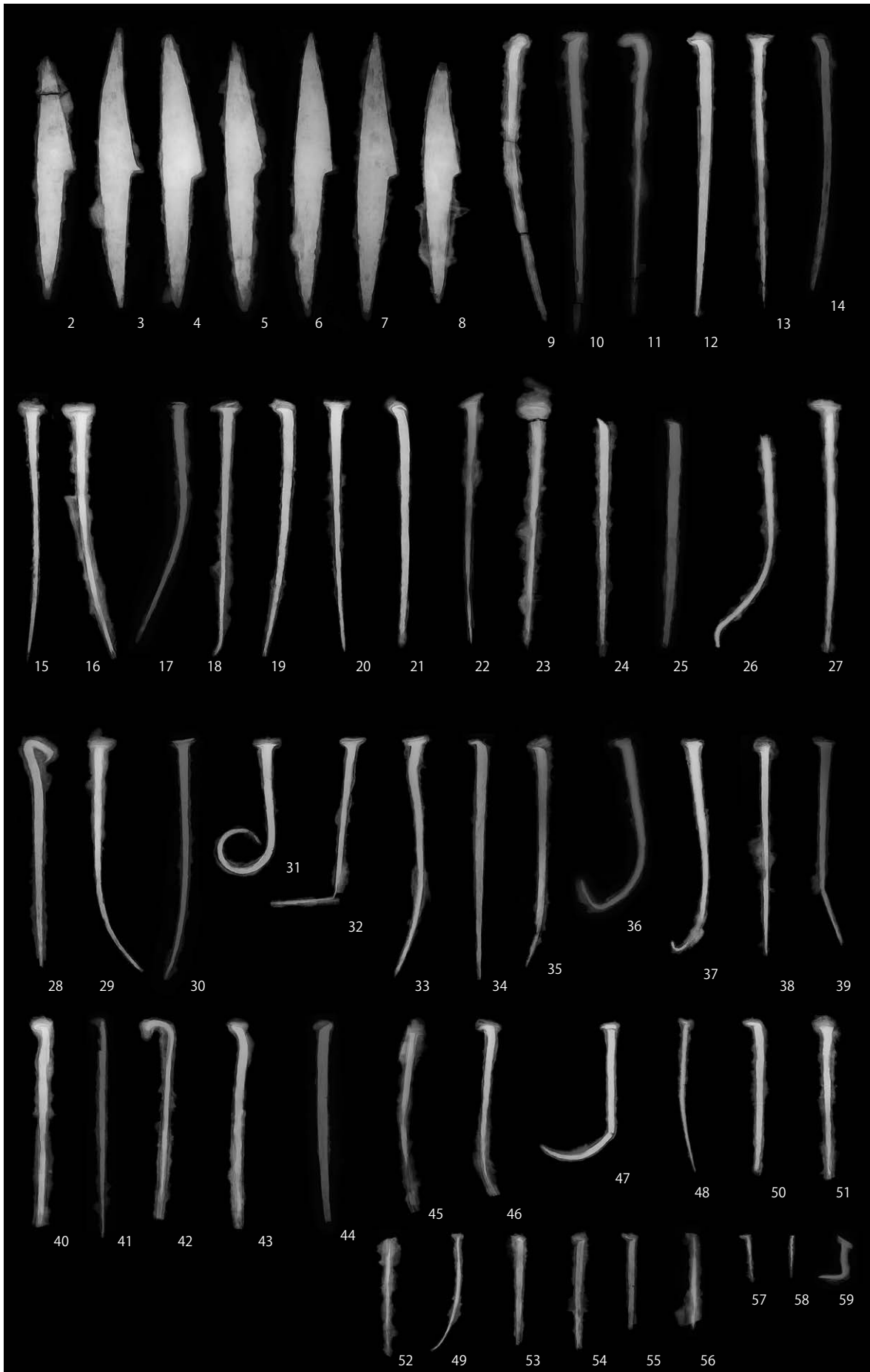
出土瓦



出土石製品



出土金属製品 1



出土金属製品 2

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうにじょうしぼうにちょうあと・からすままるたまちいせき							
書名	平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡							
シリーズ名	アルケス発掘調査報告							
シリーズ番号	1							
編著者名	持田 透							
編集機関	合同会社アルケス							
所在地	京都市山科区西野山中臣町75番地6							
発行所	合同会社アルケス							
発行年月日	西暦2019年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょう 平安京 さきょうにじょうしぼう 左京二条四坊 にちょうあと・からすま 二町跡・烏丸 まるたまちいせき 丸太町遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 おおつちょう 大津町663他	26100	1 246	35度 1分 1秒	135度 45分 41秒	2017年7月 10日～2017 年9月4日	420㎡	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
からすままるたまちいせき 烏丸丸太町遺跡	集落跡	古墳時代		土師器		平安時代後期の鳥羽天皇御所に関係する建物の雨落溝を検出した。鎌倉時代の地下室を検出し、取手金具と多量の鉄釘が出土した。また室町時代から江戸時代にかけて建物跡を検出した。		
へいあんきょう 平安京 さきょうにじょうしぼう 左京二条四坊 にちょうあと 二町跡	都城跡	平安時代	雨落溝	土師器、陶器、磁器、白色土器、瓦				
		鎌倉時代	地下室、井戸	土師器、陶器、磁器、瓦器、鉄製品、瓦				
		室町時代	掘建柱建物、井戸、土坑	土師器、陶器、磁器、焼締陶器、石製品				
	江戸時代	地下室、井戸、土坑	土師器、陶器、磁器、瓦					

アルケス発掘調査報告 1

平安京左京二条四坊二町跡・烏丸丸太町遺跡

発行日 2019年10月31日

編 集 合同会社 アルケス
発 行

住 所 京都市山科区西野山中臣町75番地6
〒607-8305 TEL 075-582-5172

印 刷 佐川印刷株式会社

